

第123図 第93号住居址床面出土土器（1は1/6他は1/3）

④ 第94号住居址（第124・125図）

遺構 本住居址は第102号住居址の南西にあり西は住居址の空白地帯となっている。

隅丸方形の落ち込みが確認され新しい時期かと考え掘り進んだが、覆土は暗褐色土で充满しており、出土遺物も縄文中期に属するものであった。

プランは隅丸方形で $6.0 \times 5.7m$ を測る。該期としては珍しい形の住居址である。

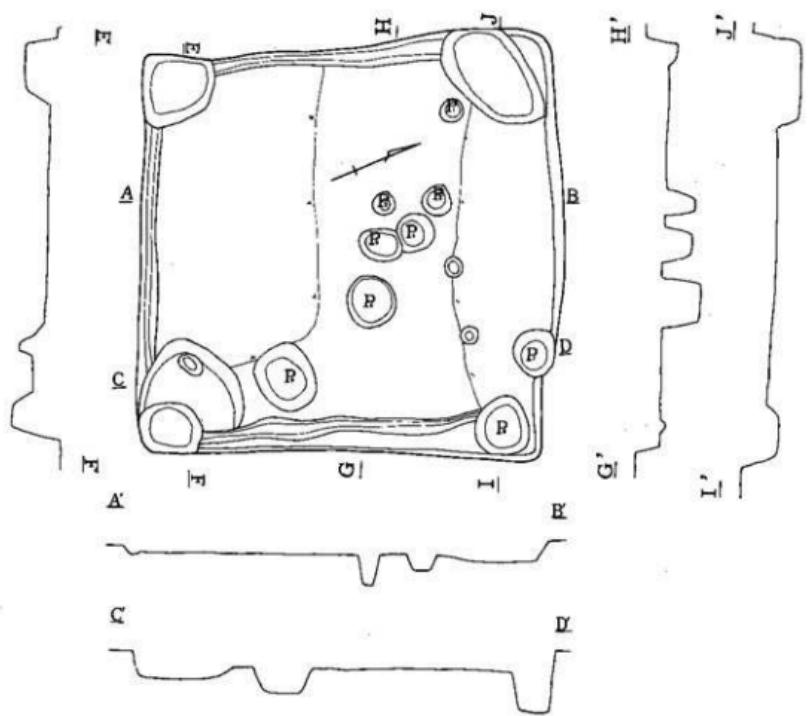
床面は中央部にタタキがみられるが北と南の壁ぎわは回くなり軟弱である。また4隅に浅い舟底状のピットがみられる。

炉は検出されていない。主柱穴も明らかなものはない。

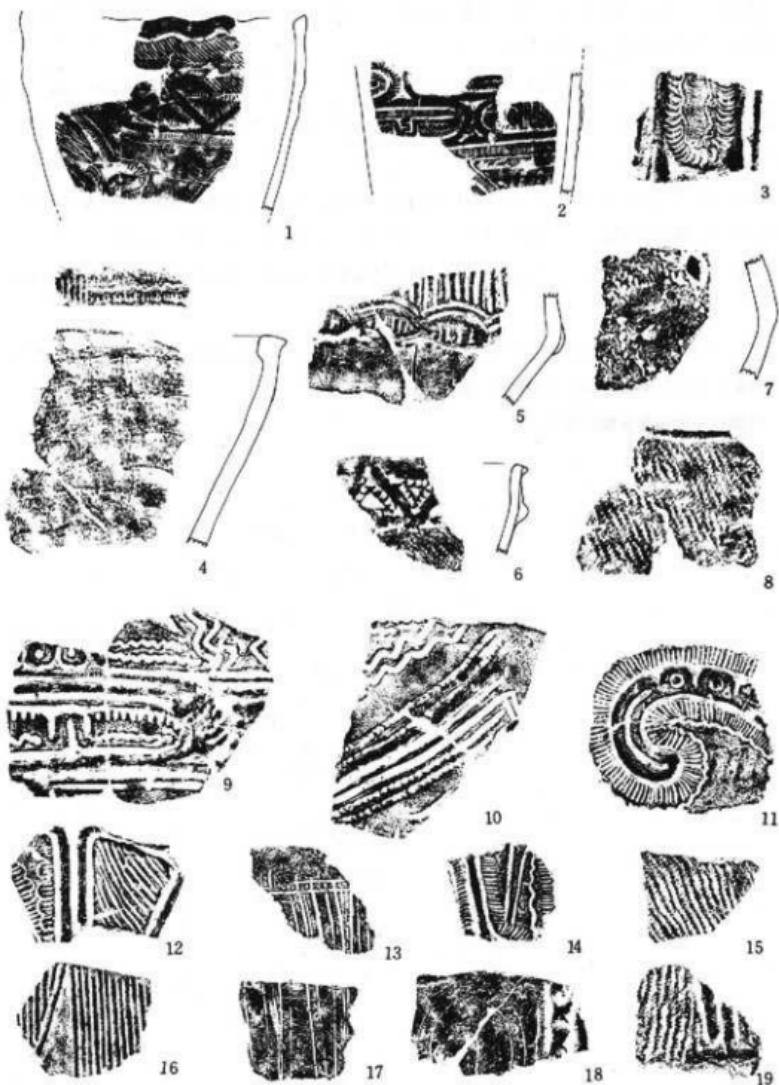
遺物 遺物が多い。土器は完形に近いものはないが大形の破片が多い。13、17は平出III A系土器である。

石器は床面より17点、覆土中4点の計21点が出土している。内訳は打製石斧10、敲打器5、横刃形石器3、磨製乳棒状石斧・大形粗製石匙・特殊磨呂各1点ずつである。

時期は中期中葉藤内1期に属する。



第124図 第94号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第125図 第94号住居址床面出土土器 (1・2は1/6他は1/3)

④ 第97号住居址（第126～129図）

造構 当住居址は第93号住居址の北東に位置し北東部は同一床面にて第103号住居址と重複する。南側は攪乱のため壁が確認できなかった。

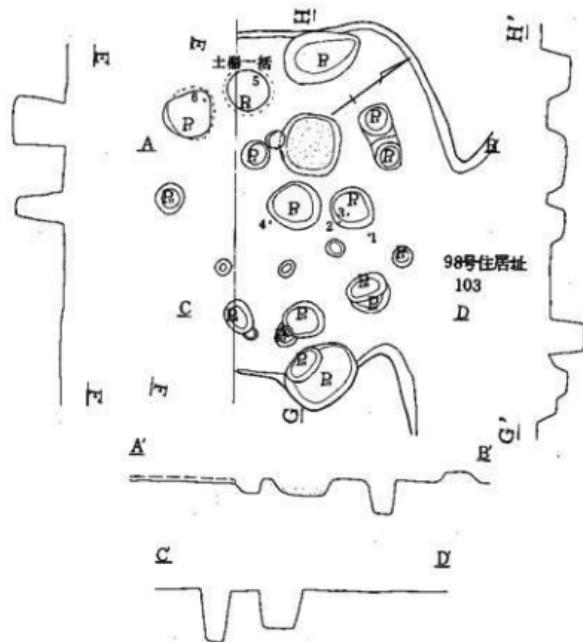
プランは不明である。壁は西と東の一部で確認できたのみである。壁高は15cm前後を測る。主軸方向はN-53°-Wであろう。炉は西壁よりにあり炉石はすべて抜かれている。掘り込みからすると石経炉の可能性が強い。

床面は全体に固くタタかれており、柱穴は6、10・11、16、17の4本と思われる。炉の西P₂の覆土中より無文の深鉢（第127図-1）、P₈より小形の深鉢（4）が出土している。

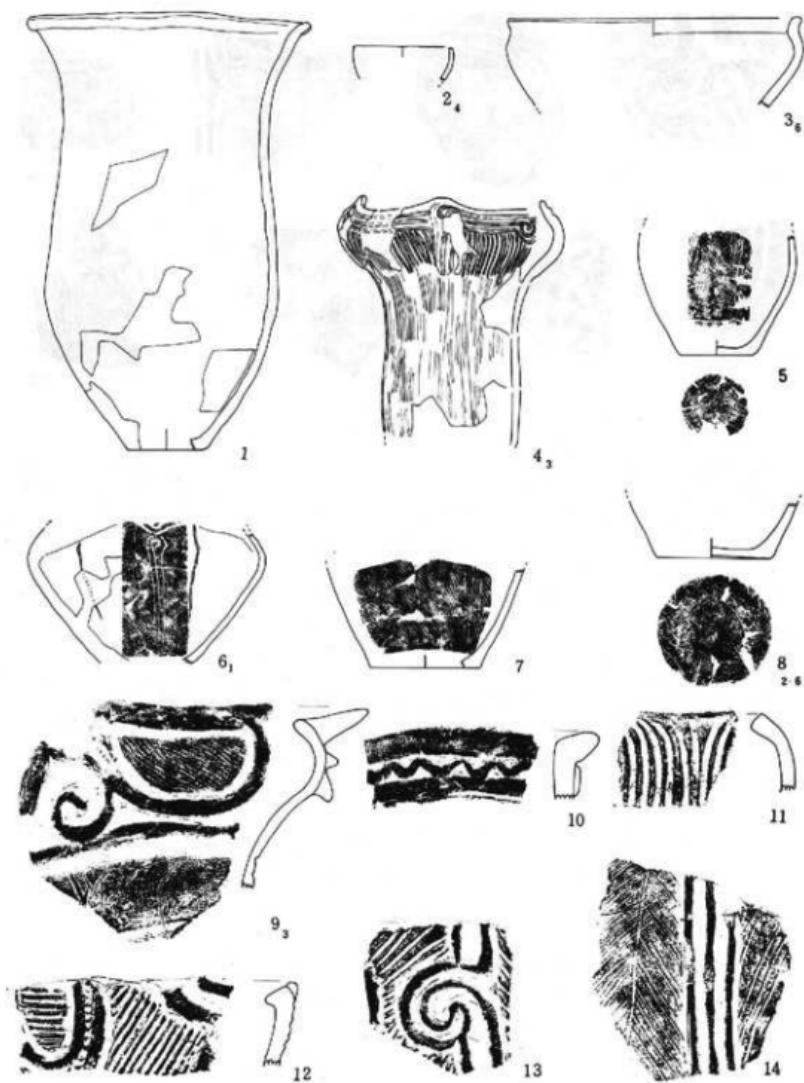
遺物 器形を知り得るものが多い。1は口唇下に隆帯をはわせた無文土器で特異なものである。
3・6は浅鉢である。

石器は床面より18点、覆土中より2点計20点が出土している。内訳は打製石斧9、敲打器5、特殊敲打器3、磨製定角石斧・磨石・凹石各1点である。

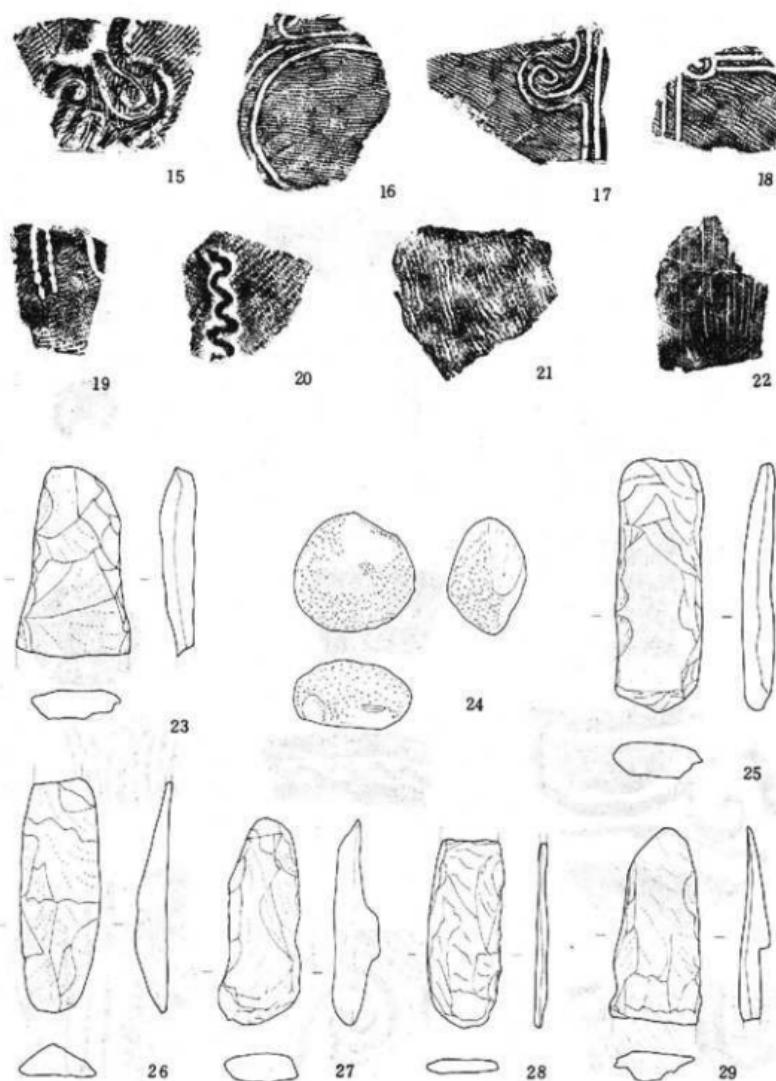
時期は中期後葉Ⅱ期に属する。



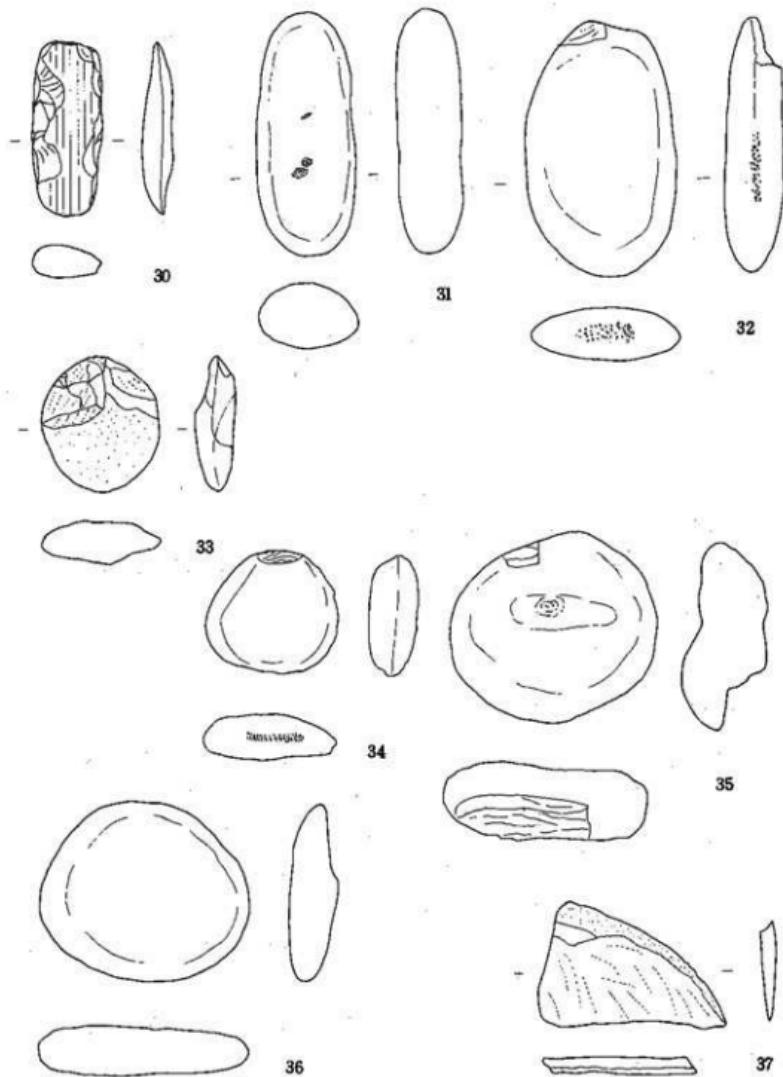
第126図 第97号住居址実測図 (S = 1/80)



第127図 第97号住居址床面出土土器 (1~8は1/6他は1/3)



第128図 第97号住居址出土遺物 (24・25は覆土他は床面、1/3)



第129圖 第97號住居床面出土石器 (1 / 3)

④ 第99号（109）住居址（第130・131図）

遺構 本住居址は第103号、108号、106号住居址の間にあり北西部は第105号住居址に切られている。北東部は第106号住居址に切られ残った部分は第100号住居址と同一床面にて重複している。壁は東側に残るのみでプランははっきりしない。広範囲に床面が確認されたため発掘時点では東側部分を第99号住居址、西側を第109号住居址として調査していたが、炉が一つしか検出されず遺物も時間差がみられないことから一つの住居址として報告することとする。

住居址の範囲が定かでないが南側は第103号住居址が切っている。

第105号住の南西部のコーナーらしき部分から東の壁までを測ると11mとなり、一つの住居址とすれば大形のものである。何軒かが重複する可能性が強い。

床面はやや凹凸があるが固くタタかれている。炉はP₈・P₉の間にあり、炉石は一部を残して抜かれている。炉穴の掘り込みが浅い所から石組炉であったと考えられる。

ビットが数多くみられるが主柱穴をどれと決め難い。P₃₀・P₃₁の西には小ビットがほぼ直線状にみられる。当住居址に伴うものではないであろう。

炉の南西隅とその南床面上に石皿が出土している。

遺物 1の外には図化できるものはない。4は複合口縁で強く外反し縄文が施されるもので、頭部が球状にふくらみ、胸部は筒形となる特徴のある壺と思われる。

石器は床面より14点、覆土中より5点の計19点が出土している。打製石斧が12点と多く、石皿・特殊磨石各2点、乳棒状石斧・大形粗製石匙・石礫各1点である。

時期は中期後葉I期に属する。

⑤ 第102号住居址（第132・133図）

遺構 本住居址は第94号住居址の北東に位置し北側にはやや離れて第116・117号住居址がある。

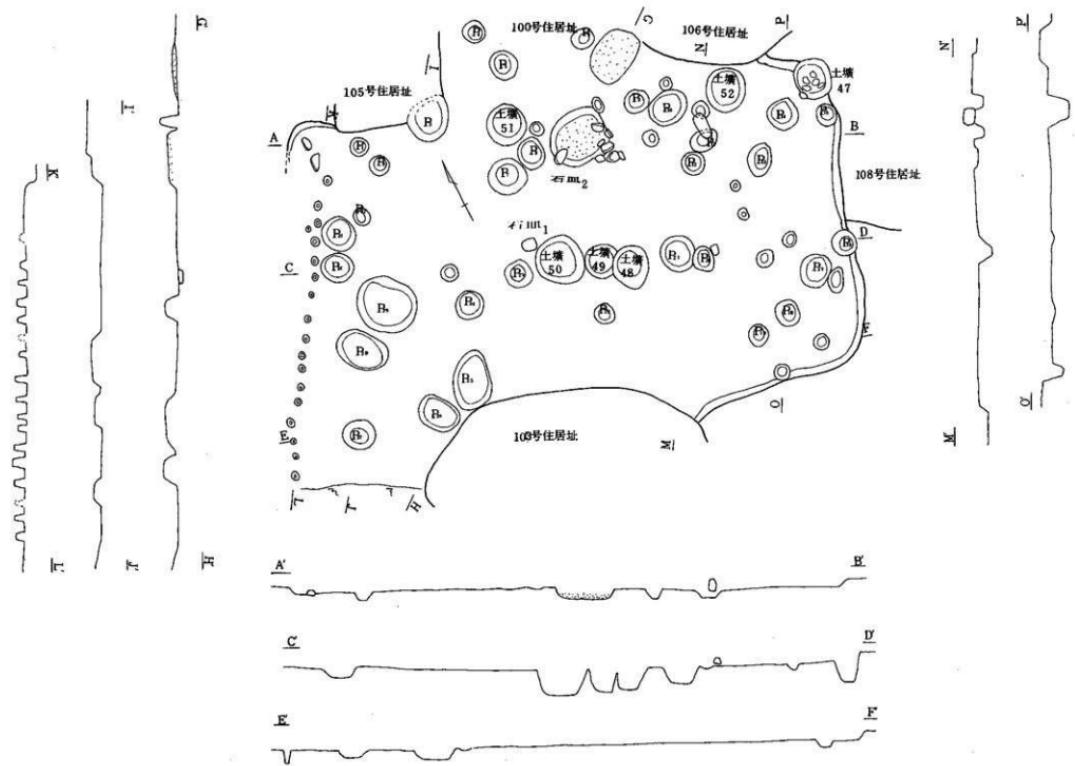
プランは椭円形を呈し、6.5×5.5mを測る。壁の立ち上がりはゆるやかで、壁高は東が高く西は低くなっている。床面は炉に向かってわずかにくぼみ固く堅緻である。

炉はやや北に偏してあり、深さ10cmほど掘り込んだ地床炉である。ビットが多くみられ建替の可能性もある。主柱穴は4本と考えられる。

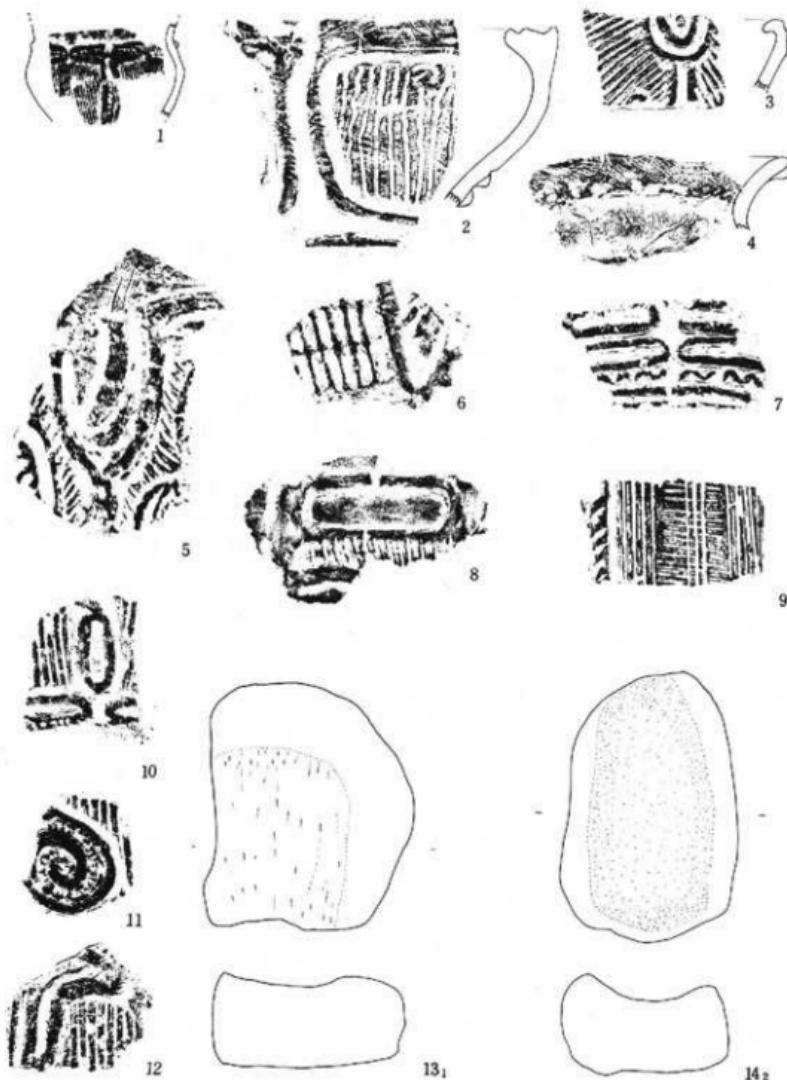
遺物 遺物は少ない。1は深鉢で粘土組を横走させ区画を作り竹管具によるはしご文や格子目文が表土される。2は小形の深鉢で全面縄文でおおわれるものである。

石器は打製石斧・蛤刃石斧・敲打器各1点計3点が床面より出土しているのみである。

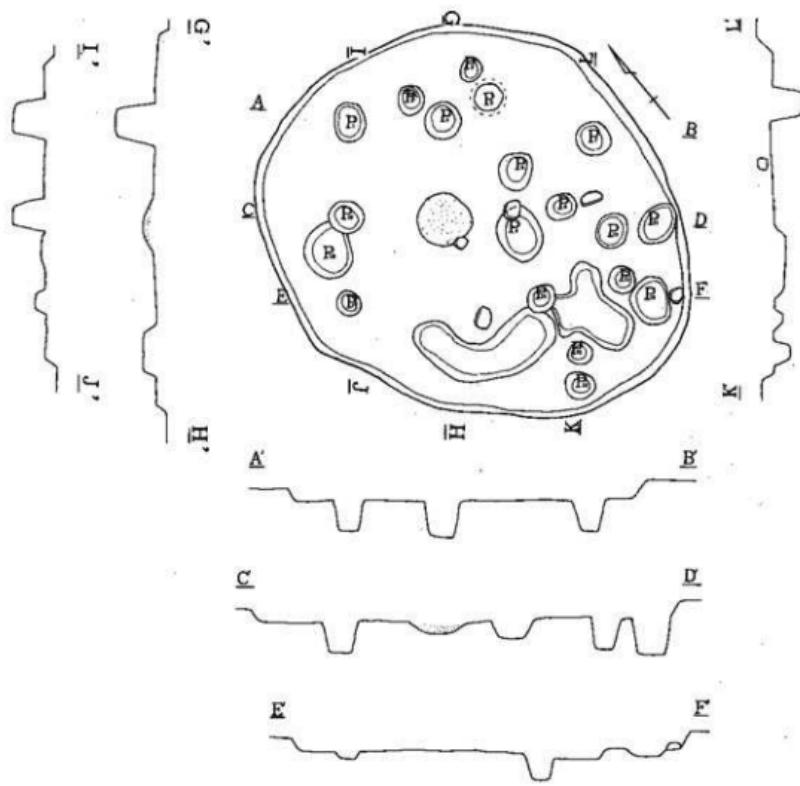
時期は中期中葉藤内期である。



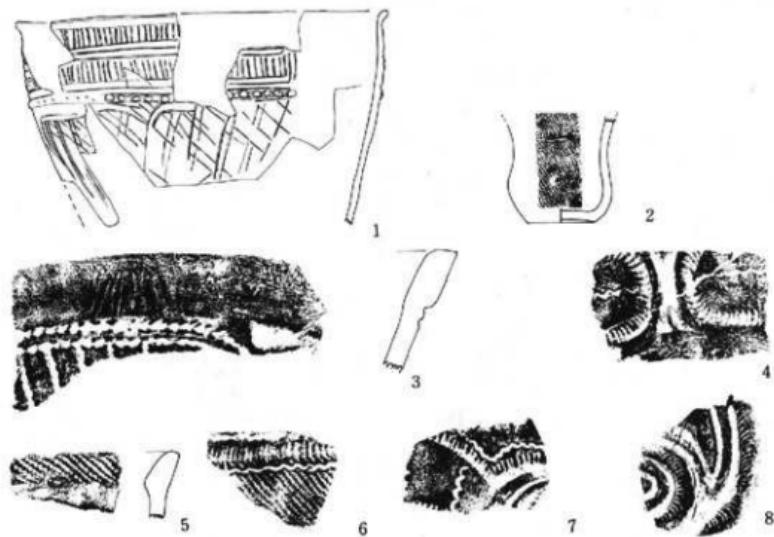
第130図 第99号（109号）住居址実測図 ($S = 1/80$)



第131図 第99号（109号）住居址床面出土遺物（1・13・14は1/6他は1/3）



第132図 第102号住居址実測図 (S = 1/80)



第133図 第102号住居址床面出土土器（1・2は1/6他は1/3）

⑥ 第103号住居址（第134・135図）

遺構 当住居址は第97号住居址と第97号住居址の間に検出されたものである。

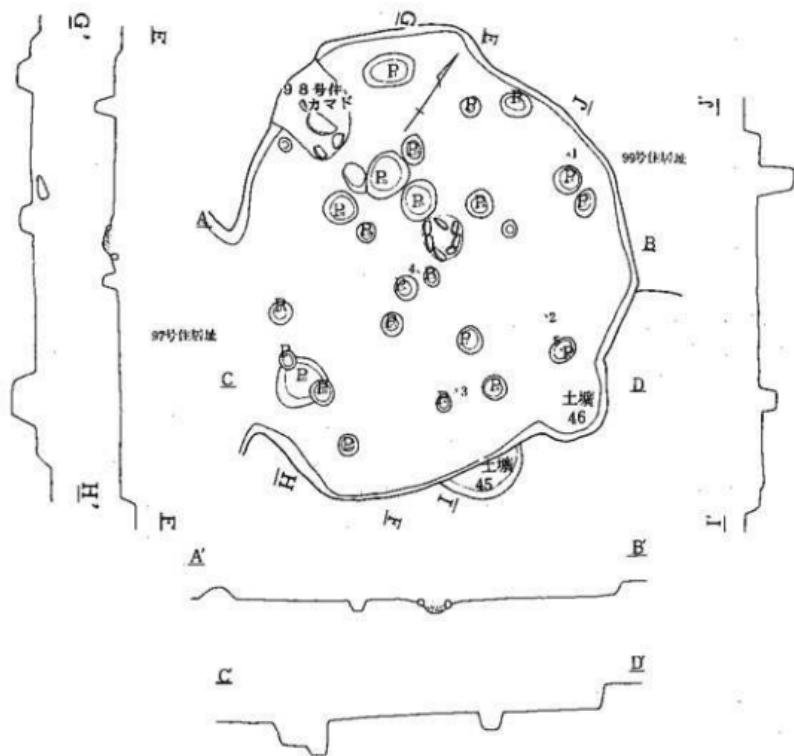
カマドを持つ第98号住居址が重って検出されている。貼床があったものと考えられるが、はつきりとした痕跡はみとめられなかった。第103号住居址の覆土をタタいて構築したものと考えられる。西は同一床面にて第97号住居址と重複する。

現況の壁は円形を呈しており、当時のものであると考えられる。規模は6.2×5.7mを測り、主軸方向はN-56°-Wであろう。

床面は炉に向かってくぼくなり固くタタかれており良好である。炉は中央やや北寄りにあり、楕円形石組炉である。南東部の炉石のみ横長にすえられている。内部には口縁を欠く小形深鉢（第135図-1）が埋設されている。

柱穴は第98号住居址のものもあり決め難いが、多柱穴と考えられる。

P₆の内部より土偶の頭部（3）が出土している。



第134図 第103・98号住居址実測図 ($S = 1/80$)

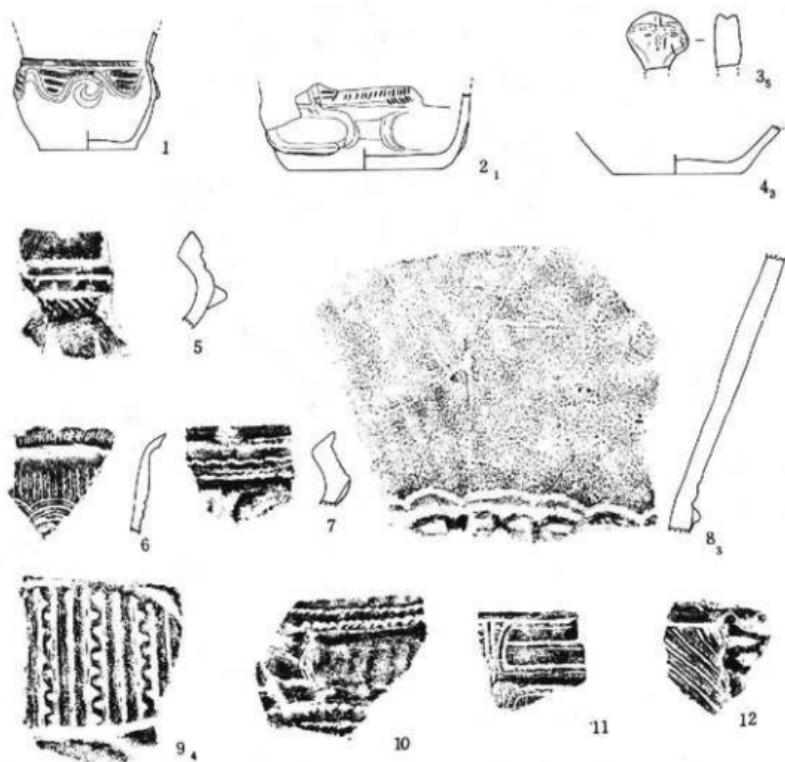
遺物 土器・石器とも少ない。1は炉内埋設土器で口縁部を欠いている。口縁部は無文である
3の土偶は断面滑車状の扁平な頭部で珍しい。顔面にはいれずみが施文されている。

土器は打製石斧2、大形粗製石匙1、横刃形石器1の4点すべて床面出土である。

④ 第106号住居址（第136～140図）

遺構 当住居址は第108号、第113号、第115号、第99号住居址にはさまれた位置にあり、西側には住居址がみられない。

プランはくずれているが五角形を呈すと思われる。規模は $5.3 \times 5.0\text{m}$ を測る。周溝があるが、



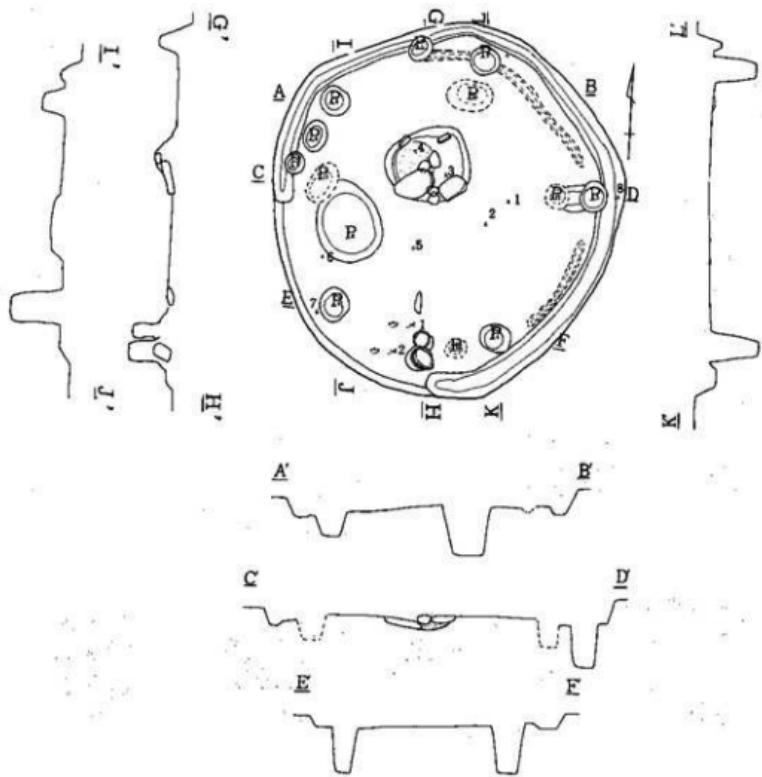
第135図 第103号住居址床面出土土器 1は炉内埋設土器（1～4は1/6他は1/3）

南東部にはみられない。東から北にかけて周溝の内側に貼床された周溝がある。又P₁₀、P₁₂、P₁₃と貼床されたピットが検出されており東側に拡張されたものである。旧住居址も五角形と考えられ、周溝で測ると4.9×4.5mである。

壁高は北東部が高く南西に向かって低くなる。床面は固くタタかれ堅緻で炉周辺がわずかに凹くなる。主柱穴は5本と考えられP₅を除くとすべて建替に伴い移動している。

炉は中央北寄りに偏し、炉石は抜かれている。南側に炉にかぶさるように石がみられる。炉石の一部であろう。掘形からすると掘炬煙状石圓炉であったと思われる。

P₄とP₅の中間壁ぎわに正位の埋甕が2個検出されている。内側の埋甕1（第138図-2）を一



第136図 第106号住居址実測図 ($S = 1/80$)

部壠して外側の埋甕2(第137図-1)が埋設されている。両者非常に似た土器で時間差はみられない。埋甕2には石がのせられている。

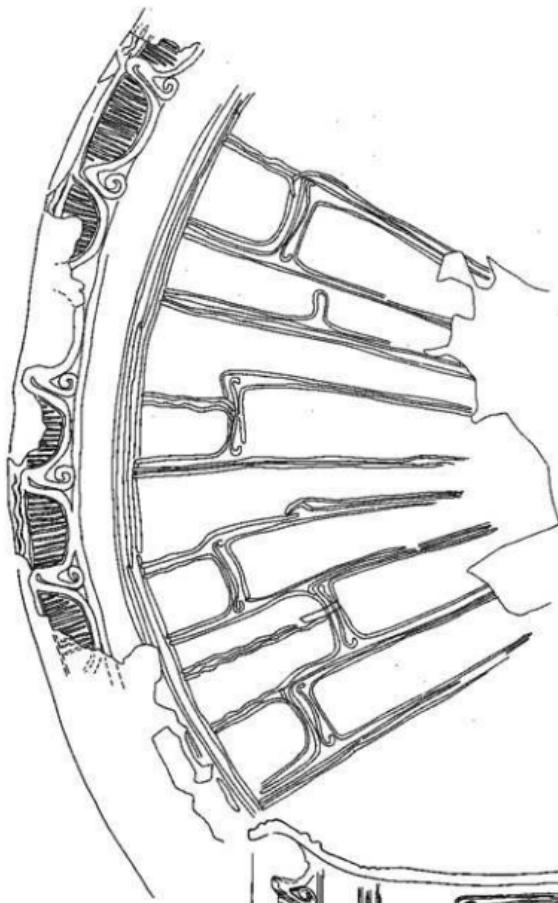
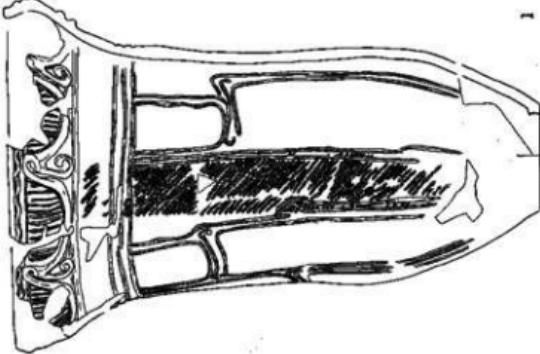
遺物 土器は多く出土しているが埋甕以外には完形に近いものはない。1・2は埋甕で1は底部を2は胴下部を欠いている。ともに口縁部に櫛形文を配し、胴部は縄文地に入組文等が施される。

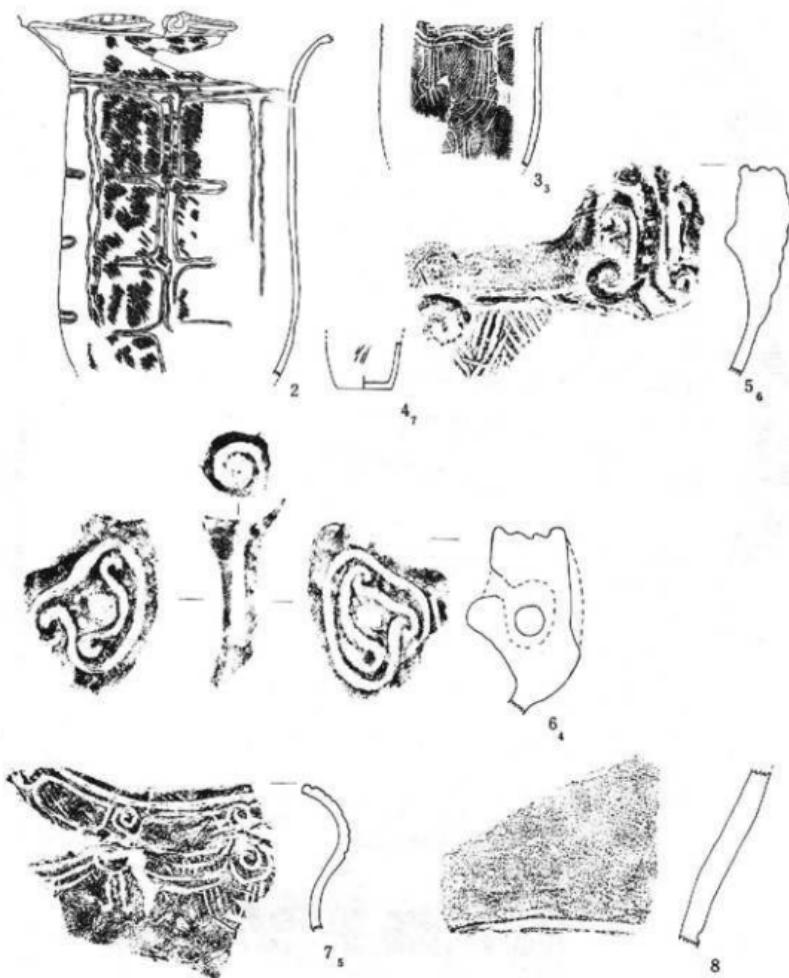
石器は床面より11点覆土中より8点の計19点が出土している。内訳は打製石斧11、特殊磨石4、大型粗製石匙2、磨製蛤刃石斧・敲打器各1点である。

時期は中期後葉II期に属する。

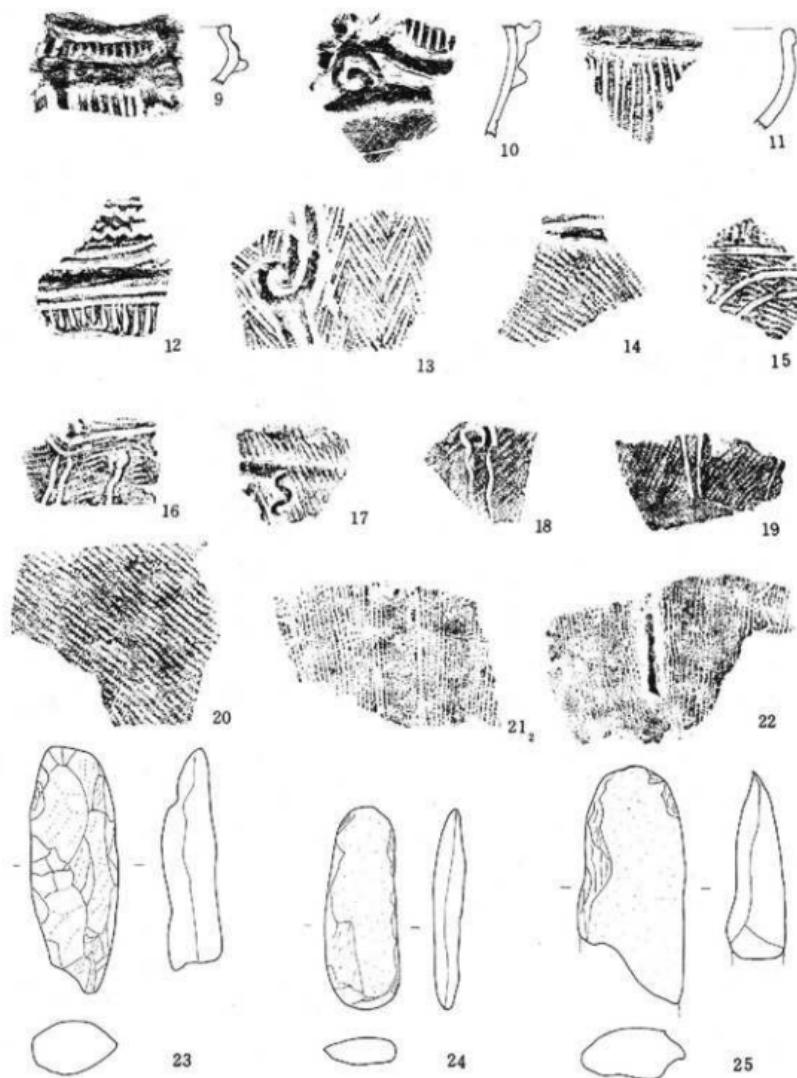
第137図 第106号住居世綱彌2 (1/6)

1

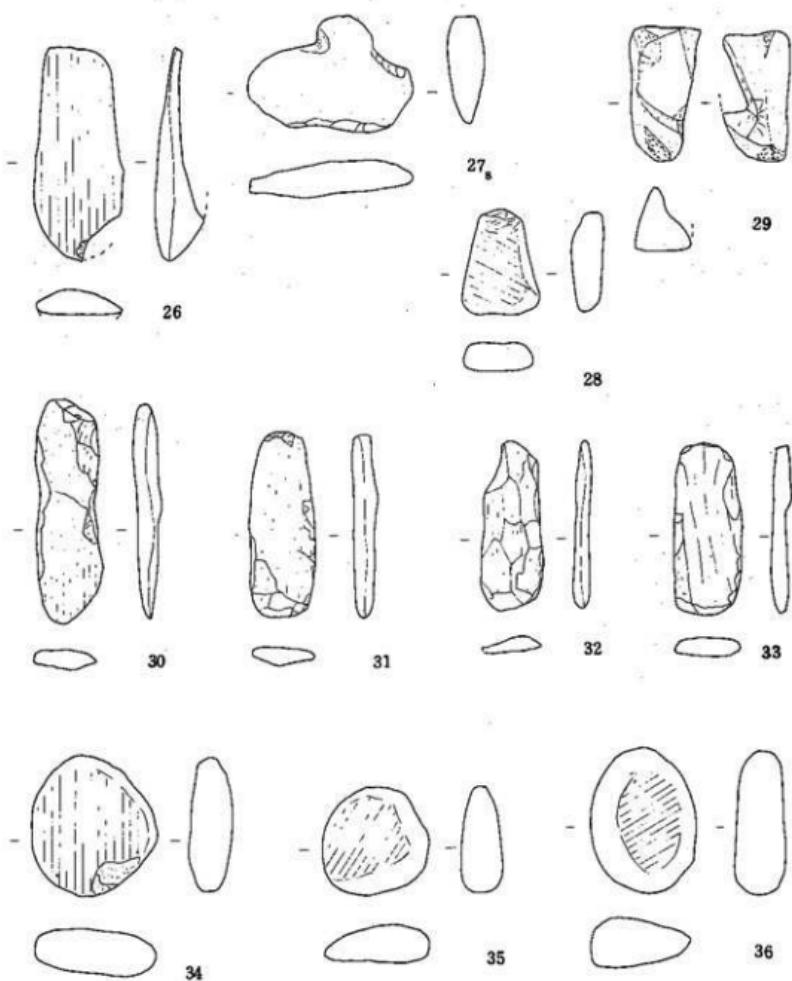




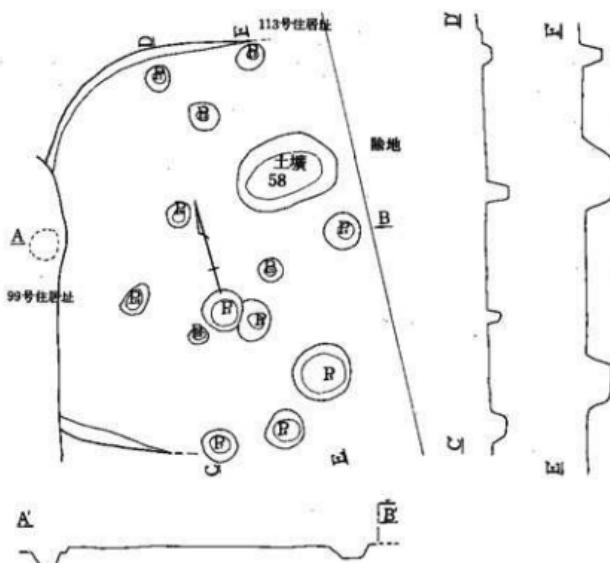
第138図 第106号住居址床面出土土器（2は埋甕1、2～4は1/6他1/3）



第139図 第106号住居址出土遺物（9～22は床面他は覆土、1/3）



第140図 第106号住居址出土石器 (26~29は覆土他は床面、1/3)



第141図 第108号住居址実測図 ($S = 1/80$)

④ 第108号住居址 (第141・142図)

遺構 本住居址は第110号住の北にあり、北側で第113号住居址を切っている。西側は第99号住居址に切られているが重複関係は定かでない。東側は調査地区外で未調査である。

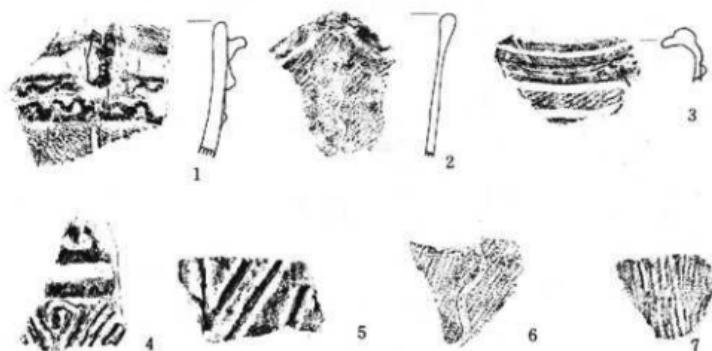
プランは隅丸形を呈すと思われるがはっきりしない。南側は壁がみられない。床面は平坦で堅緻である。規模は南北推定5.8mを測る。

炉は検出されていない。柱穴もはっきりとしていない。 P_3 ・ P_8 ・ P_9 が考えられる。

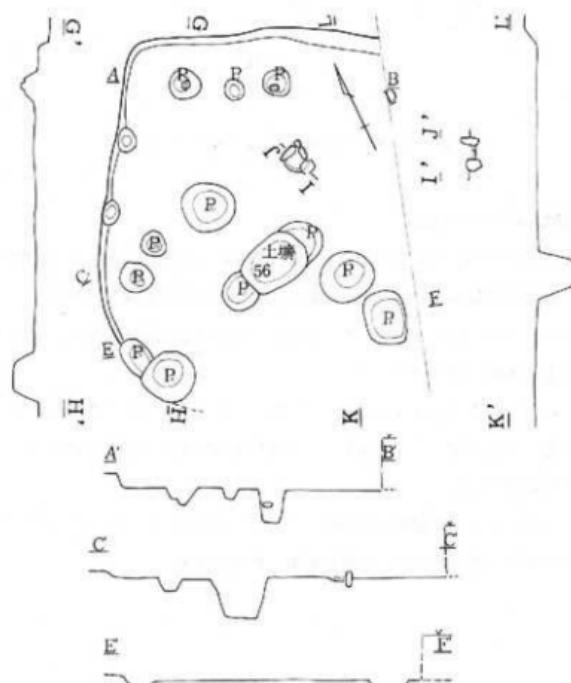
遺物 土器・石器ともに少ない。土器はすべて小破片で器形を知り得るものはない。2は薄手で口唇が肥厚し波状口縁となる。

石器は床面より打製石斧4、特殊磨石、横刃形石器各1点の計6点が出土しているのみである。

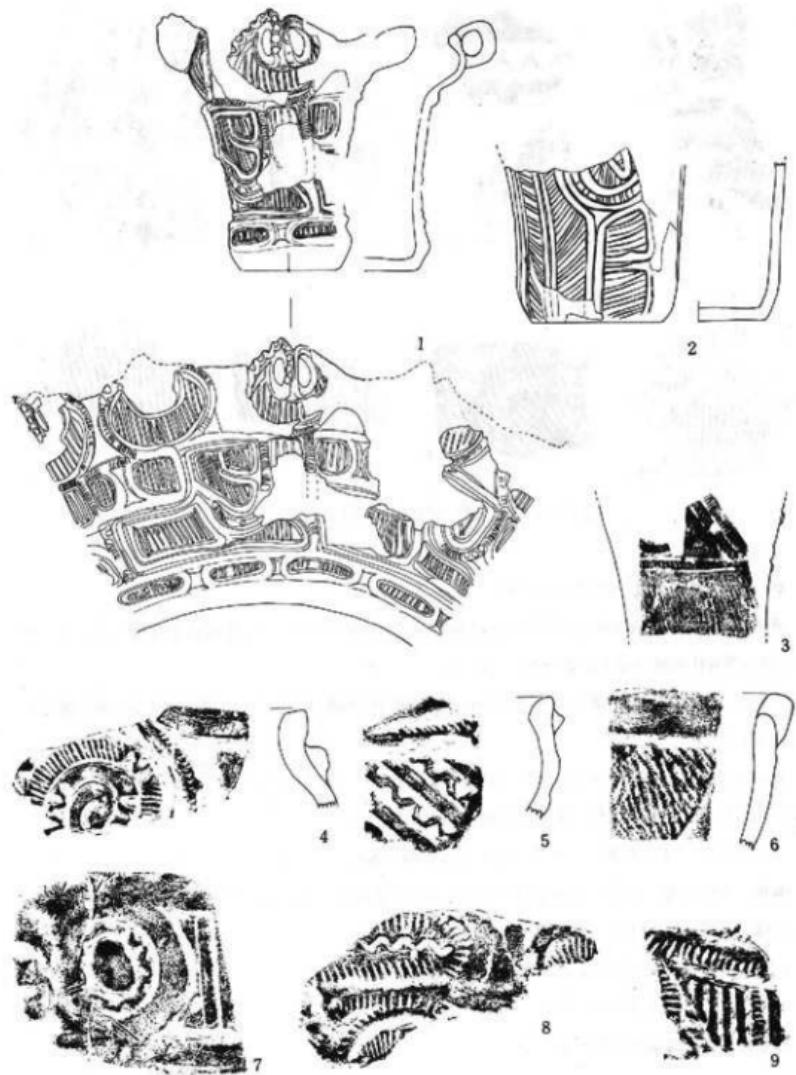
時期は出土土器が少なく決め難いが、中期後葉I～II期に属する。



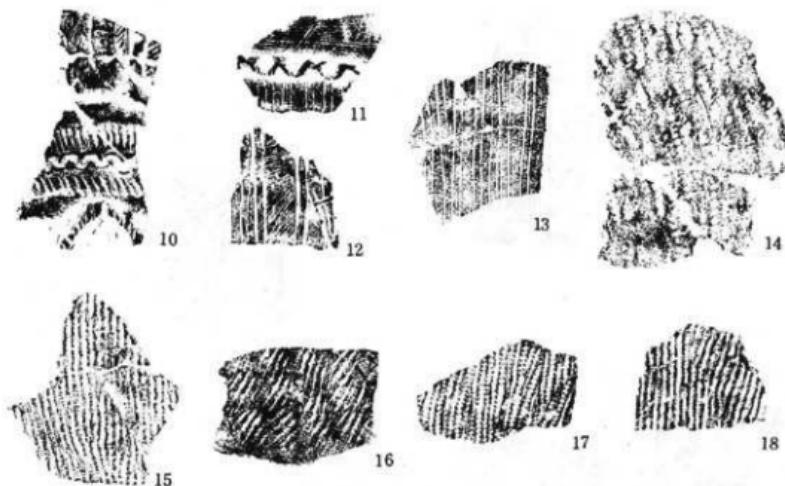
第142図 第108号住居址床面出土土器 (1 / 3)



第143図 第110号住居址実測図 (S = 1 / 80)



第144図 第110号住居址床面出土土器 (1～3は1/6他は1/3)



第145図 第110号住居址床面出土土器（1/3）

④ 第110号住居址（第143～145図）

遺構 本住居址は第108号住居址の南にあり西には第99号・第103号住居址が近接している。東側は第108号住居址同様未調査となっている。

プランは定かでないが隅丸方形と思われる。南側は壁が確認できないが推定南北5.4mを測るものと思われる。

壁高は15～20cmほどで立ち上がりはゆるやかである。床面は平坦で固く良好である。炉は北に偏しており、方形の石組炉で南西側の炉石が抜かれている。

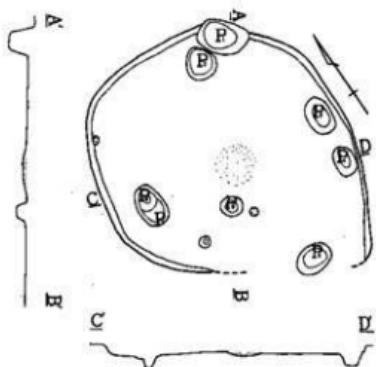
主柱穴はP₁、P₁₉が考えられるが何本かは不明である。

遺物 土器は多く出土し器形を知り得るものが3個ある。1はみみずく状把手を4個持つ小形の深鉢である。2・3もともに小形の深鉢である。

11・13は半截竹管具を用いた平出III A系土器である。

石器はまったく出土していない。

時期は中期中葉藤内II期に属する。



第146図 第112号住居址実測図 (S = 1/80)

④ 第112号住居址（第146図）

遺構 当住居址は第115号住居址の北東に近接している。

プランは不整の円形を呈し、 $3.6 \times 3.6\text{m}$ とやや小ぶりな住居址である。壁高は10cm前後と浅く、南側は一部壁を検出できなかった。主軸方向はN-20°-Eである。

床面は平坦で炉付近は固いが、壁ぎわのタタキはあまり顕著でない。炉はほぼ中央にあり、地床炉である。

主柱穴は2、3、5、8の4本が考えられるが不規則である。

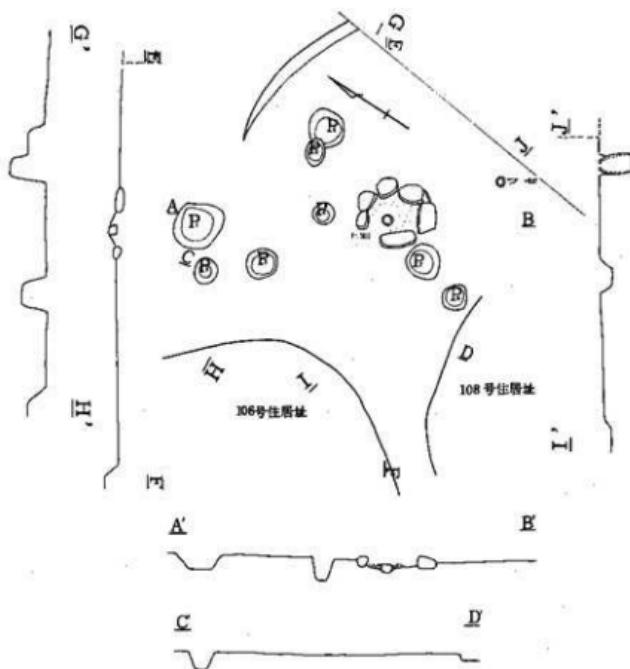
遺物 遺物は少ない。土器は井戸尻期の小破片がわずか出土したのみである。石器も敲打器1点が床面より出土しているだけである。

⑤ 第113号住居址（第147・148図）

遺構 本住居址は第106号住居址に西を第108号住居址に南側を切られている。北にはやや離れて第112号住居址がある。

第108号住居址同様東側は未調査である。壁は北で一部確認できたのみでプランははっきりしないが円形を呈すであろう。規模は不明である。

床面は炉に向かってやや凹くなり固くタタかれ良好である。炉は円形の石組炉で西側に一部炉石のみられない所がある。抜きとられたもののかははっきりしない。内部には小形の深鉢（第148図-2）が埋設されており、口頭部を欠いている。



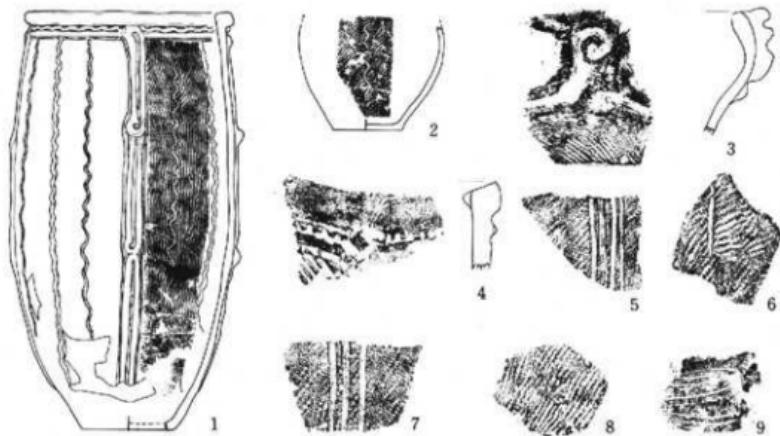
第147図 第113号住居址実測図 ($S = 1/80$)

主柱穴は P_s , P_s の 2 本があるが南側は不明である。炉の南東 1 m の所に逆位の埋設土器(第148 図-1)がある。底部を欠いている。

遺物 埋甕と炉内埋設土器以外は器形を知り得るものはなく小破片である。1 の伏甕は砲弾型を呈す特異なもので、口縁は複合口縁でその下部に粘土組を横走させ 4 条の隆帯人面文を配して、網文が充填され 3 条の蛇行沈線が懸垂される。胎土・焼成とも良好で優品である。

石器は床面より 13 点が出土している。内訳は打製石斧 7 、敲打器 5 、磨製の始刃石斧 1 点である。

時期は中期後葉 I 期の新しい時期と考えたい。



第148図 第113号住居址床面出土土器（1は伏壺・2は炉内埋設土器、1・2は1/6他は1/3）

④ 第115号住居址（第149、150図）

遺構 当住居址は第112号住居址の南西に近接し、南には第106号住居址がある。

掘り込みははっきりせずプランは不整椭円形を呈す。規模は $5.7 \times 4.9m$ を測り、主軸方向は真北である。

床面は壁ぎわがややくぼみ全体に軟弱である。炉は中央やや北に偏し楕円形の地床炉である。主柱穴は定かでない。

遺物 遺物は少ない。土器はすべて小破片で器形を知り得るものはない。

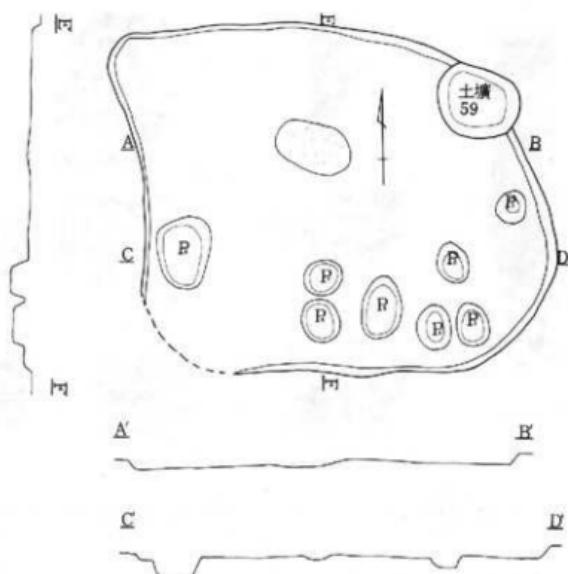
石器は打製石斧、石錐、敲打器、圓石各1の計4点が出土するのみである。

⑤ 第116号住居址（第151、152図）

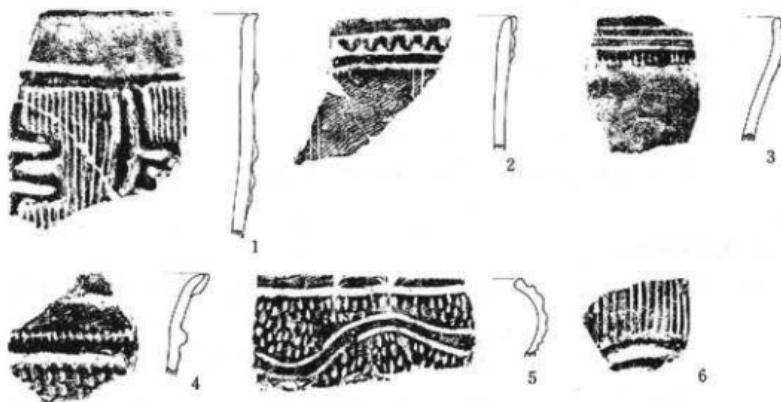
遺構 本住居址は段丘端部より中央に位置し、南には第117号住居址、北には第118号、121～123号住居址がある。

プランは円形を呈し、 $5.0 \times 5.0m$ を測り、主軸方向はN-42°-Eであろう。

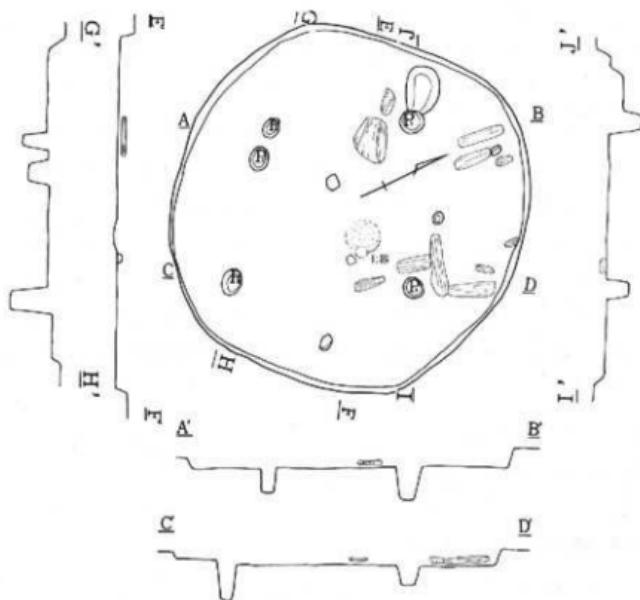
壁高は15～20cmで北側が高くなる。壁の立ち上がりはゆるやかである。住居址の北を中心に炭化材がみられ焼失家屋である。



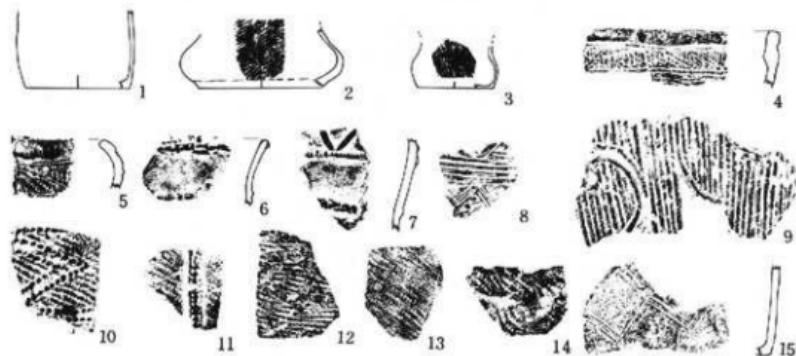
第149図 第1115号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第150図 第1115号住居址床面出土土器 (1/3)



第151図 第116号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第152図 第116号住居址床面出土器 (1~3は $1/6$ 他は $1/3$)

床面はほぼ平坦で固く堅緻である。炉はほぼ中央にあり、径50cmほどの円形の地床炉である。主柱穴は4本である。

炉東にやや浮いて小形の無文の土器底部が出土している。

遺物 遺物は土器のみである。量は少ないが好資料である。

1は小形の深鉢で無文で薄手づくりである。2・3は1同様薄手づくりで胎土も精練されている。胴下部が極端にふくらむもので2は壺と思われる。ともに単節斜縄文が施される。同様の胎土のものに6・7がある。やはり薄手づくりで、6は口縁部破片で外反する。口唇下と頸下部に刻みを持つ粘土組が施される。7は6と同一個体と考えられる。以上の土器は関西地方の大歳山式土器である。

他の土器は前者に比べやや厚手である。4・5は口縁部破片で4は格子目文が表出されている。5は口縁が内屈し縄文地に竹管による沈線文が施される。10・11は縄文地に浮隆線文を配するものである。

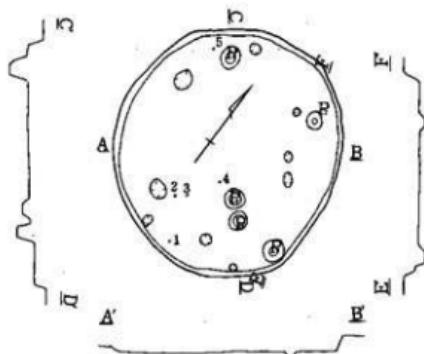
石器はまったく出土していない。

時期は前期最終末に位置づけられるであろう。

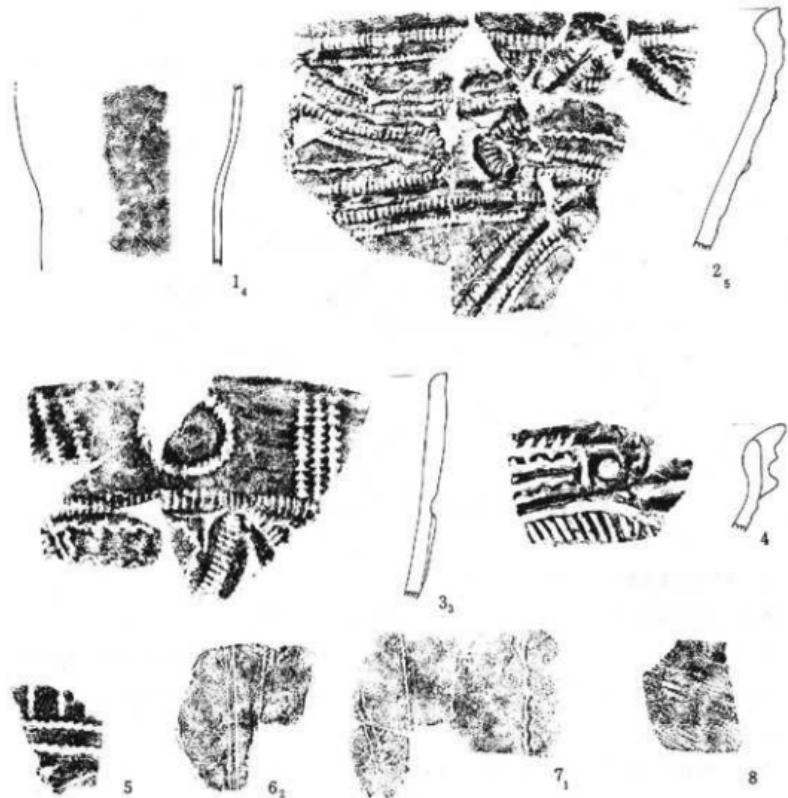
④ 第117号住居址（第153、154図）

遺構 本住居址は第116号住居址の南に近接している。

プランは梢円に近い円形で規模は3.6×3.2mを測る。壁の立ち上がりはゆるやかで、壁高は北



第153図 第117号住居址実測図 (S = 1/80)



第154図 第117号住居址床面出土土器（1は1/6他は1/3）

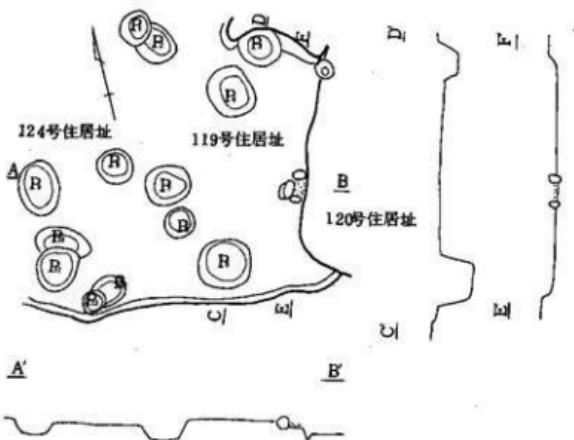
で20cm前後とやや高く南では10cm内外と低くなっている。

床面は不規則な小ピットが多く穿れている。壁ぎわはタタキがあり顕著でなく軟弱である。炉の痕跡は全く検出できなかった。主柱穴は1・2・4の3本があり南西部にはみられない。南に寄って遺物が出土している。

遺物 土器は少ないが大形破片がある。1は深鉢で全面に縄文が施される。2は口縁が内屈する大形の深鉢である。6・7は平出ⅢA系土器である。

石器は覆土中より打製石斧2・磨製定角石斧1・敲打器2点の計5点が出土している。

時期は中期中葉新道期である。



第155図 第119号住居址実測図 ($S = 1/80$)

◎ 第119号住居址 (第155図)

遺構 本址は第112号住居址の北にあり、やや離れている。

東にある第120号住居址に炉の東を切られ西側は第124号住居址は同一床面にて重複しており、住居址の形態はとどめず、炉のみ残されたものである。規模は南北3.9mと考えられる。

炉は方形の石組炉であろう。

遺物 遺物は大形粗製石匙1点のみである。

時期は不明である。

◎ 第121号住居址 (第156~160図)

遺構 本住居址は第123号住居址の北東に位置しており、北東側台地内部には縄文時代の住居址は検出されていない。集落の内縁と考えられる。

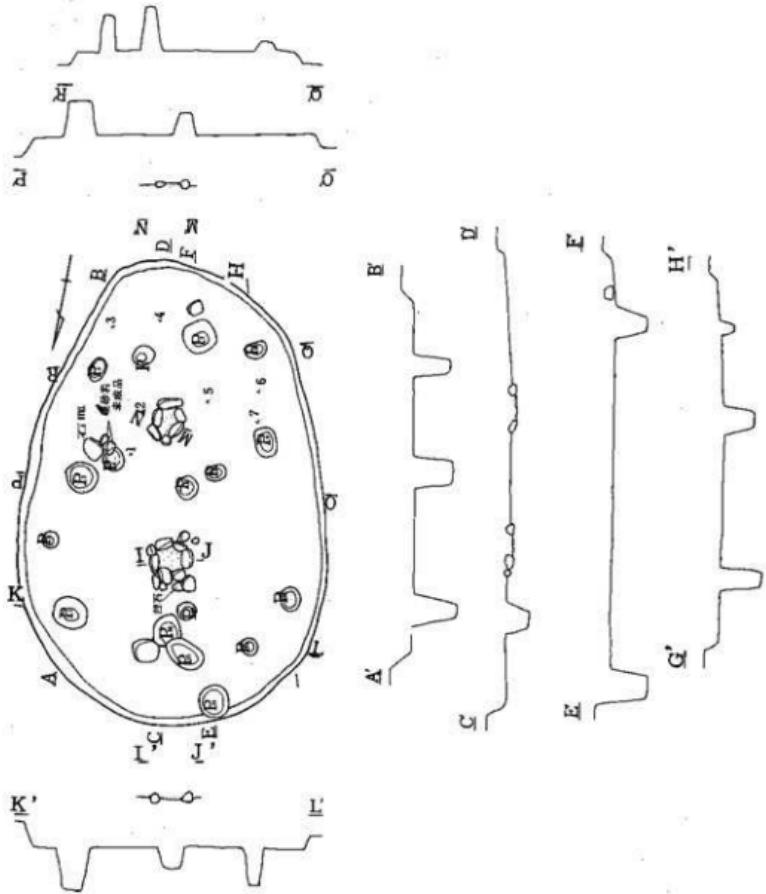
炉が2箇所に検出され重複の可能性もあるが、壁や床にその痕跡がみられないため、一応一つの住居址として報告しておくこととする。

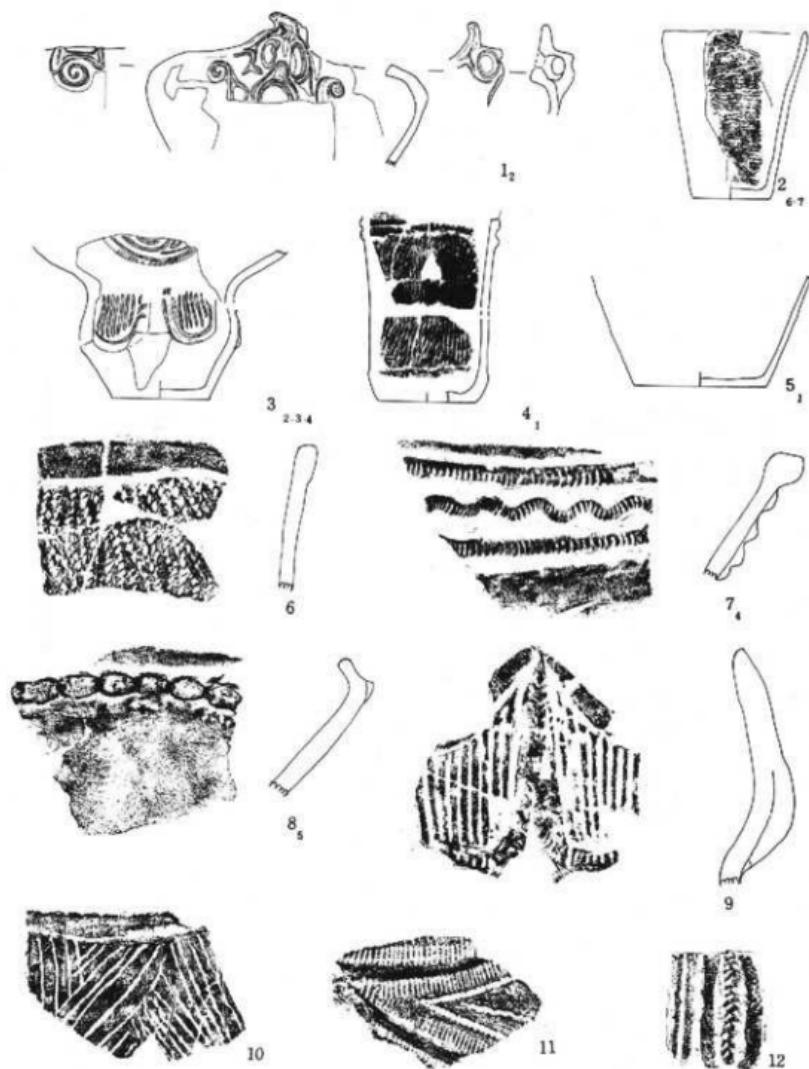
プランは橢円形で規模は $6.6 \times 4.3\text{m}$ を測る。壁の立ち上がりはゆるやかで壁高は北側で25cm、南に行くに従い低くなり10cm前後である。

床面は中央部に向かってわずかに凹み、固くタタかれ堅緻である。

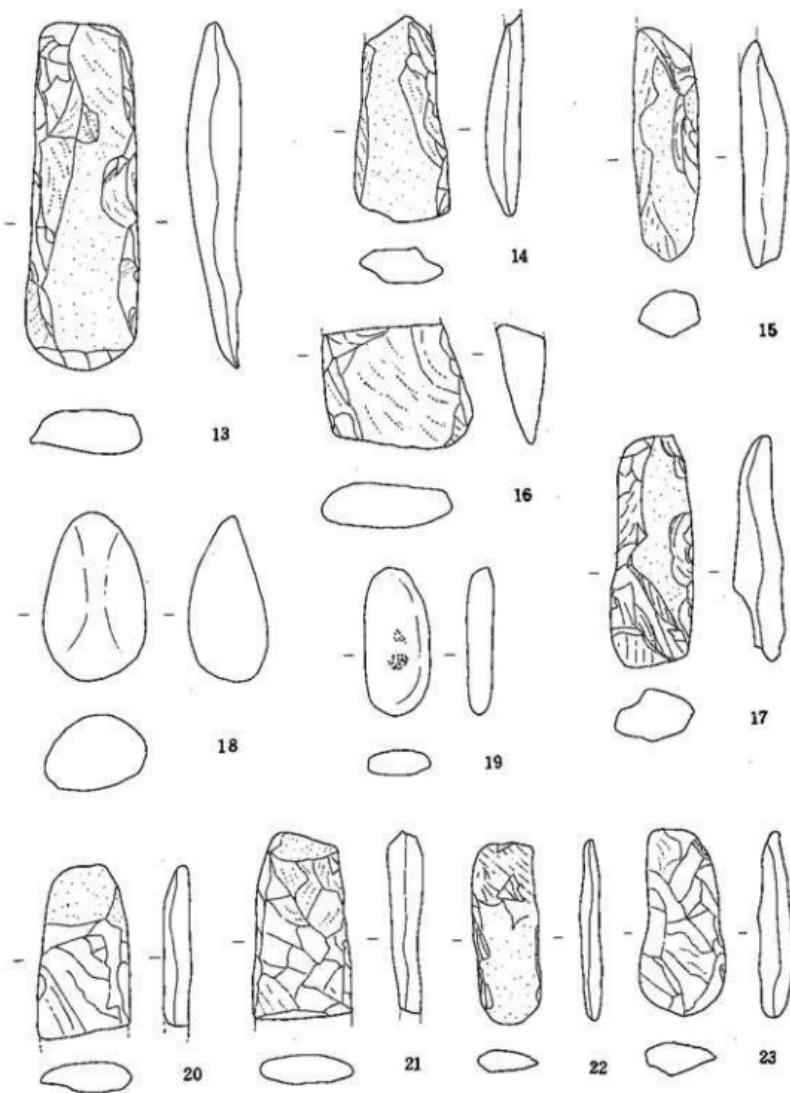
炉は中央北寄りと南寄りの2箇所にある。ともに円形の石組炉である。北の炉は一部二重に炉

第156図 第121号住居址実測図 (S = 1/80)

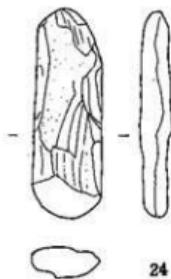




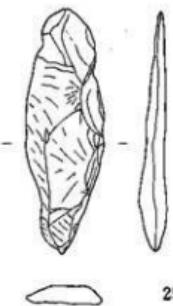
第157図 第121号住居址床面出土土器（1～5は1/6他は1/3）



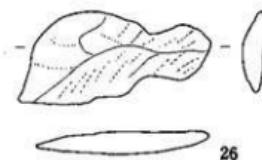
第158図 第121号住居址出土石器 (13~19は覆土他は床面、1/3)



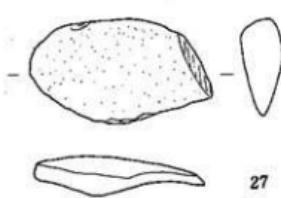
24



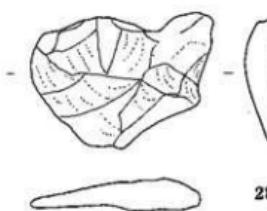
25



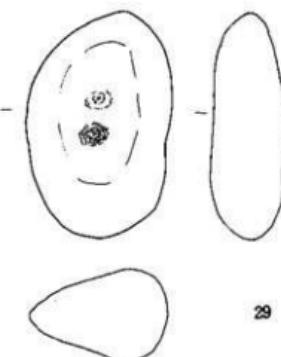
26



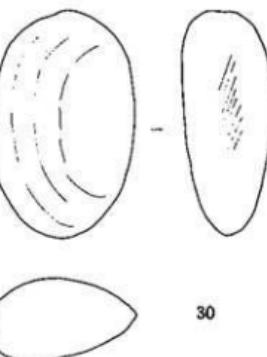
27



28

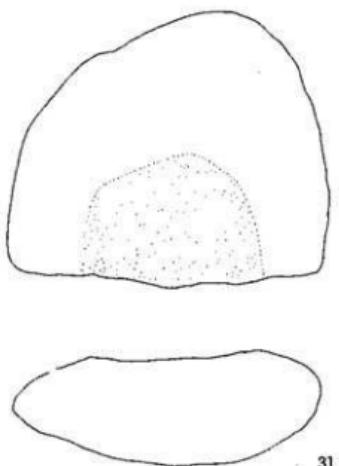


29



30

第159図 第121号住居址床面出土土器 (1 / 3)



31

第160図 第121号住居址床面出土石皿（1/6）

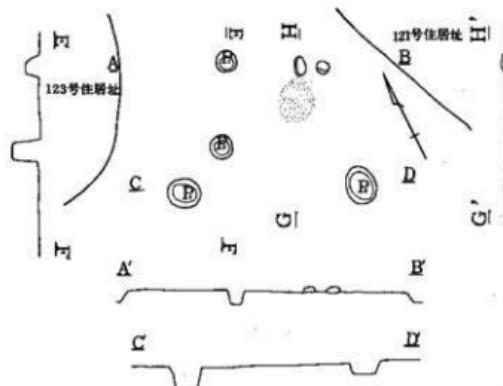
石がみられる。

主柱穴は1・3・5・7・9・12・15の7本である。

北の炉の炉石として凹石が、P₄に石皿がある。土器は南側に多く出土している。

遺物 土器は少ないが大形破片が多い。1は蛇をモチーフした突起を持つ。4・7・11は該期より古い時期のものと考えられる。

石器は床面より16点、覆土中より10点と多く出土している。内訳は打製石斧14、敲打器5、大形粗製石匙2、磨製定角石斧、磨石、凹石、石皿、横刃形石器各1点である。



第161図 第122号住居址実測図 ($S = 1/80$)

◎ 第122号住居址 (第161図)

遺構 本址は第122号住居址と第123号住居址との間に床面と炉と思われる焼土が検出されただけのものである。

プランは不明である。床は焼土を中心にして南西部2mほどの部分が良好に残っていた。床面をわずかにくぼめて焼土が堆積しており地床炉と考えられる。 P_1 、 P_2 、 P_3 が主柱穴と考えられるが定かでない。

遺物 土器は少片がわずかに出土するのみ、石器はまったく出土していない。

◎ 第123号住居址 (第162・163図)

遺構 当住居址は第121号住居址の西に位置し、西側には第34号住居址がある。

プランは不整規円形を呈し、 $5.8 \times 4.5\text{m}$ を測る。壁高は北で25cm前後南側は低くなる。

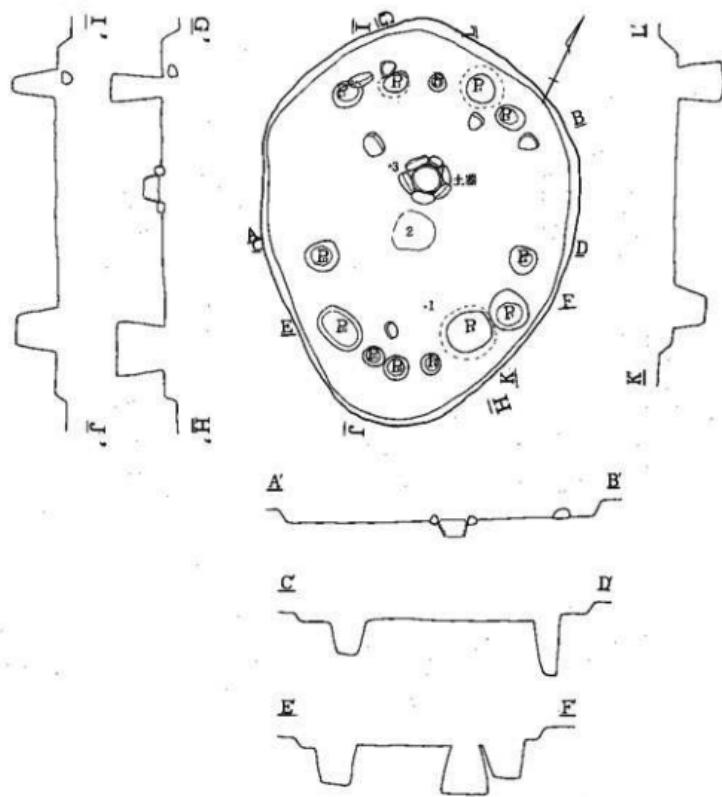
床面は炉付近がやや凹むが、固く堅緻である。主柱穴は6本と考えられ P_4 ・ P_5 、 P_7 ・ P_8 は重複しており建替も考えられる。また P_2 ・ P_3 と P_9 ・ P_{11} が対をなしており注目される。

炉は中央北寄りにあり、円形の石組炉で内部に深鉢の胸部(第163図-1)を埋設している。

遺物 1は炉内埋設土器で頭部に精円文を持つ粘土組をはわせている。

石器は床面より9点、覆土中より6点の計15点が出土している。内訳は打製石斧11、磨製の乳棒状石斧・石錐・敲打器・特殊磨石各1点である。

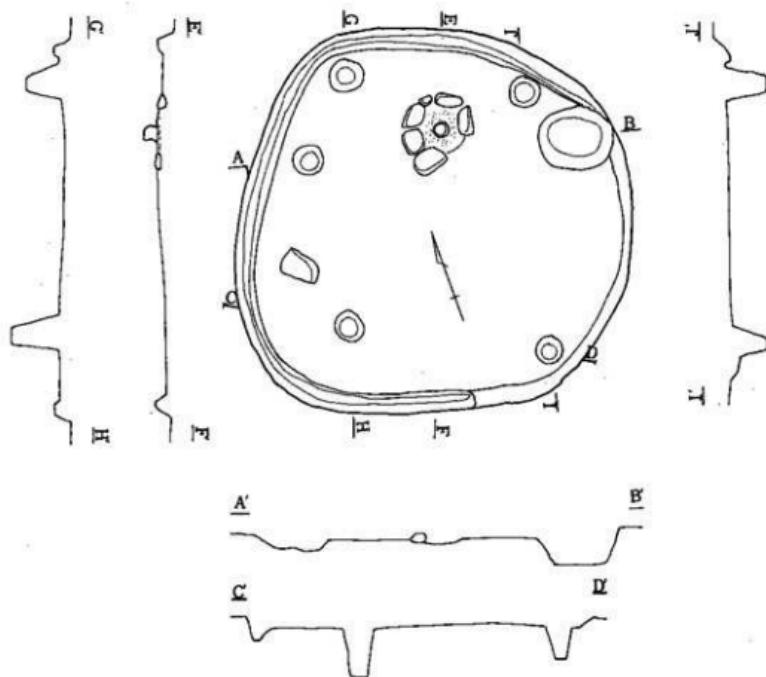
時期は井戸尻期と考えられる。



第162図 第123号住居址実測図 (S = 1/80)



第163図 第123号住居址床面出土土器（1は炉内埋設土器、1～3は1/6他は1/3）



第164図 第136号住居址実測図 ($S = 1/80$)

④ 第136号住居址 (第164・165図)

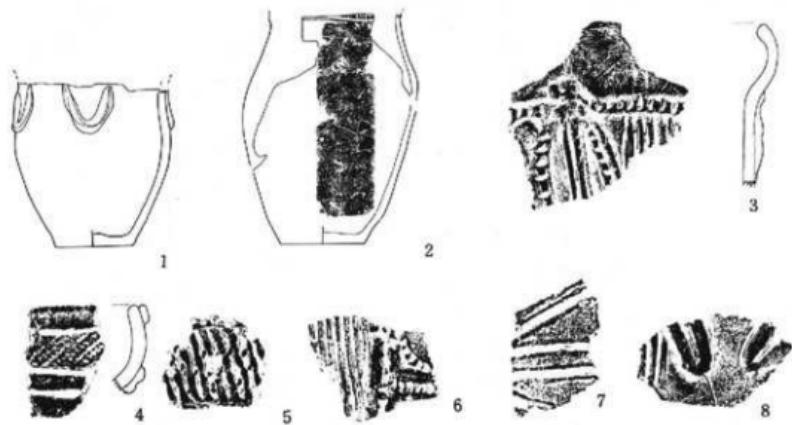
遺構 本住居址は調査地区西側の畠から検出されたものである。

プランは円形を呈し、 $5.6 \times 5.4\text{m}$ を測る。主軸方向は $N - 20^\circ - E$ である。壁高は低く 10cm 前後である。周溝が東側を除きみられる。

床面は中央部は固く堅緻であるが壁ぎわはやや軟弱である。炉は中央北に偏してあり、方形に近い石組炉で内部に小形漆鉢の胸下部 (第165図-1) が埋設されている。東側の炉石の一部が抜かれている。

主柱穴は4本である。

遺物 遺物は少ない。1は炉内埋設土器で胸くびれ部に隆帯によるU字文が施される。2は口縁を欠きはっきりしないが壺であろうか。頸部に隆帯をはわせ胸部は縄文が全面に施文されている。



第165図 第136号住居址床面出土土器（1は炉、1・2は1/6他は1/3）

石器は打製石斧4、石錐1、敲打器1の計6点が出土している。すべて床面からのものである。
時期は中期後葉I期に属する。

(2) 弥生時代

① 第1号住居址（第166～168図）

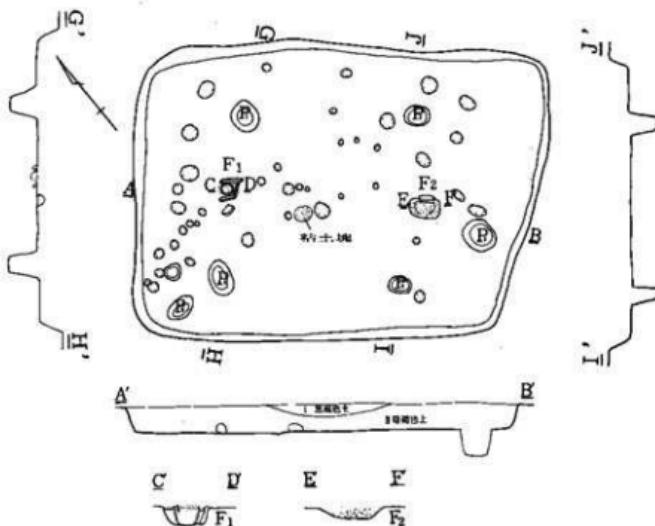
遺構 当住居址は調査地区の最も東に位置している。幅8mほどの市道をへだてた東側は湿地帯となっている。西には第5号、3号住居址がある。

プランは隅丸長方形であるが、南東壁がやや内側に入り込んでいる。規模は5.7(5.2) × 4.2mを測る。入口は南壁中央と思われる。長軸方向はN-49°-Wである。

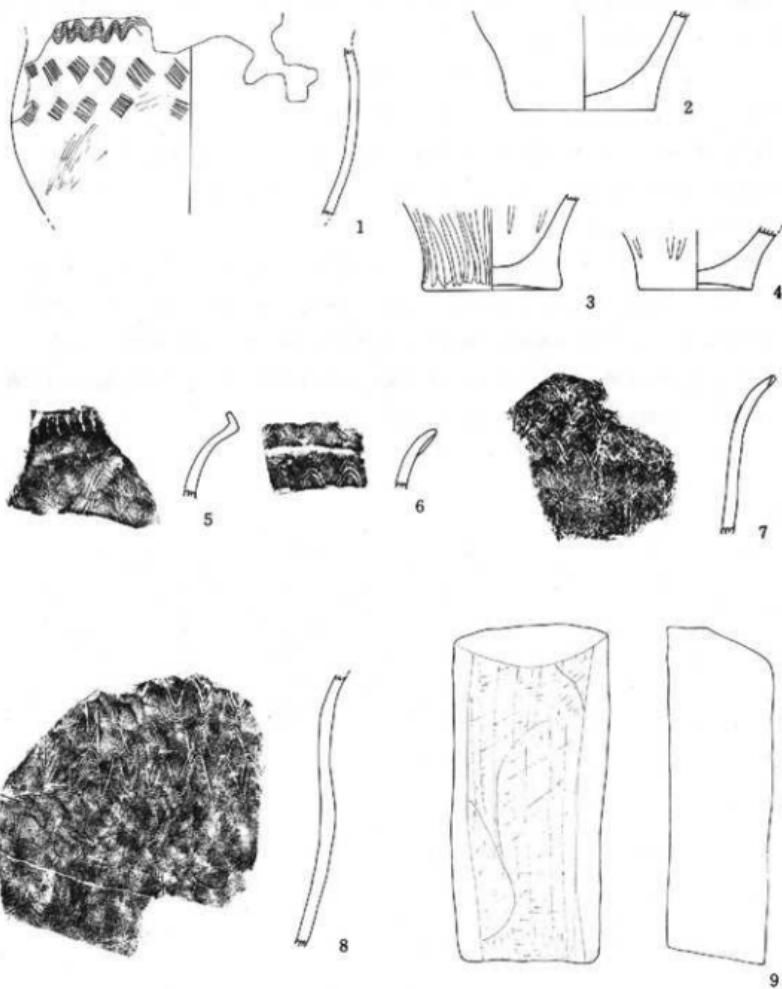
壁高は35cm前後で壁の立ち上がりはゆるやかである。覆土は一部中央上層に黒色土があるほかは床面まで暗褐色土が充満している。床面は堅緻でとりわけ中央部は良好である。西か北床面には小ビットが穿れている。

主柱穴は4本である。炉は中央西(F₁)寄りと東(F₂)寄りの2箇所にある。ともに柱穴線上によりわずか外に位置する。炉1は西を除く三方に石を組んでおり埋焼炉（第167図-1）である。このようにきっちりとした石組を持つ例は珍しい。炉2は北側に枕石を持つ地床炉である。

炉1・2のほぼ中間床面上に小児頭大の粘土塊が1個出土している。第3号住居址よりも3個出土しており土器製作の原材料として注目される。



第166図 第1号住居址実測図 (S = 1/80, 炉断面図は1/40)



第167図 第1号住居址床面出土遺物（1は炉1、1/3）

遺物 出土土器は壺が主体で壺は5の口縁部破片があるのみである。1は炉1の埋甕で口縁と胴下部を欠いている。6は複合口縁を持つもので当遺跡では數例出土している。

石器は打製石斧と砥石(9)が1点ずつ出土している。第168図-10は石製の紡錘車である。

時期は後期前葉である。

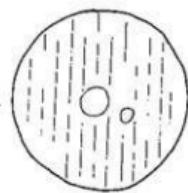
② 第3号住居址 (第169~171図)

遺構 当址は第5号住居址の南に位置し、北壁は第2号住居址と接しており、南西部には第4号住居址がある。

覆土はレンズ状の堆積を示している。プランは隅丸方形で、規模は $5.1 \times 4.9m$ を測る。壁高70cmと深く壁の立ち上がりはゆるやかである。長軸方向はN-60°-Wである。

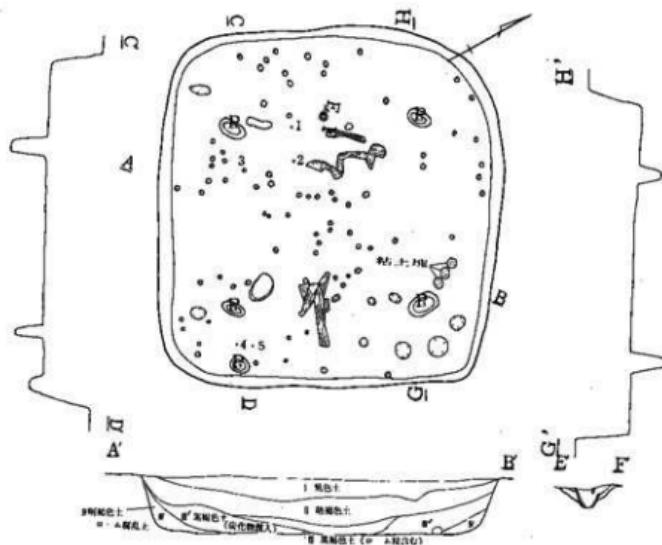
床面は中央部がわずかに凹んでおり、全域に小ピットがみられる。タタキは良く行われ非常に堅緻である。

炉は西側P₁とP₂の中間、線上よりわずかに外に位置し埋甕炉である。主柱穴は4本である。



第168図 第1号住居址出土遺物

(1/2)



第169図 第3号住居址実測図 (S = 1/80炉断面図は1/40)



第170図 第3号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）

焼失家屋で中央床面上に炭化材がやや浮いて検出されている。P₃の北西床面上に3個の粘土塊が並んで出土している。大きさは10cmほどの球状である。

遺物 炉の手前と南東コーナに集中し床より5cmほど浮いて検出されている。

遺物 土器は多く器種も豊富である。1は炉の埋甕で胴下部のみである。2は小形甕、3は台付甕、4は高杯、5は甕である。覆土中より壺が出土しているが、焼成が悪く復元できず固化していない。

他には壺(9)と鉢(12)があり、主体は甕である。13は複合口縁である。

石器は打製石斧と敲打器が2点ずつ、磨製石礫(第171図)と未成の剥片1点が出土している。

時期は後期前葉である。

③ 第4号住居址(第172図)

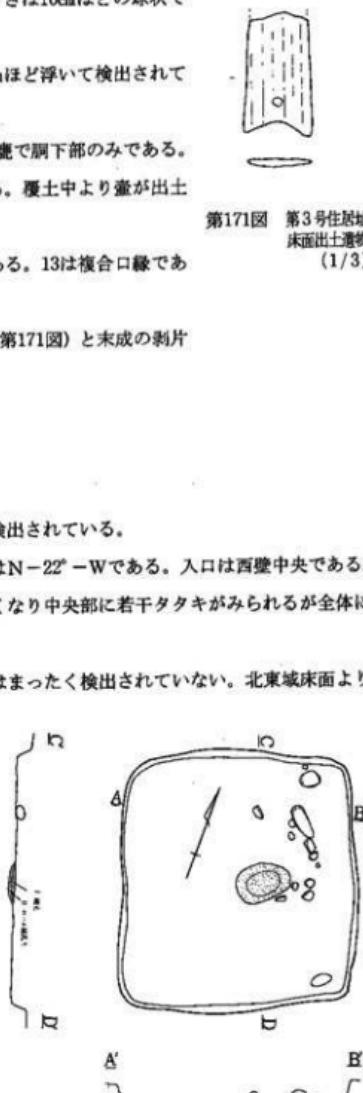
遺構 本住居址は第3号住居址の南西に接して検出されている。

プランは隅丸方形3.7×3.3mを測る。長軸方向はN-22°-Wである。入口は西壁中央である。壁高は20cm前後である。床面は壁ぎわがやや凹くなり中央部に若干タタキがみられるが全体に軟弱である。

炉は中央東寄りに位置した地床炉である。柱穴はまったく検出されていない。北東域床面よりやや浮いて甕が集中して出土している。

遺物 弥生土器の小片がわずかに出土しているのみである。

時期ははっきりしないが後期と思われる。



第172図 第4号住居址実測図 (S = 1/80)

④ 第5号住居址（第173～176図）

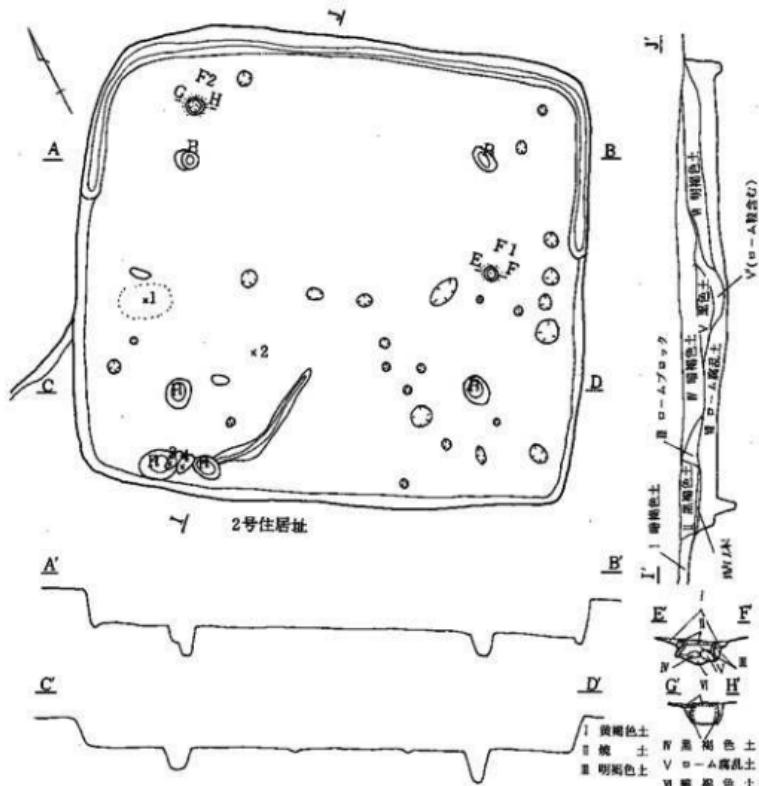
遺構 本住居址は第1号住居址の北東にあり南西部は第2号住居址に貼床されている。

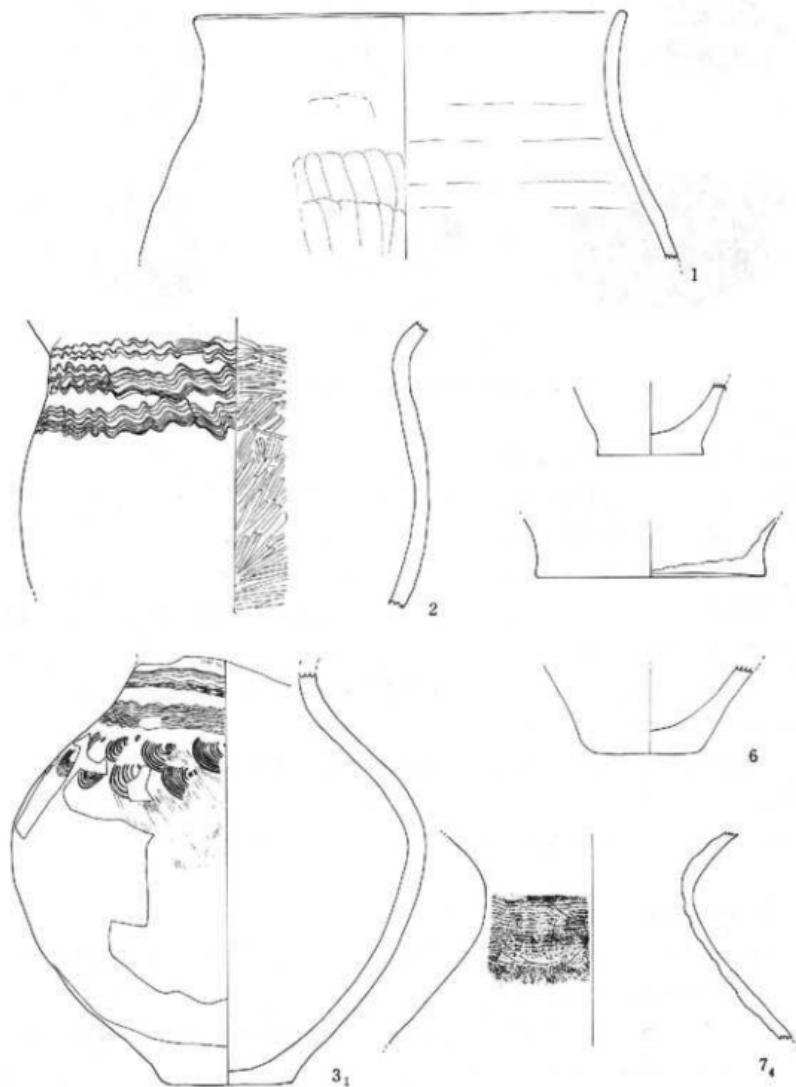
プランは隅丸長方形で、規模 $7.2 \times 6.6m$ を測る大型住居址である。壁高は50cm前後と深い掘り込みである。周溝が北側にみられ、西壁と東壁の一部まで及ぶ。長軸方向はN-58°-Wである。

床面は南東に傾き全体にタタキが良く行われ、堅緻である。南東床面には小ピットが穿かれている。

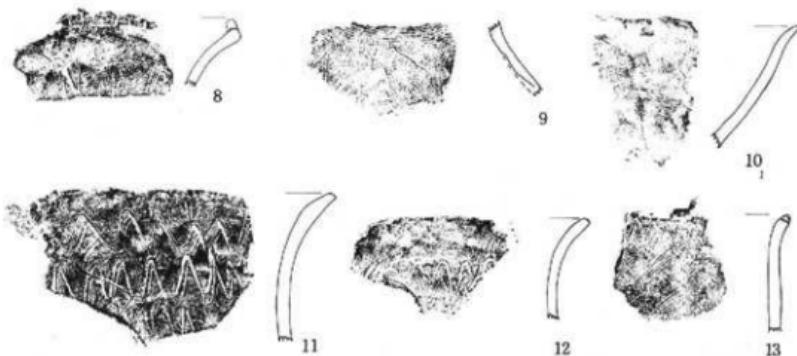
炉は2箇所にある、炉1は東P₂とP₃の中間線上よりやや外側にあり、埋壠炉である。炉2はP₁の北東80cm、北東コーナーに位置し埋壠炉である。

主柱穴は4本である。





第174図 第5号住居址床面出土土器（1は炉1・2は炉2、1/3）



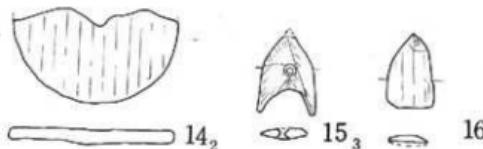
第175図 第5号住居址床面出土土器（1/3）

P₁、P₄ほぼ中間西壁ぎわより壺(第174図-3)がつぶれて、またP₅、P₆の間より壺（7）と磨製石礫が出土している。さらにP₄の東床面上より石製紡錘車（14）が出土している。

遺物 壺が主体であるが、壺（3・5、6、7～9）の多いのが目立つ。鉢か高环の口縁部破片（10）もある。

石器は磨石と打製石斧が各1点、さらに石製紡錘車（14）と磨製石礫2点（15・16）が出土している。

時期は後期前葉も古い時期に属するであろう。



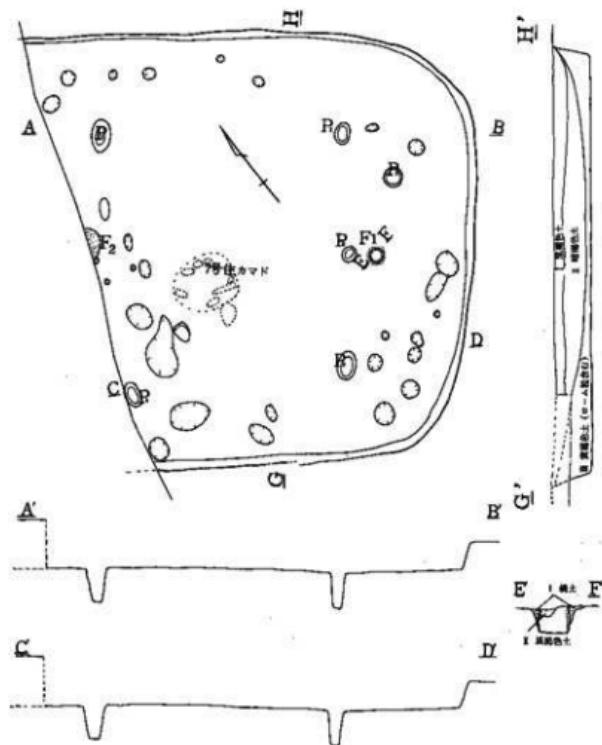
第176図 第5号住居址床面出土遺物（1/2）

⑤ 第6号住居址（第177・178図）

遺構 本址は第3号・4号住居址の北東に位置し、北西には第8～10号住居址が近接する。住居址西城には当床面より10cmほど浮いて第7号住居址のカマドがつくられている。

西側は井により埋されており不明である。プランは隅丸長方形を呈すと思われ、短軸方向はE.2mと大形である。長軸方向はN-55°-Wである。

壁高は40cm前後で壁は直に近い。床面は東の炉に向かってややくぼみ固くタタかれ堅緻である。



第177図 第6号住居址実測図 ($S = 1/80$ 、炉断面図は $1/40$)

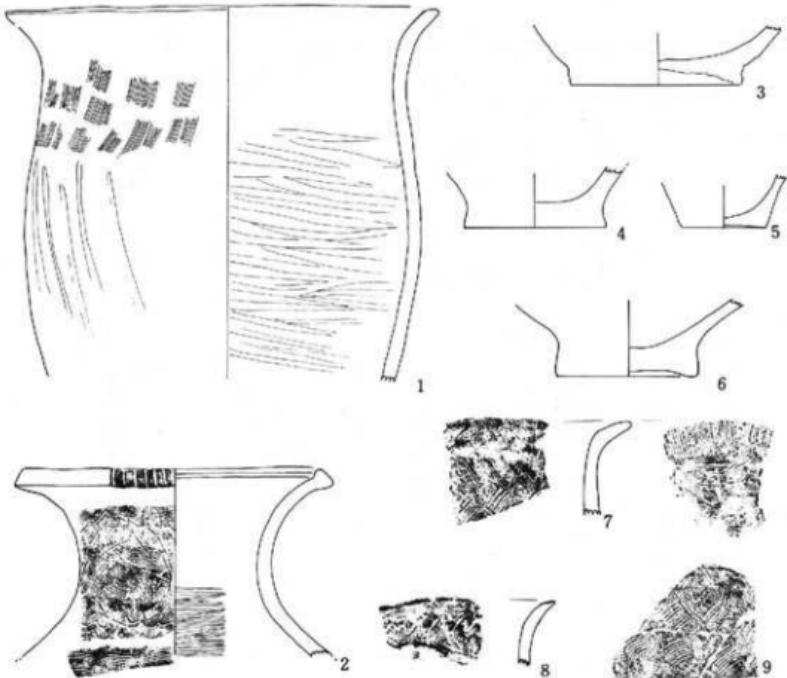
炉は東 P_2 、 P_3 中間線上の外に位置し埋甕炉（炉 1）がある。さらに西未調査部分に一部かかる状態で焼土があり地床炉（炉 2）と考えられる。柱穴線上より外に位置する。炉の位置の在り方は第 1 号住居址に似る。

主柱穴は 1・2・3・4 の 4 本である。

遺物 1 は炉 1 の埋甕で胴下部を欠いている。2 は折立部が短く強く内屈する甕で、他に 3・6 と底部があり甕が目立つ。

石器は硬砂岩の剥片が 1 点出土したのみである。

時期は後期前葉である。



第178図 第6号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）

⑥ 第8号住居址（第179・180図）

遺構 当住居址の西には井をはさんで第10号住居址がある。

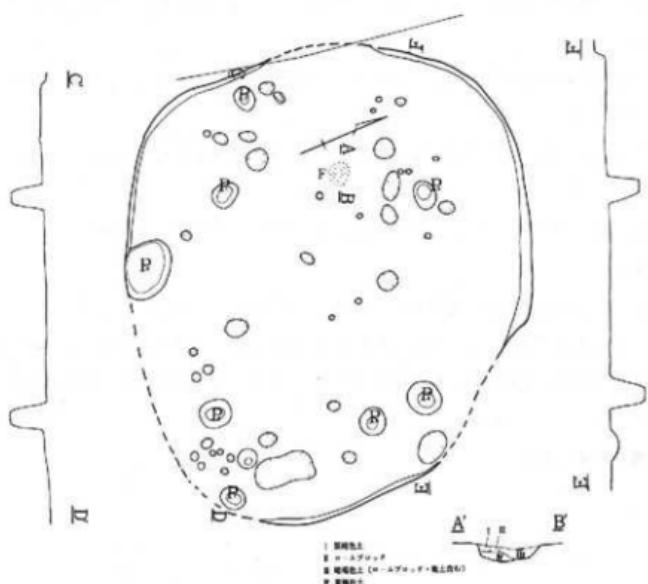
南東部と北東部は搅乱のため壁がない。プランは楕円形を呈し、 $6.6 \times 5.9\text{m}$ を測る。長軸方向はN-68°-Wである。壁高は浅く5~10cmほどである。床面は炉付近にタタキが良く残るが全体に軟弱である。

炉は西ややP₃よりに位置しP₁・P₃線上よりわずか外にあり、地床炉である。主柱穴は4本と考えられる。西と南東部に小ピットが穿っている。

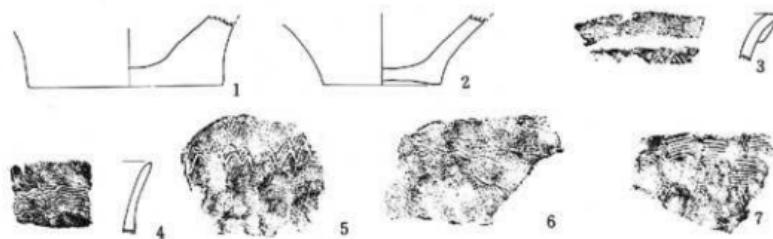
遺物 土器は少ない。2は壺の底部で他はすべて甕である。3は複合口縁である。

石器は床面より打製石斧2点が出土している。

時期は後期前葉である。



第179図 第8号住居址実測図 (S 1/80, 炉断面図は1/40)



第180図 第8号住居址床面出土土器 (1/3)

⑦ 第10号住居址（第181～183図）

遺構 本住居址は、第6号、8号、11号、12号住居のほぼ中間にあり、北側の第9号住居址が貼床している。

南東部は井のため未調査となっている。プランは隅丸長方形で規模は5.7×4.6mを測る。主軸方向はN-80°-Eである。

壁高は40cm前後と深い方である。床面はほぼ平坦で固く堅緻である。ほぼ全面に小ピットが穿かれている。

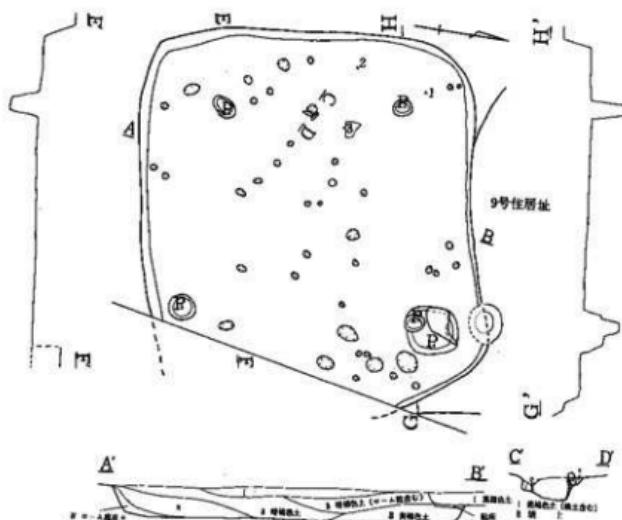
炉は西P₁、P₂の中間線上にあり、東側に鍵手状に2個の石を組み土器を埋設している。主柱穴は4本である。

炉の北床面上より壺2個体（第182図-2・3）が重なり合って出土している。

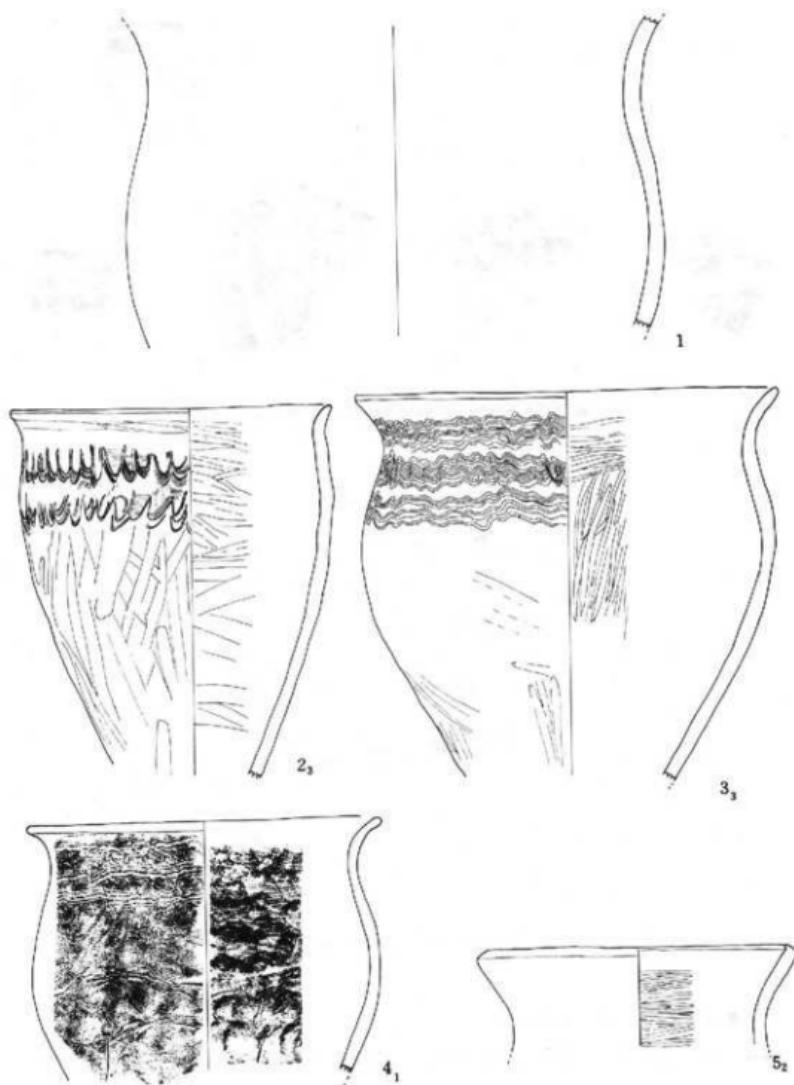
遺物 土器は豊富で器形を知り得るものも多い。壺が主体で、壺は5と9の2個体である。5は口縁がラッパ状を呈す壺でわずかに折立部がつくられる。9もほぼ同様の器形である。

石器はまったく出土していない。

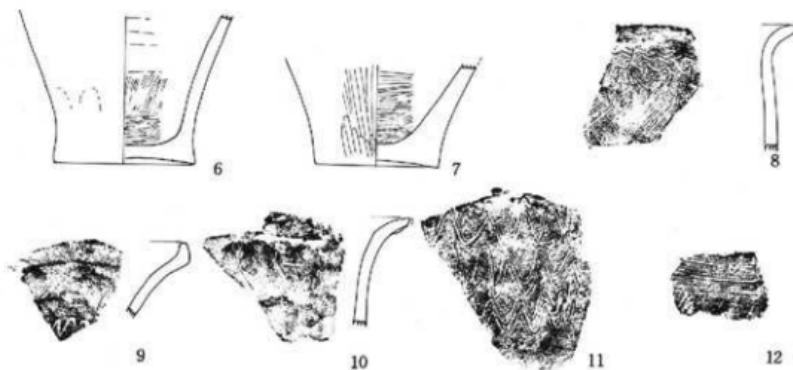
時期は後期前葉である。



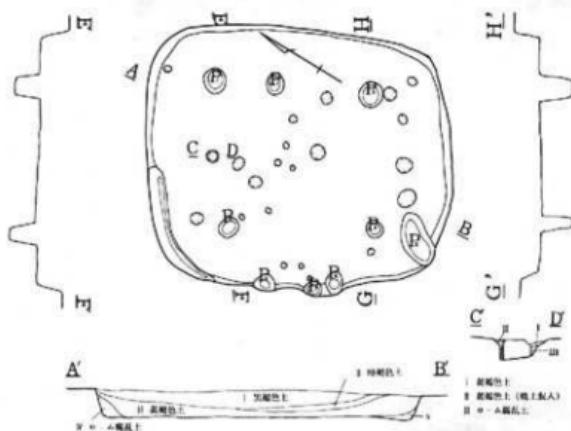
第181図 第10号住居址実測図 (S = 1/80、炉断面図は1/40)



第182図 第10号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）



第183図 第10号住居址床面出土土器（1/3）

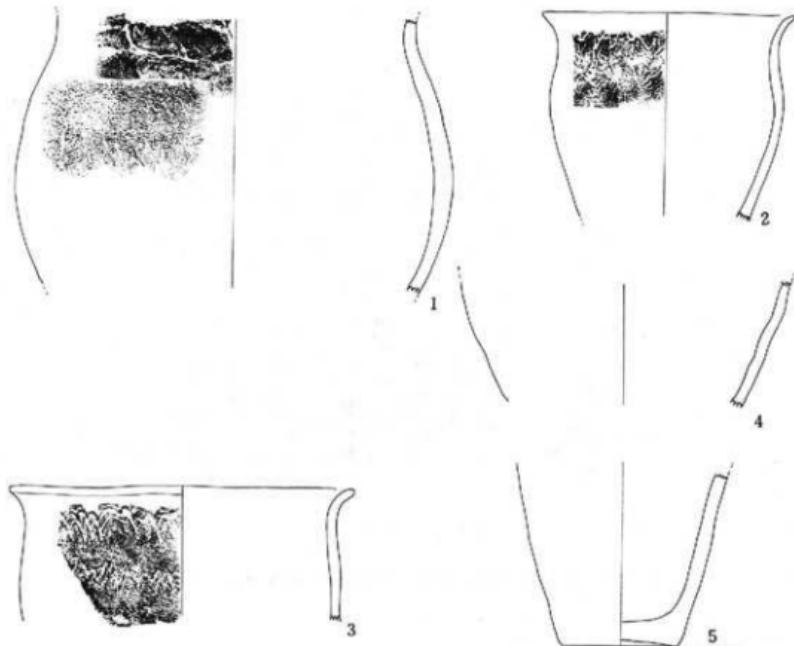


第184図 第11号住居址実測図（S = 1/80, 炉断面図は1/40）

⑥ 第11号住居址（第184・185図）

遺構 本住居址は第12号住居址の東に位置し、当期の住居址群の内では第8号住居址とともに東限となっている。

プランは隅丸長方形で、規模は $4.4 \times 3.7\text{m}$ を測る。長軸方向はN-32°-Wである。南西壁中央



第185図 第11号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）

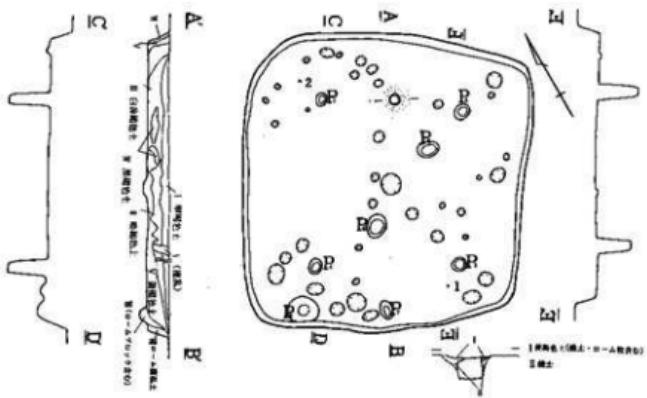
にはP₆、P₇、P₈があり、入口施設の存在を考えたい。

壁高は40cm前後で壁は直に近い。床面は全体に堅緻で炉の手前はわずかに凹み、とりわけ固くなっている。北西部には一部周溝がみられる。炉は北西P₁、P₉の中間線上よりやや外に位置し埋甕炉である。主柱穴は4本でP₂は補助柱と考えられる。

遺物 土器は甕のみである。1は炉の埋甕で頸胴央部のみである。

石器は打製石斧と磨製始刃石斧が1点ずつ出土している。

時期は後期前葉である。



第186図 第12号住居址実測図 (S = 1/80, 炉断面図は1/40)

⑨ 第12号住居址 (第186・187図)

遺構 当住居址は第11号住居址の南西にあり、西側より住居址の空白地帯となっている。

プランは隅丸方形で規模は4.3×4.0mを測る。長軸方向はN-60°-Wである。壁高は30~35cmほどで壁はゆるやかである。

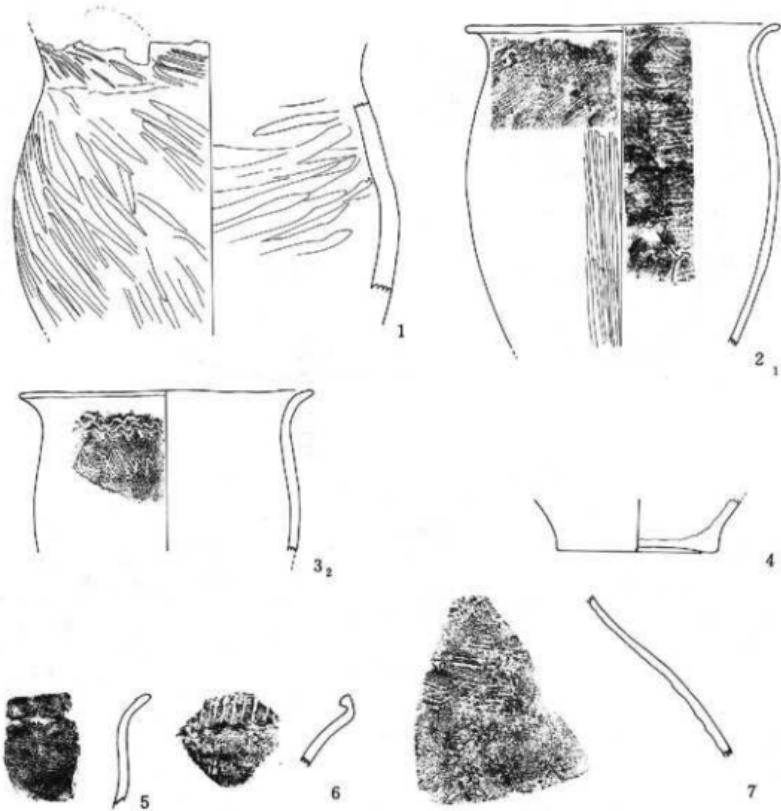
床面は小ピットがみられるがほぼ平坦で固く堅緻である。炉は北P₁、P₂中間線上やや外にあり、埋甕炉である。柱穴は4本である。

P₃の南とP₁の北の床面より甕 (第187図-2・3) が出土している。

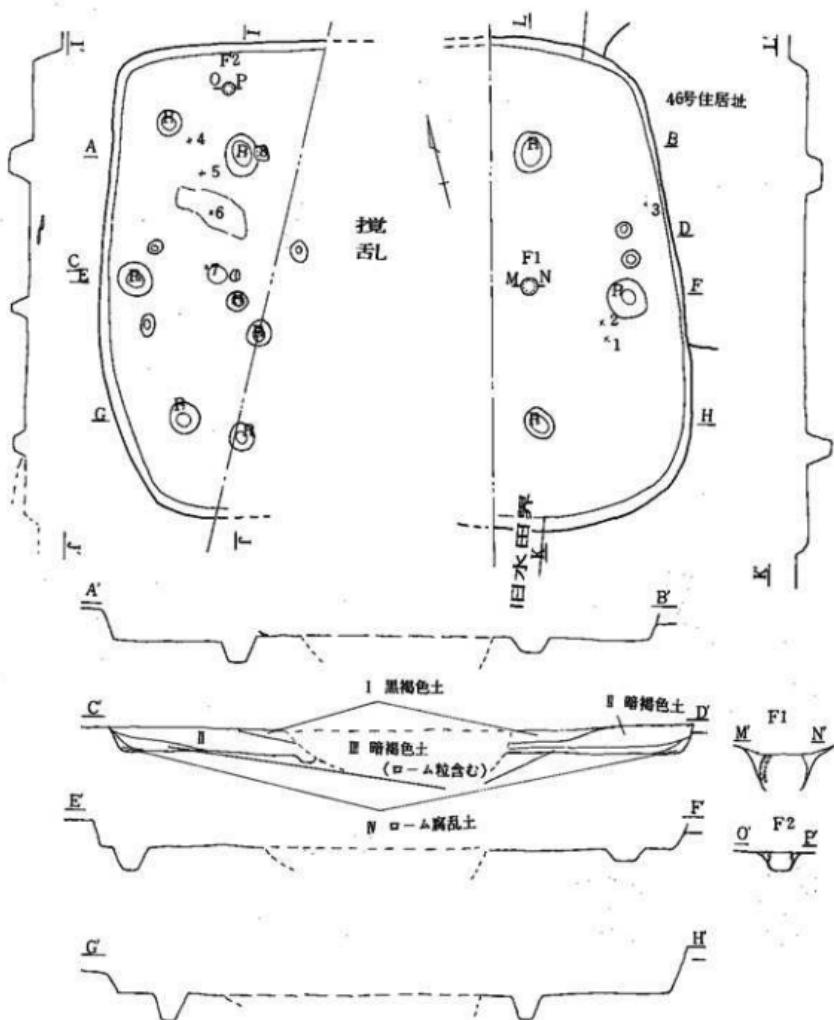
遺物 遺物はあまり多くない。1は炉の埋甕で頸胸央部のみである。甕として6・7の破片がある。6は口唇を強く内屈し折立部としている。

石器は覆土中より磨製乳棒状石斧1点が出土しているのみである。

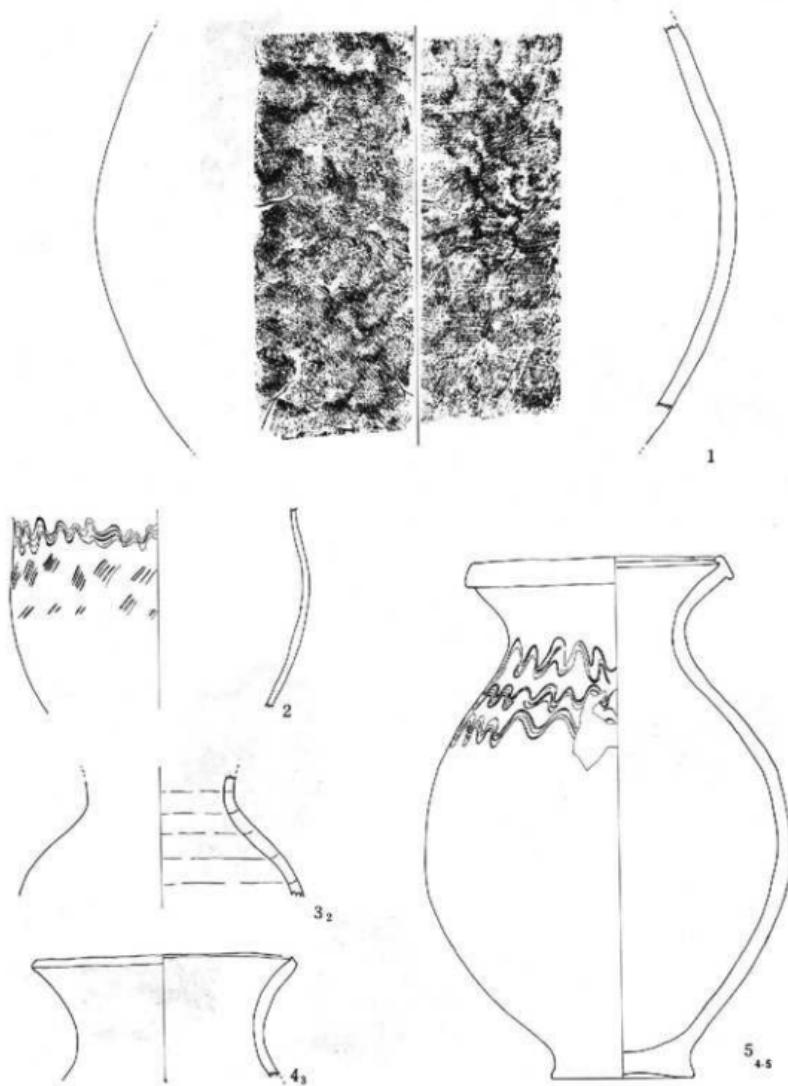
時期は後期前葉に属するが、2の甕は口唇が強く外反しており後葉でも新しい時期と思われる。



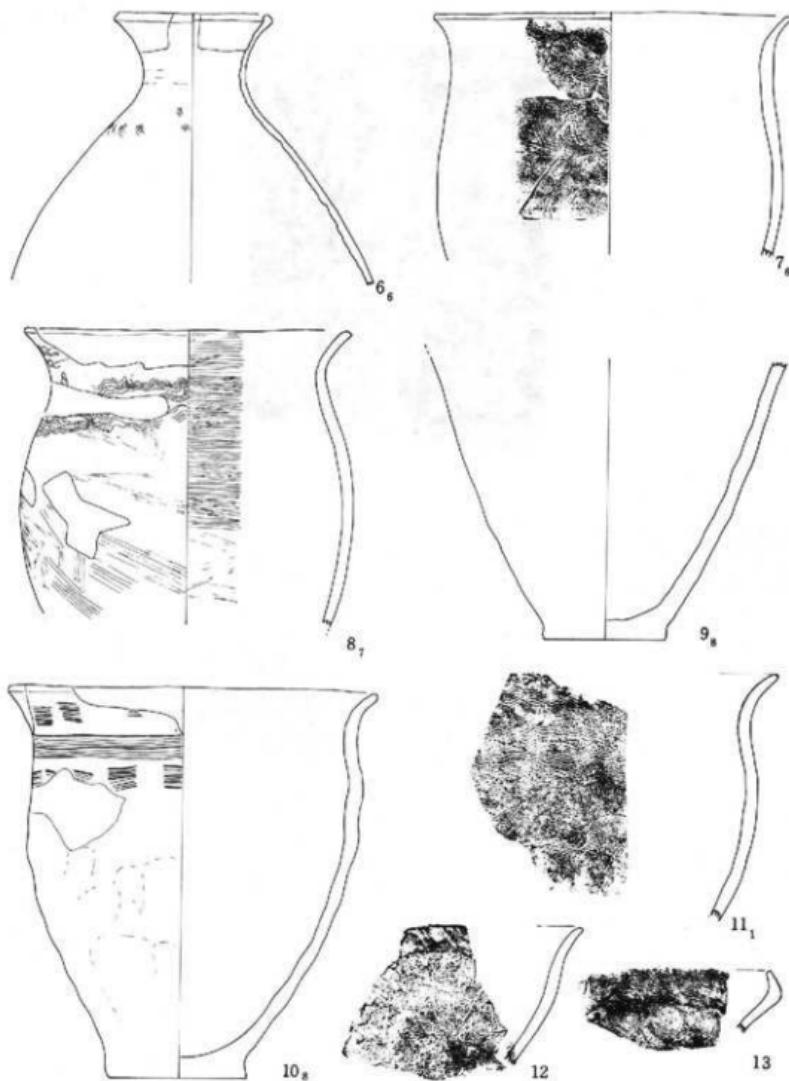
第187図 第12号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）



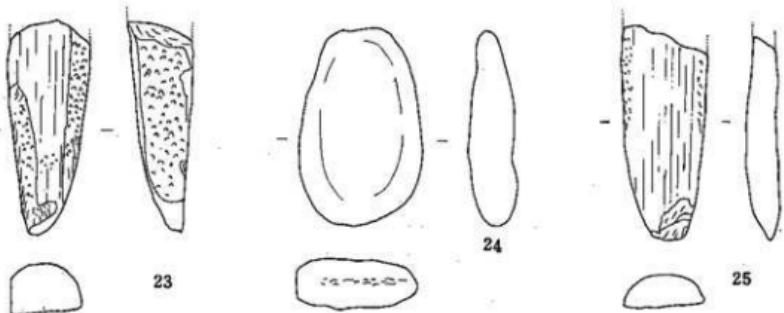
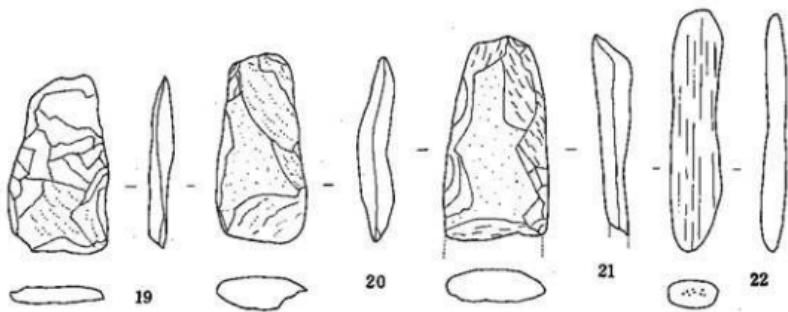
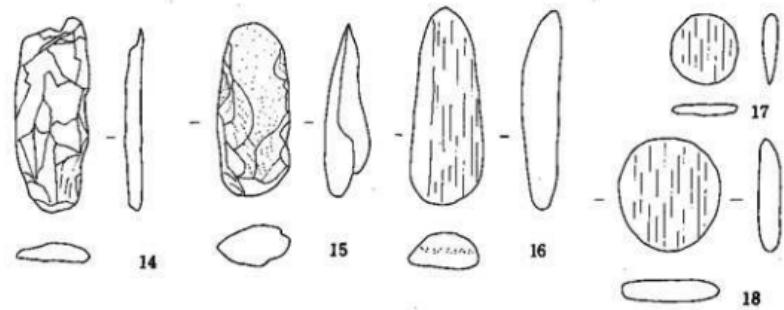
第188図 第41号住居址実測図 (S = 1/80、炉断面図は1/40)



第189図 第41号住居址床面出土土器（1は炉1・2は炉2、1/3）



第190図 第41号住居址床面出土土器 (6は1/6他は1/3)



第191図 第41号住居址出土石器 (14~17は縁土、他は床面、1/3)

⑩ 第41号住居址（第188～191図）

遺構 本住居址は第45号住居の南西に位置している。中央部は搅乱のため壊されている。東にて第46号住居址を切っている。

プランは隅丸長方形を呈し、規模は $8.2 \times 7.0\text{m}$ を測る大形住居址である。長軸方向はN-76°-Wである。

2枚の水田にわたって検出されており西側は開田時に削りとられており、旧形をとどめるのは南東のみであり、壁高は70cmを測ることができ深い堅穴である。

搅乱を受けていない西と東の床面は固く堅緻である。炉は2箇所にみられ、炉1は東P₃、P₅の中間線上よりわずか内側に入つてあり埋甕炉である。炉2は北西隅に位置し埋甕炉である。炉の位置関係は第5号住居址と同様である。

主柱穴は2、3、5、6の4本と東と西に対をなす4、10を加え6本である。P₄、P₁₀は棟持柱と考えられる。

遺物は大半中央部を搅乱を受けた割りには良く残っている。大半は床面より5cmほどの間層をおいて検出されている。

遺物 1・2は炉埋甕でともに胴央部のみである。塗が5点（3～6、13）と多く注目される。6は大形塗である。ともに口唇は強く内屈し、わずかに折立部を作っている。12は鉢である。

土器とともに石器も多く出土している。伊那谷においては当期に打石器が多くみられるることは衆知の処であるが、当住居址もその一例であろうか。

床面9点の内訳は打製石斧・敲打器各4点と特殊磨石が1点である。覆土出土5点の内訳は打製石斧・敲打器各2点、特殊磨石1点である。

時期は後期前葉である。

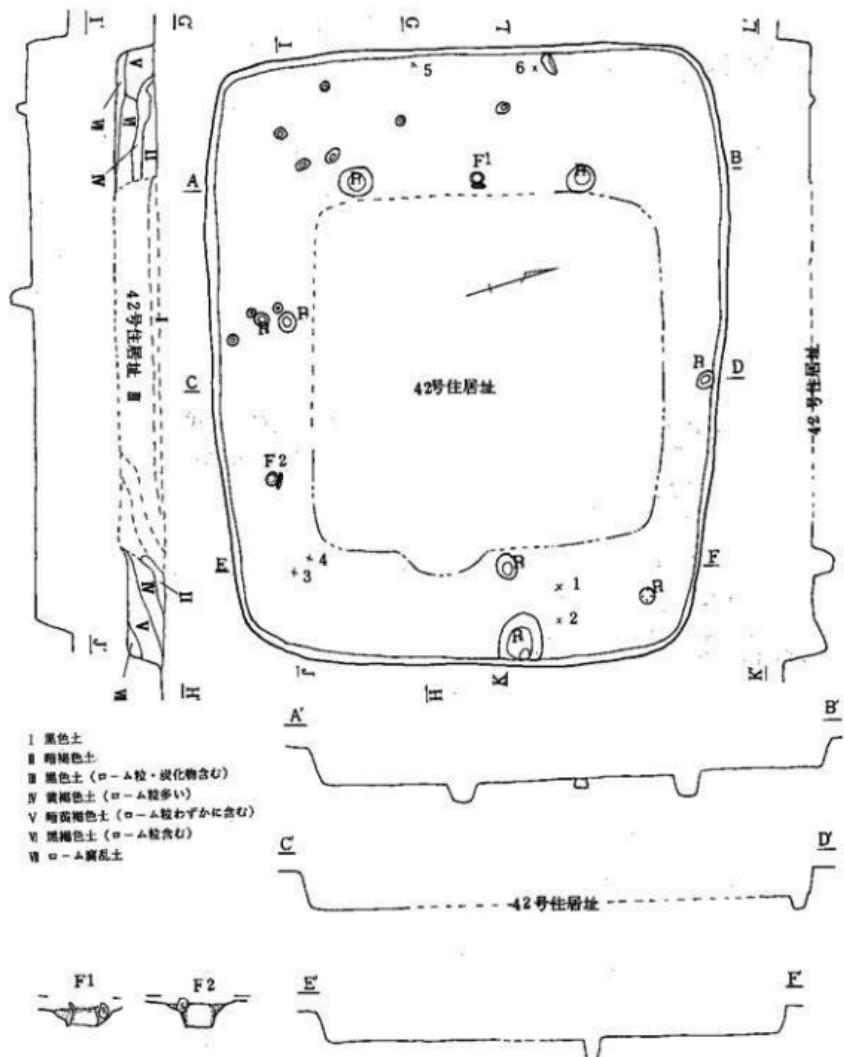
⑪ 第45号住居址（第192～194図）

遺構 当住居址は第41号住居址の東に位置し、南東には第132号住居址がある。

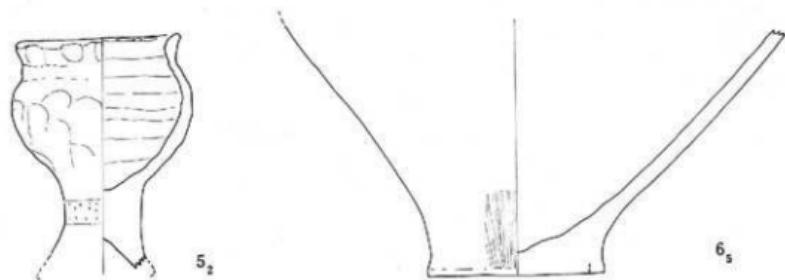
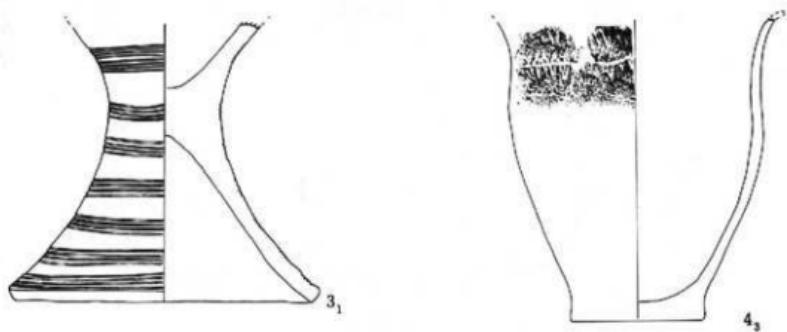
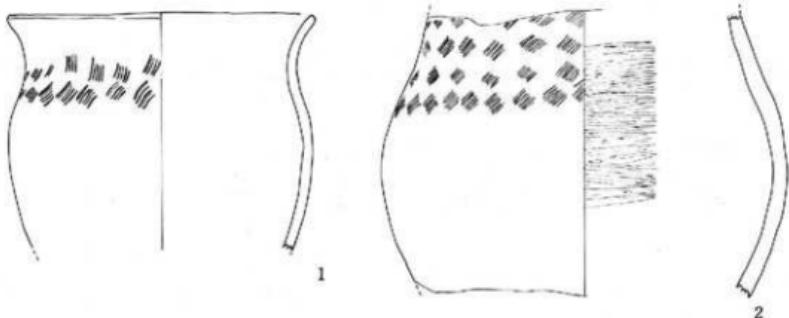
住居址内部にはカマドを持つ第42号住居が作られている。第42号住居址がわずかに当住居址の床を掘り下げているが、南側においてははつきりしない。長軸方向はN-74°-Wである。

プランは隅丸長方形で $8.8 \times 7.3\text{m}$ を測る大形住居址である。壁高は南側で50cm前後、北側で40cm前後である。床面は西側と北側はタタキが顕著であるが、南側は軟弱である。

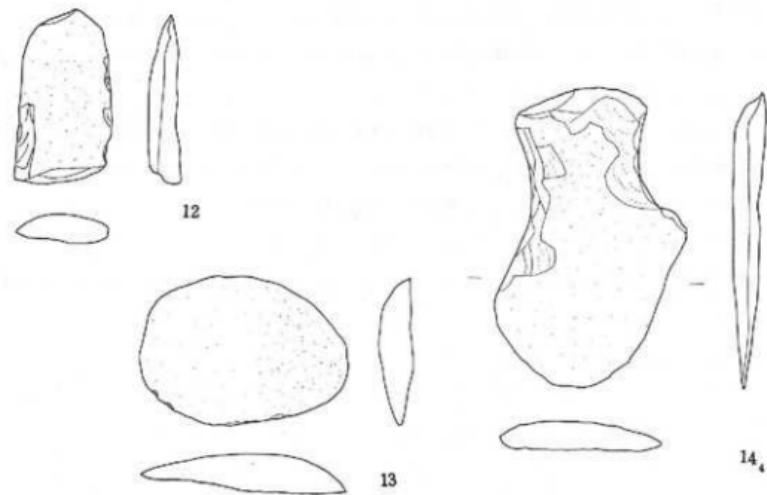
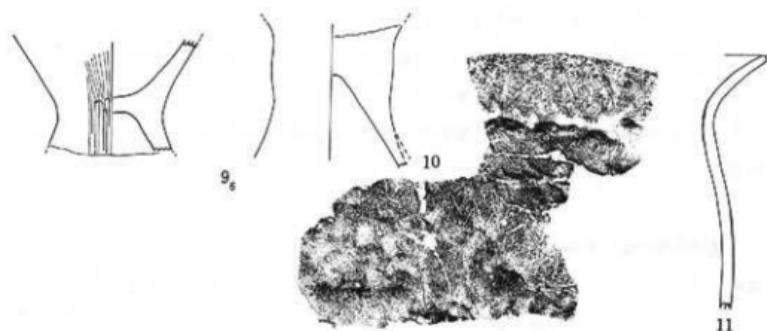
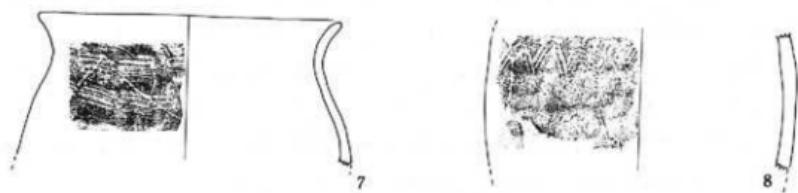
炉は2箇所ある。炉1は西P₁、P₃の中間線上にあり埋甕炉で東に枕石を持つ。炉2は南壁ぎわ中央よりやや東寄りに位置し、埋甕炉で炉1同様北側に枕石を持っている。炉の位置関係が鍵形となるのは第5、41号住居址と同様であるが、他の2住居址が隅にもう一つの炉が設けられたのに比べ、やや内側にある点、今後の課題である。



第192図 第45号住居址実測図 (S = 1/80, 炉断面図は 1/40)



第193図 第45号住居址床面出土土器 (1は炉1・2は炉2、1/3)



第194図 第45号住居址床面出土遺物（1/3）

柱穴は西にP₁、P₂とあるが西側には検出されていない。P₃・P₄は棟持柱の可能性がある。
遺物は中央部を第42号住居址に埋されている割りに豊富に出土している。東と西壁ぎわに多く床面上から検出されている。

遺物 土器はすでに述べたように多く出土しているが、壺は残されていない。もともと所有していなかったものとは考えられない。

1は炉1の埋甕で胴下部を欠く。2は炉2の埋甕で胴央部のみである。甕が多くみられ小形甕(4)や台付甕(5・9)もみられる。6は鉢と考えられる。

これらの外に3・10と特殊なものがある。3は強く開いた脚部を持ち横走沈線文が6段に施され体部にも施される。器台であろうか。10は高环というよりは3に類似するものである。

5の台付甕の脚接合部には幅1cmの帯状の剥落痕が認められる。第58号住居址より、つばを持つものが出土しており、本例も同じであろうか。

石器は、当期特有の有肩石斧と、打製石斧・横刃形石器各1の3点が出土している。

時期は後期前葉である。

⑪ 第58号住居址（第195～201図）

遺構 当住居址は第41号住居址の西10mほどの所にあり、西には第59号住居址がある。

西にある第64号、65号住居址を切っている。

床面上から炭化材の検出はみられなかつたが、中央床面上に厚さ5cmほどの焼土が確認されている。焼失家屋と考えたい。また床面より5～10cmほど浮いて中央部を中心に甕が無造作な状態出土している。遺物は大半甕に混じて出土している。

プランは隅丸方形を呈し、8.2×8.1mを測る大型住居址である。壁高は南側で60cm前後と他は50cm前後を測る。床面は全体に固くタタかれ堅緻である。周溝が南西部を除きみられる。

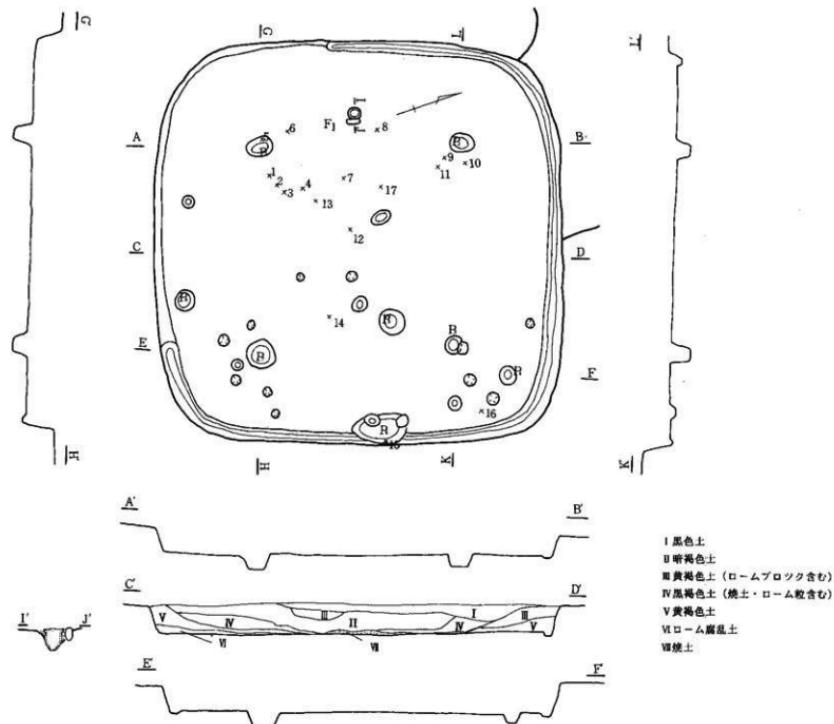
炉は西P₁、P₂中間線上の外にあり埋甕炉で、東側に枕石を持っている。

柱穴は4本で南壁ぎわP₃、P₄は入口施設用の柱痕と考えられる。

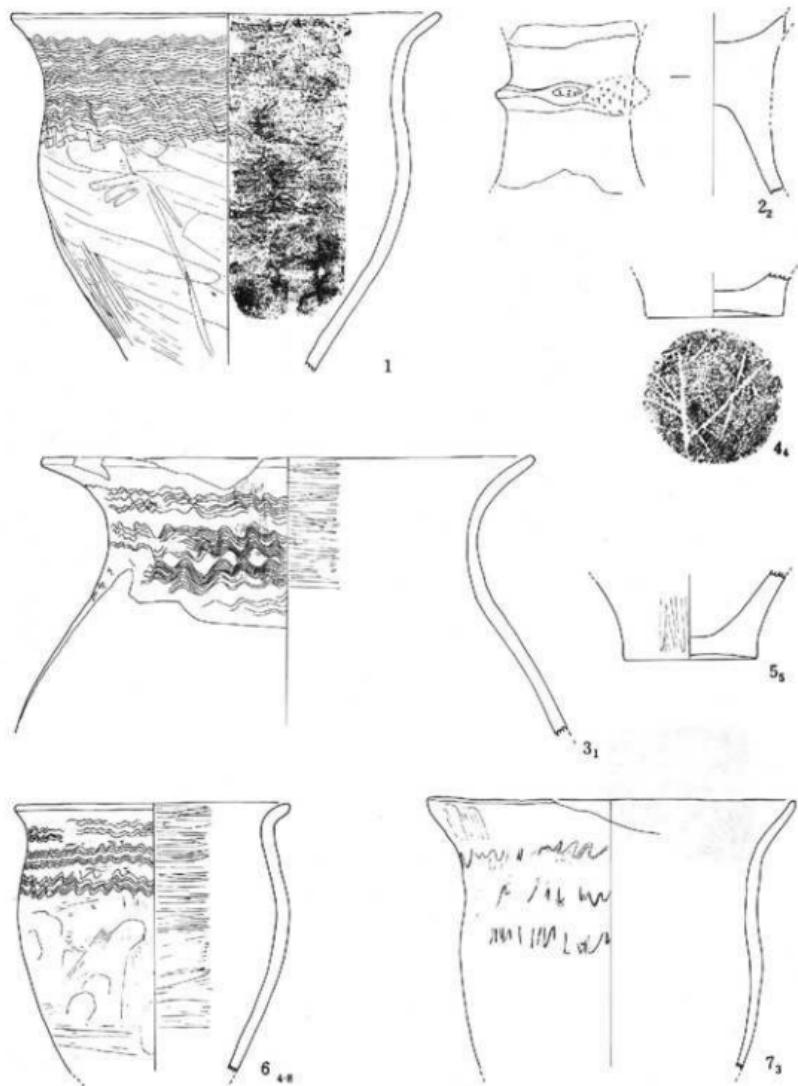
遺物 遺物は土器・石器とも多量に出土している。甕に混じて出土するもので土器は炉の東側から多く検出されている。

甕が多い。1は炉の埋甕で底部を欠いている。甕には6、19の小形のものもある。壺も14、16～18と4個体ある。外には15の鉢や21の手づくね土器もみられる。9は高环である。2は器台が高环と考えられるが、脚接合部に断面円盤状のつばを持つ特異なものである。

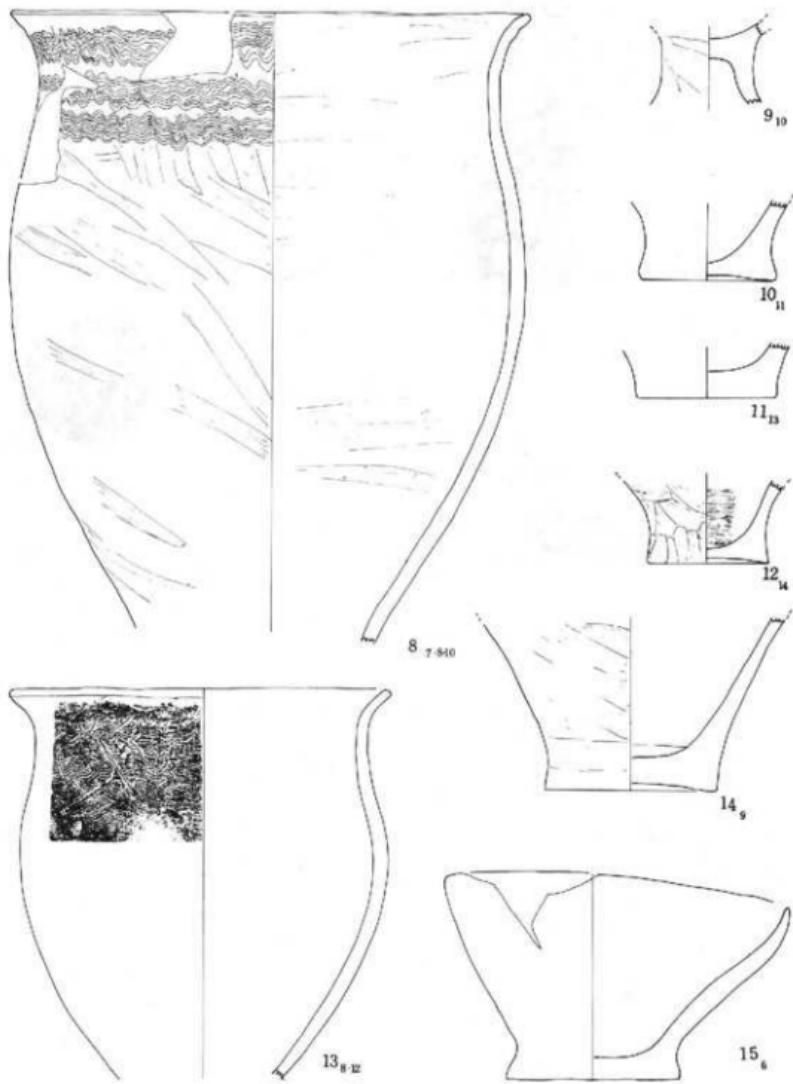
石器は床面より17点、覆土中より21点計38点が出土している。内訳は打製石斧20、敲打器11、磨製定角石斧・横刃形石器・有肩石斧各2と大形粗製石匙1点である。これらがすべて本住居址に伴うものとすれば縄文時代と変わりない石器保有形態として注目すべきことである。



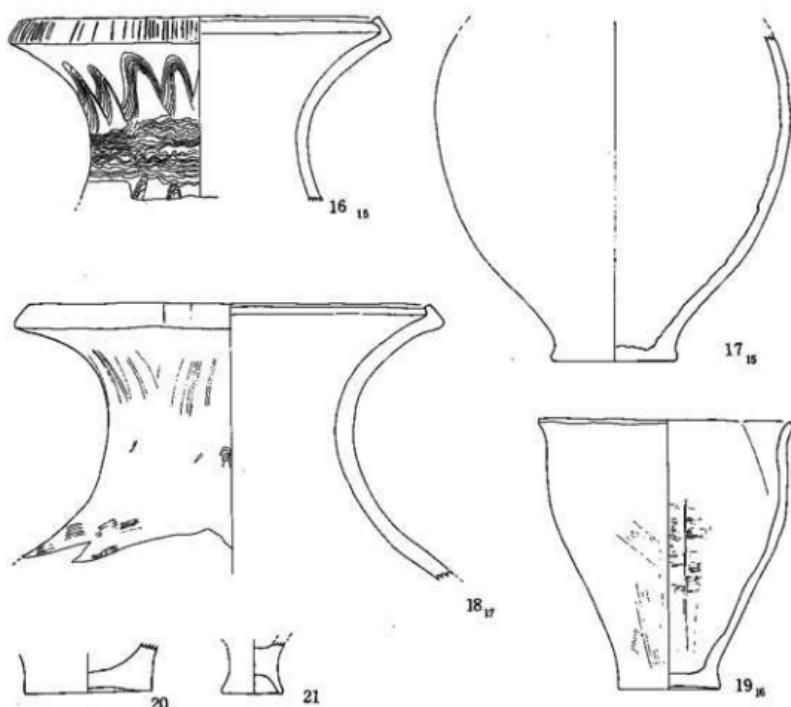
第195図 第58号住居址実測図 (S = 1/80, 炉断面図は 1/40)



第196図 第58号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）

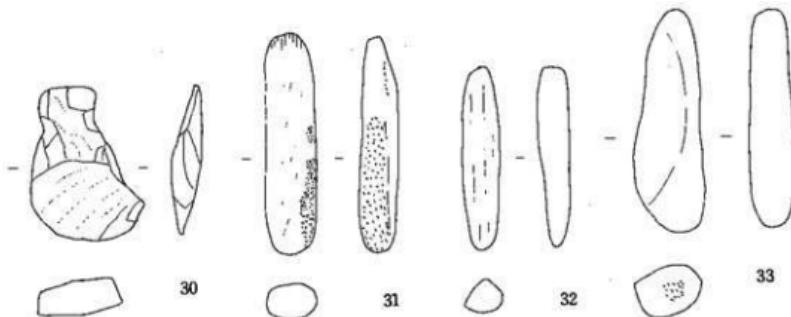
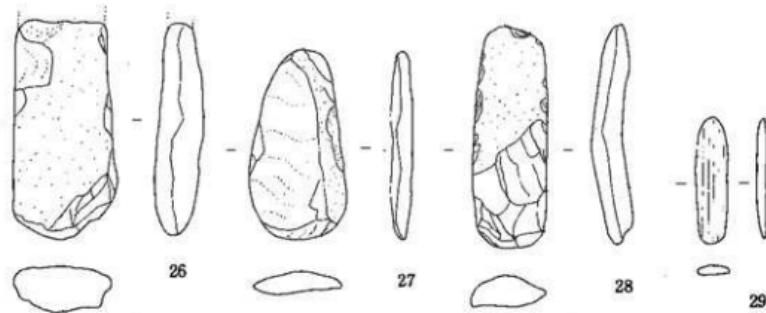
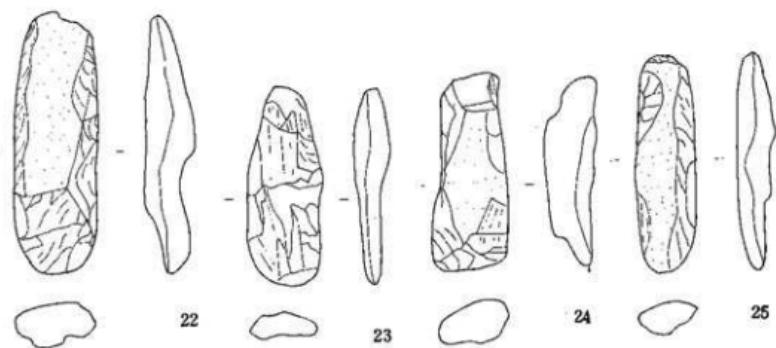


第197図 第58号住居址床面出土土器（1/3）

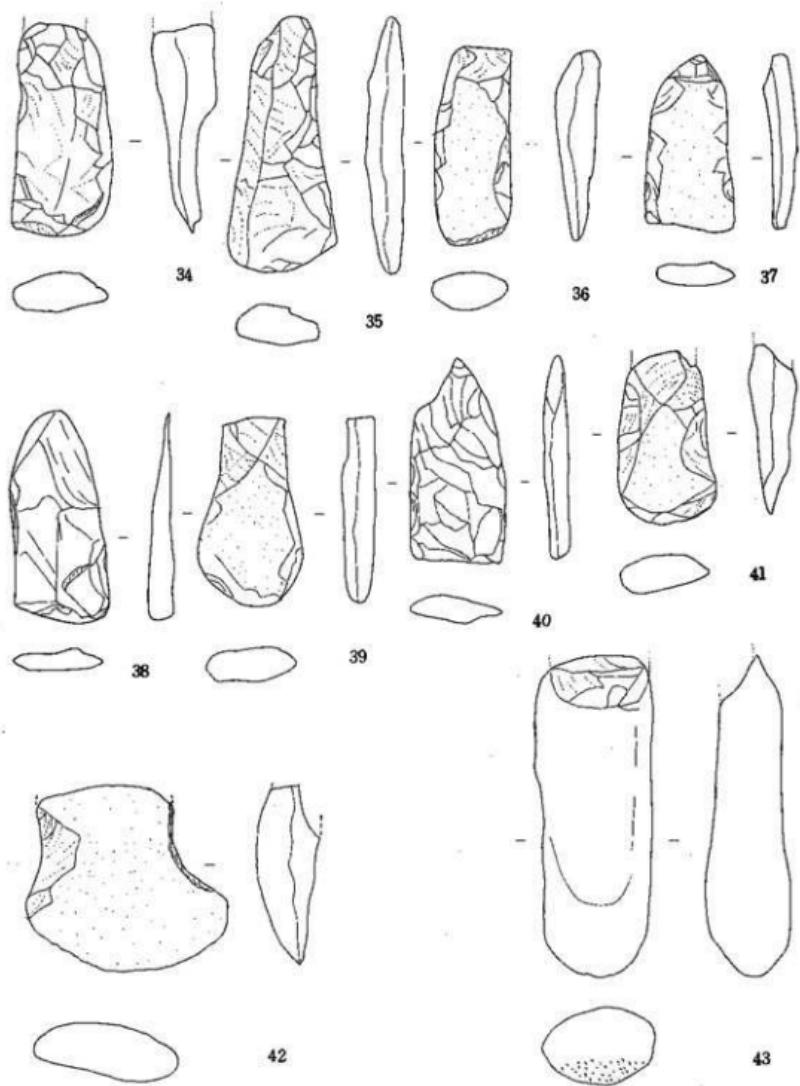


第198図 第58号住居址床面出土土器 (17は1/6他は1/3)

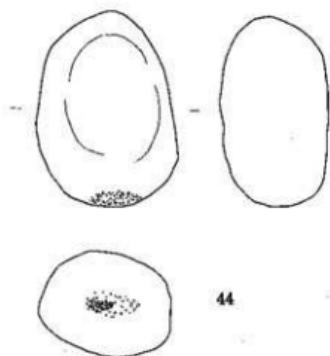
時期は壺の口縁部に強く外反するものもみられるが、壺の口縁部形態は後出のように折立部が直にならず強く内屈しており、これらからすると後期前葉の新しい時期と考えたい。



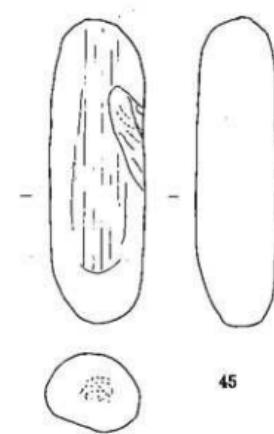
第199図 第58号住居址覆土出土石器 (1 / 3)



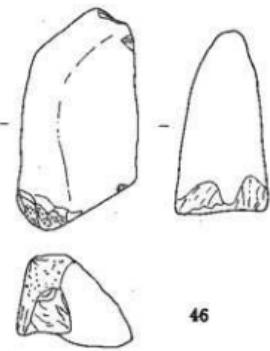
第200図 第58号住居址床面出土石器 (1 / 3)



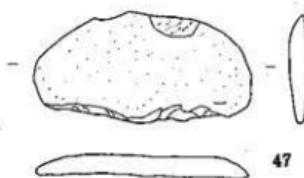
44



45

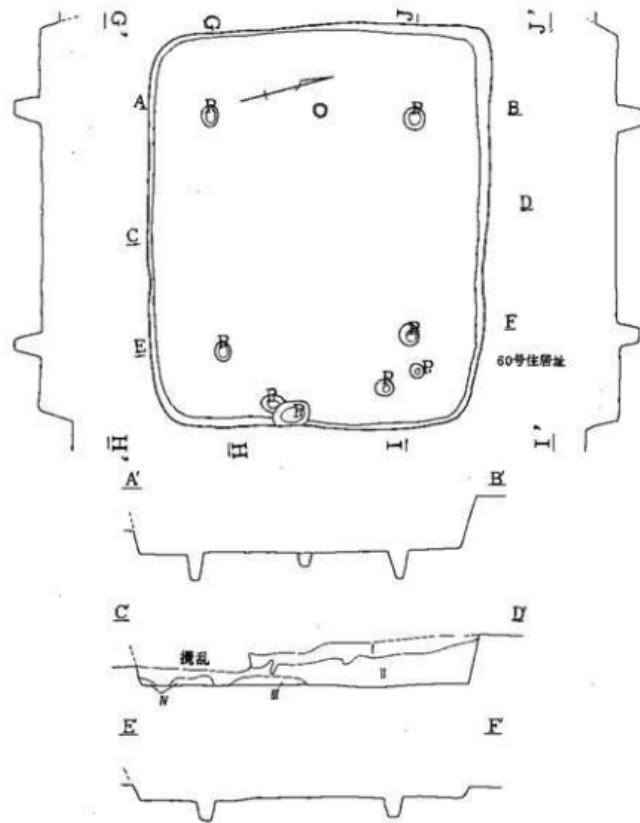


46

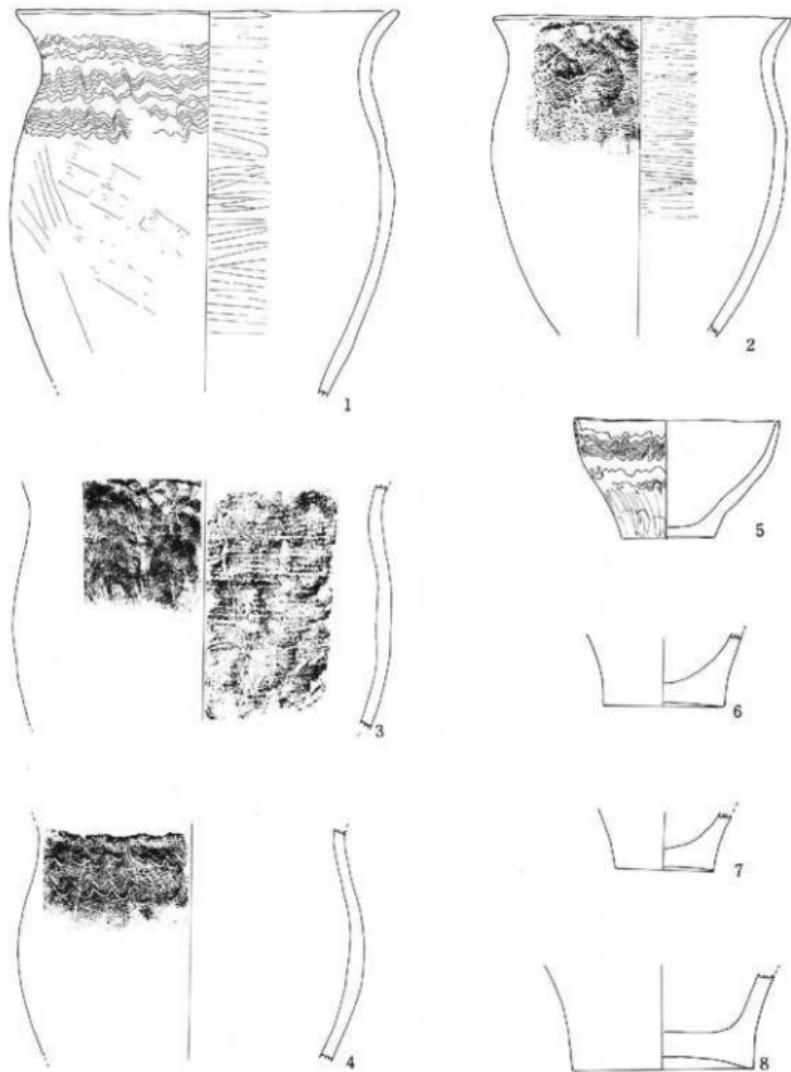


47

第201図 第58号住居址床面出土石器（1/3）



第202図 第59号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第203図 第59号住居址床面出土土器（1は炉、1/3）

⑪ 第59号住居址（第202・203図）

遺構 本住居址は第58号住居址の南西に位置し、北東にて第60号住居址を切っている。

プランは隅丸長方形で $5.7 \times 4.8\text{m}$ を測る。壁高は攪乱を受けていない北西部で75cmを測り、かなり深いものである。

床面には礫が露出し凹凸がはげしい。南側床面には自然石が乱雜な状態で検出されている。

炉は西P₁、P₂の線上やや外側にあり、埋甕炉である。主柱穴は4本である。東側のP₅、P₆、P₇は入口施設の痕跡の可能性が強い。

遺物 1は炉の埋甕で胴下部を欠いている。出土土器は5の鉢を除けば甕のみで、壺はみられない。

石器は多く床面より8点、覆土中11点の計19点が出土している。内訳は打製石斧11、敲打器3、横刃形石器2、磨製定角石斧・大形粗製石匙・特殊磨石各1点である。

時期は後期前葉である。

⑫ 第111号住居址（第204・205図）

遺構 当住居址は第118号住居址の南にあり、当址より南西には当期の住居址は検出されていない。南側は土塹54によって囲まれている。

プランは隅丸長方形を呈すが、他の住居址に比べ辺に丸味を持っている点、第8号住居址に類似する。規模は $6.2 \times 5.4\text{m}$ を測り、長軸方向はN-58°-Wである。

壁高は北で25cm前後、南で15cm前後と浅い。床面は中央部に向かってわずかに回んでおり、全体に軟弱である。全体に小ピットが穿れている。

炉は西P₁、P₃の中間線上より内側に入つてみられ、コ字形の石組炉である。内部はわずかに焼土がみられた程度である。埋設土器は伴わない。

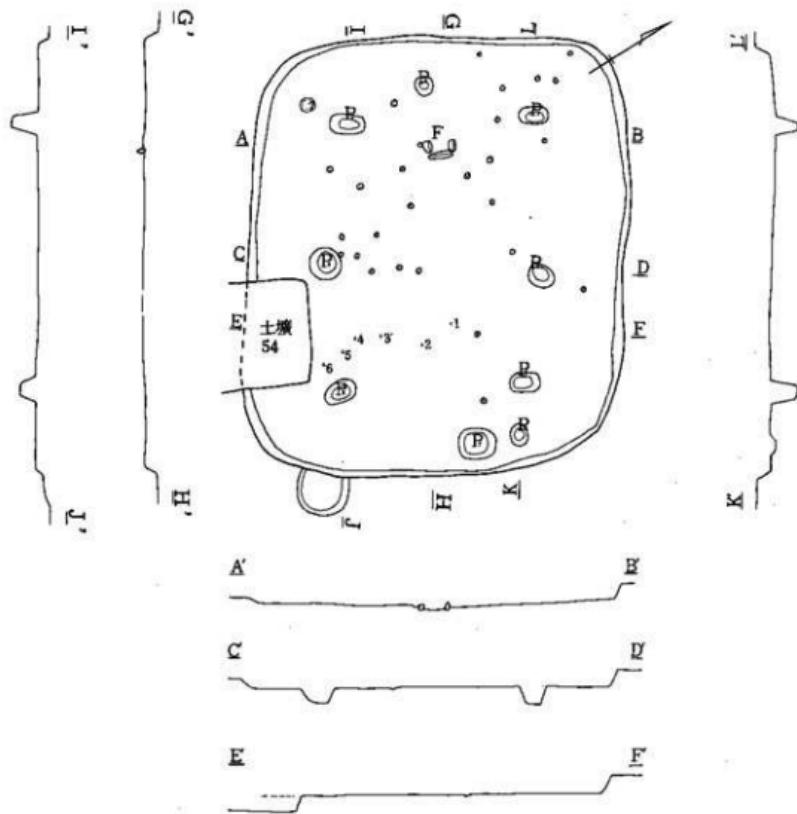
主柱穴は6本である。

土器は東側に集中して出土している。

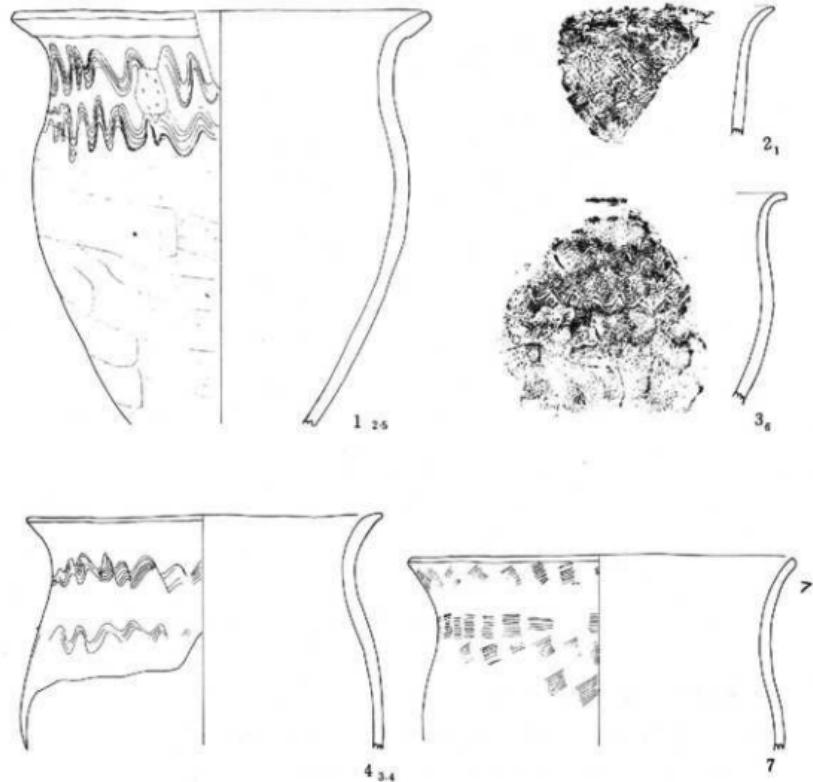
遺物 遺物は少ない。土器は甕のみで他の器種はみられない。

石器は敲打器2、打製石斧・特殊磨石各1の4点が出土している。

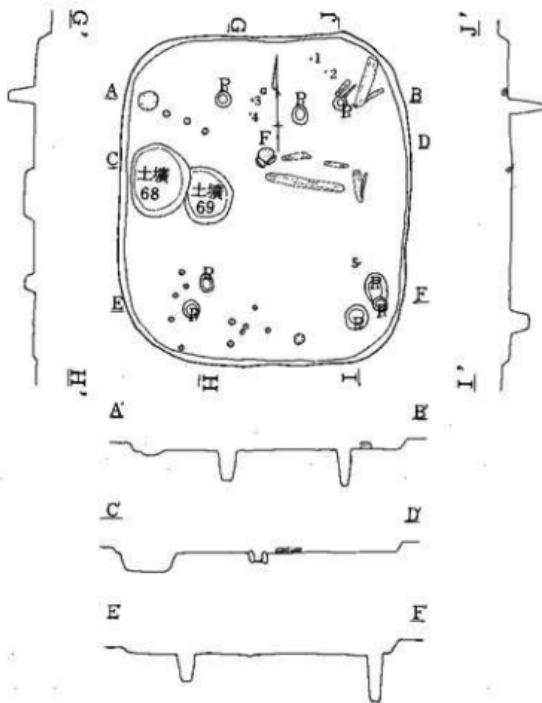
時期は後期前葉の旧い段階に属すると思われる。



第204図 第111号住居址実測図



第205図 第111号住居址床面出土土器（1 / 3）



第206図 第118号住居址実測図 (S = 1/80)

⑮ 第118号住居址 (第206・207図)

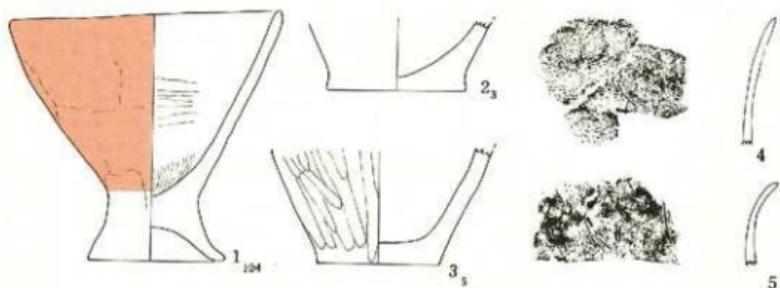
遺構 当住居址は第111号住居址の北東に位置し、10m北に第129号住居址がある。

プランは隅丸長方形で $4.7 \times 4.1\text{m}$ を測る。第111号住居址同様辺に丸味を持ち縁円形に近い。長軸方向はN-7°-Eである。壁高は東で20cm前後、西へ行くに従い低くなる。

炉の東を中心に炭化材が検出されており焼失家屋である。床面は西にやや傾き炉周辺以外は軟弱である。

炉は中央やや北寄りに位置しており、他の住居址と比べ、内側に設けられている。東と西に2個の石を持つ鍵手状石組炉で、内部は深さ15cmほど掘り込まれている。埋設土器はない。

主柱1・3・6・7の4本が考えられる。4・8からすると建替の可能性もある。



第207図 第118号住居址床面出土土器（1/3）

土器は炉を中心にして検出されている。

遺物 遺物は少ない。土器は甕が主体で他には高坏（1）が1点あるのみである。甕は口縁の反りがわずかのものである。1は高坏で外面頭部には朱彩の痕跡が残されている。

石器は磨製の乳棒状石斧1点が出土するのみである。

時期は後期も古い段階に属する。

⑩ 第129号住居址（第208～210図）

遺構 本住居址は第132号住居址の南東に近接している。住居址西は第128号住居址が北東部は第127号住居址が貼床している。

プランは隅丸方形で、規模は5.9×5.6mを測る。壁高は旧状を良く残す東側で60cmを測り、深い堅穴である。

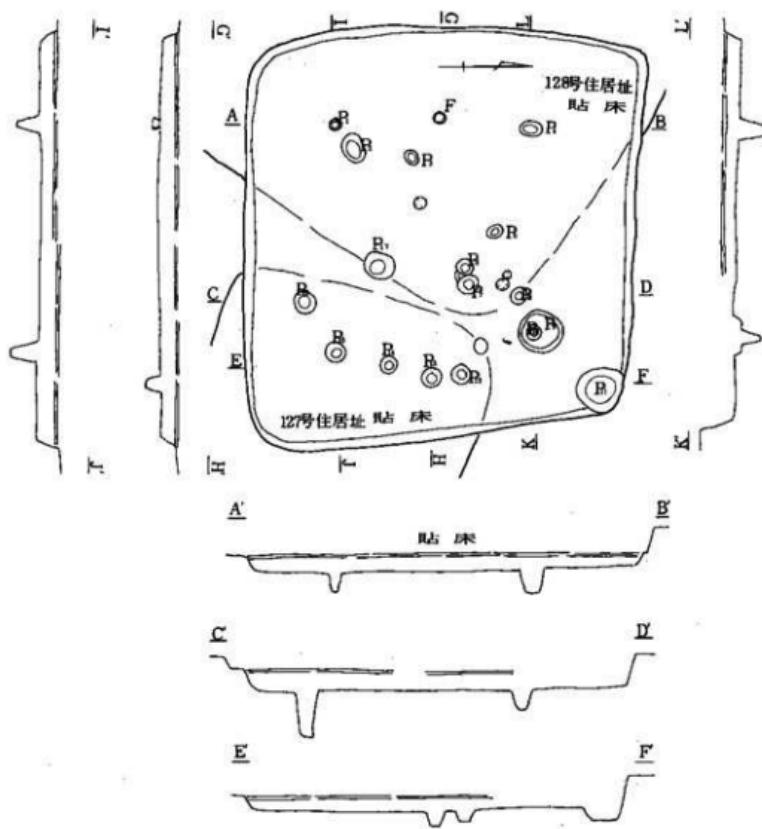
床面は全体に固く堅緻である。炉は西P₁、P₄の中間線上わずか外側にあり埋甕炉である。廻下部を欠く甕（第209図-1）の外側に甕の胴央部半分（2）が東側に貼られている。

主柱穴は1・4・10・15の4本である。

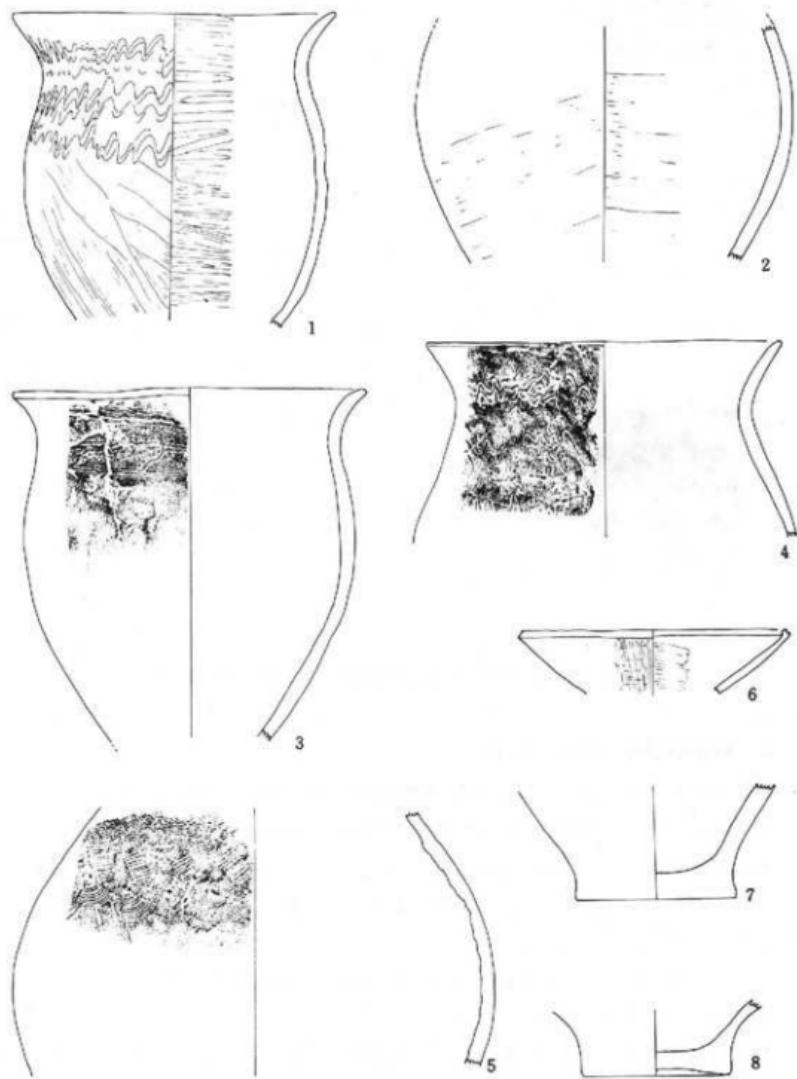
遺物 土器は豊富で器形を知り得るものも多い。甕が主体で他に壺（8・11）、鉢（6）がある。9は複合口縁を持つものである。11の壺の口唇は折立部がややゆるやかとなっている。

石器は敲打器が1点出土している。

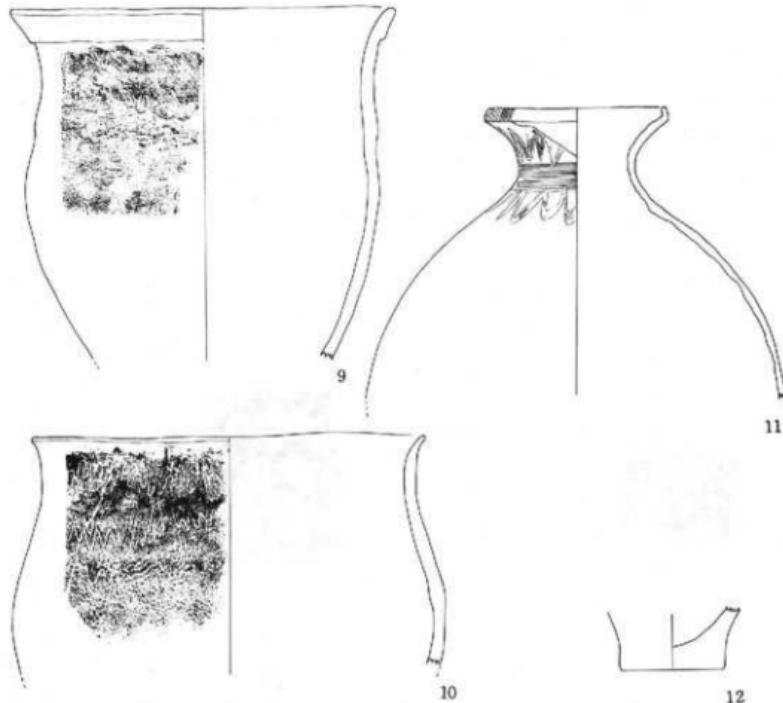
時期は後期である。



第208図 第129号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第209図 第129号住居址床面出土土器（1・2は炉、1/3）



第210図 第129号住居址床面出土土器 (11は1/6、他は1/3)

⑪ 第132号住居址 (第211・212図)

遺構 本住居址は第128号住の西に近接し南西部は第131号住居址が貼床している。

プランは隅丸長方形で規模は $5.6 \times 4.9m$ を測る。壁高は50cmほどを測る。

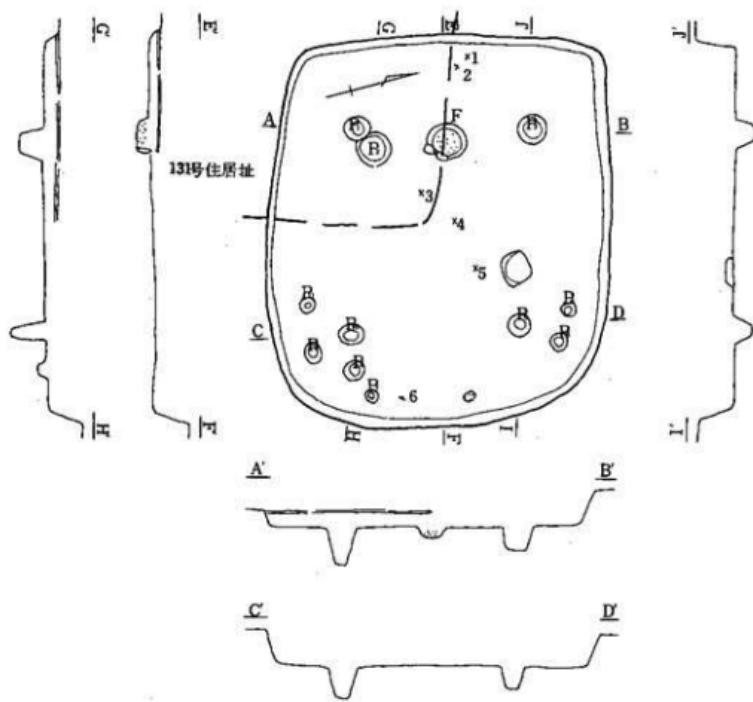
床面は中央部が幅1mほど炉に向かってわずか凹んでいる。全体に固く堅緻である。炉は西柱穴線上に位置しており、深さ10cmほどの地床炉で南東部に2個石が添えられている。他にもあつたかははつきりしない。埋甕はない。

主柱穴は4本である。柱穴に重複するものもあり建替の可能性もある。

遺物は炉の手前に集中して発見されている。

遺物 土器はあまり多くない。甕の外に大形の鉢(1)、高环(5)、壺(7)が出土している。

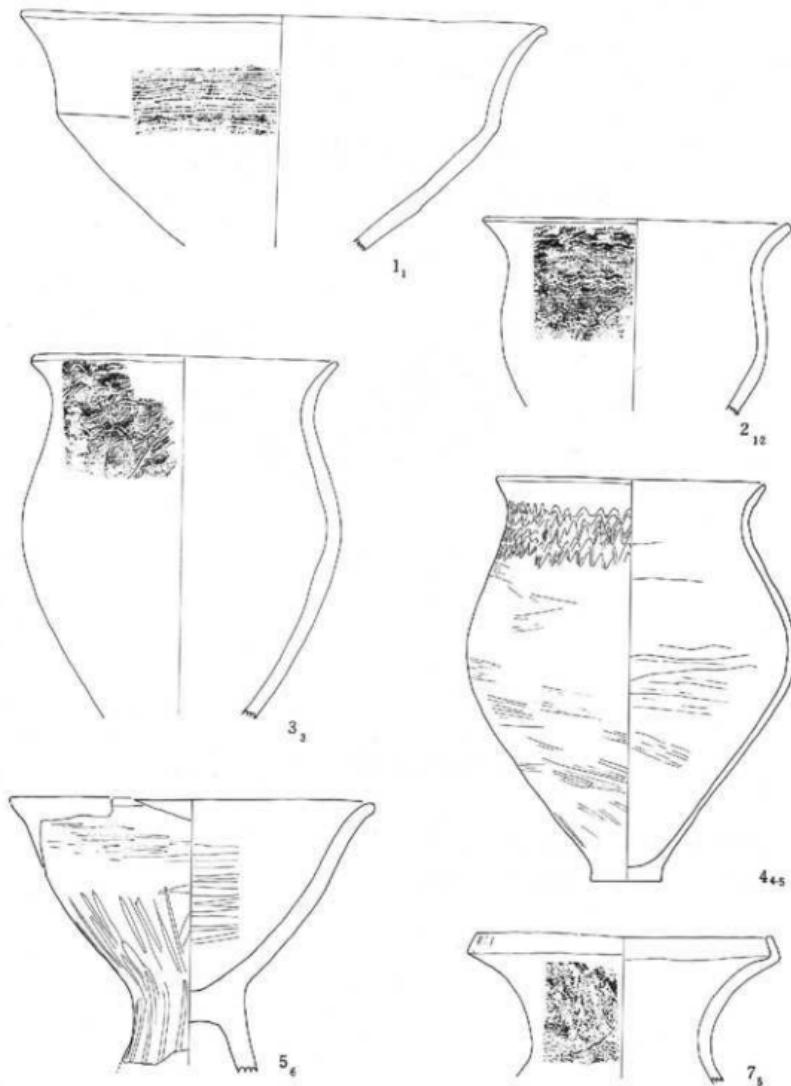
4は大形の甕で胸部が強く張るものである。7は折立部がやや長くなり直に近いものとなっている。



第211図 第132号住居址実測図 (S = 1/80)

石器は有肩石斧2点と打製石斧5点の計7点が出土している。

時期は、5・7などから後期も新段階に属するであろう。



第212図 第132号住居址床面出土土器 (4は1/6、他は1/3)

(3) 古墳時代以降

① 第2号住居址（第213・214図）

遺構 本住居址は該期としては最も東に位置しており、西にやや離れて第7号住居址がある。北は第5号住居址に貼床している。

プランは隅丸方形である。北側には部分的にロームブロックが三角錐状にみられ、壁の痕跡をとどめている。規模は $4.5 \times 4.3\text{m}$ を測る。長軸方向はN- 68° -Wである。

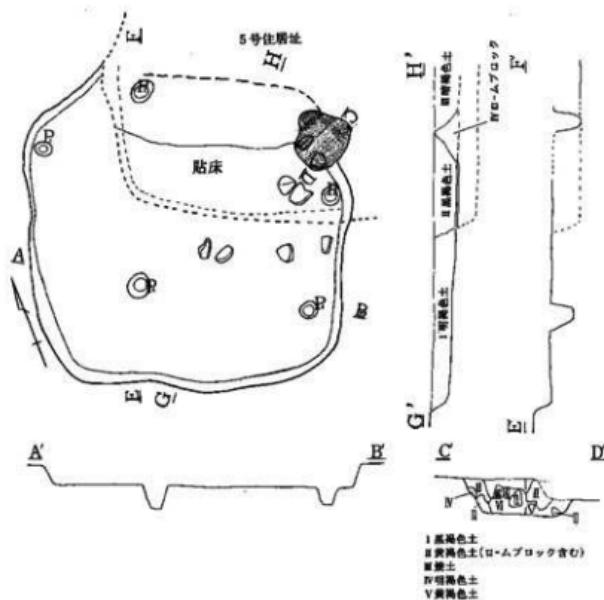
壁高は20~25cmを測る。床面は部分的にタタキがみられる程度で全体にやや軟弱である。貼床は第5号住居址覆土上にロームを薄く敷きタタいているが堅緻でない。

カマドは北東隅に位置する。袖前部に石を用いているのみで全体に簡略でくずれている。

柱穴は4本である。

遺物 灰釉が土体である。須恵器は壺の破片1片があるのみである。土師器は皿（1・4）の外に壺と壺の破片がみられる。灰釉は図示したもの以外にも壺が3個体ある。

4の壺は底部が高く柱状なるものである。高台として意識的に作出されたものは今後の課題

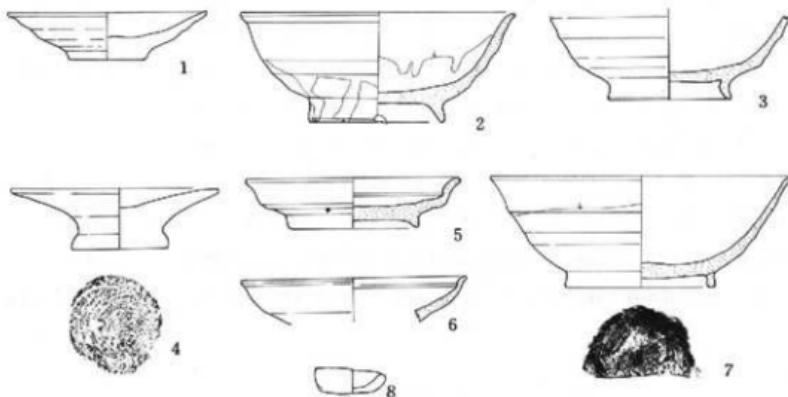


第213図 第2号住居址実測図 (S = 1/80, カマド断面図は 1/40)

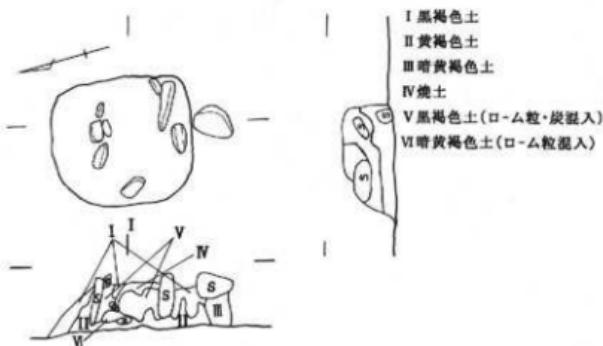
であるが、当遺跡からはまとまって出土している。一応柱状高台と呼んでおくこととする。

打製石斧2点が出土している。

時期は奈良・平安Ⅶ期（奈良・平安をI～VIIに大略分けてある）



第214図 第2号住居址出土遺物（1/3）



第215図 第7号住居址カマド実測図（S = 1/40）

② 第7号住居址（第215図）

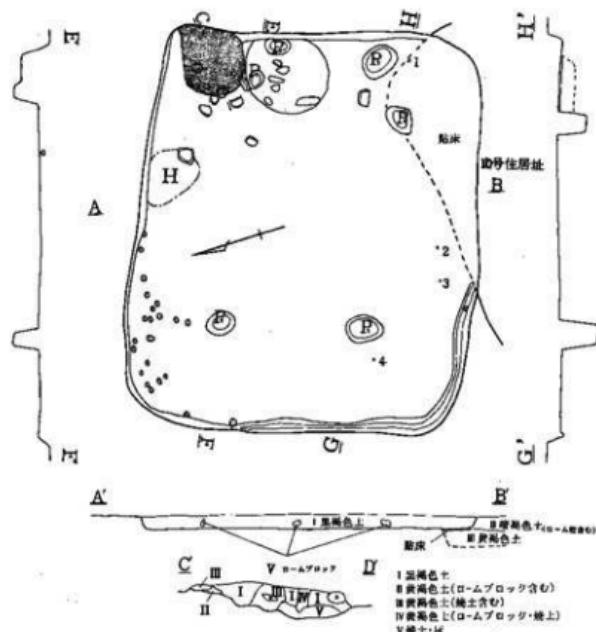
遺構 本址は第2号住居址の西に位置し、井をはさんだ北西には第9号住居址、南西には第13号住居址がある。

第6号住居址の覆土を掘り込んで造ったもので、床面差は5cmほどで貼床は検出することができず、カマドの存在で住居址とわかったものである。

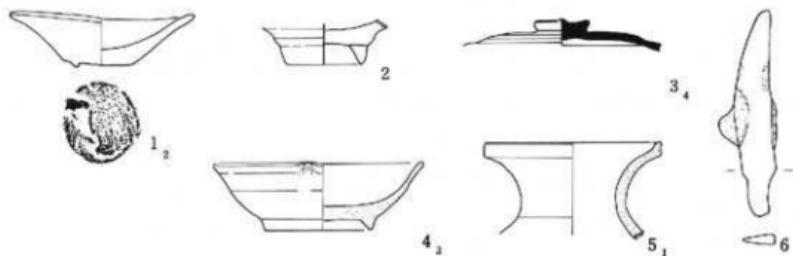
カマドは石芯造りである。焚口は西にある。

遺物 カマド周辺より土師器の壺と須恵器の壺が出土している。

時期は不明である。



第216図 第9号住居址実測図 (S = 1/80, カマド断面図は1/40)



第217図 第9号住居址出土遺物

③ 第9号住居址（第216・217図）

遺構 本住居址は第7号住居址の北に位置しており、本址の北側は遺構の空白地帯となっている。南東部は第10号住居址に一部貼床している。

プランは隅丸長方形を呈し、規模は $5.7 \times 4.9\text{m}$ を測る。長軸方向はN-69°-Wである。壁高は15cm前後である。

周溝が西壁から南壁にかけてみられるが、貼床部分でははっきりしなかった。床面は全体に堅緻である。北西壁ぎわには小ビットが穿れる。第10号住居址との床面差は20cmほどである。

カマドは北東隅に造られており、袖石はみられない。主柱穴は4本である。カマドの南横に径100cm、深さ30cmの小堅穴がある。

P³の南わきより広口瓶（5）、P⁵の南より土師器の皿（第216図-1）、灰釉の壺（4）、須恵器の蓋（3）が出土している。

遺物 遺物は少ない。図示したもの以外では土師器の甕の底部と环、灰釉の壺がみられ、須恵器は3以外にはみられない。3は混在と思われる。

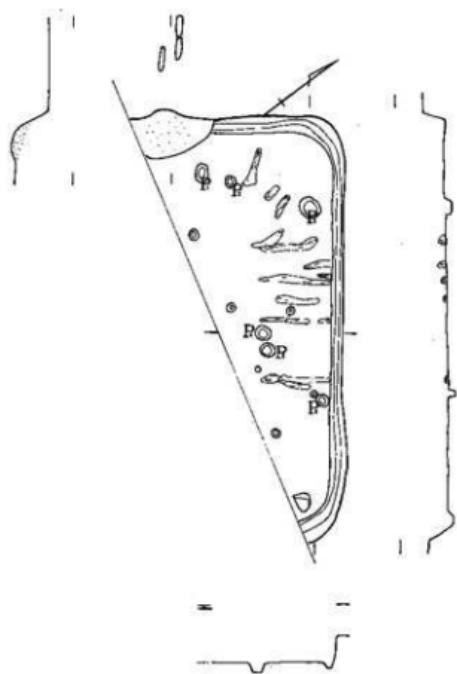
鉄器では6の幅広な刀子がある。

時期は奈良・平安VII期である。

④ 第13号住居址（第218~220図）

遺構 本住居址は第7号住居址の西に位置しており、南側大半以上は調査地区以外のため、三角状に1/4ほどが検出されただけのものである。

プランは隅丸長方形を呈すと思われる。カマドの位置から推測すると $6.0 \times 4.8\text{m}$ を測ると思われ、長軸方向はN-50°-Wである。



第218図 第13号住居址実測図 ($S = 1/80$)

壁高は35cm前後で北壁は直に近い。周溝が一周していたものと思われる。

床面上には壁に直交する形で規則的に幅5~10、厚さ5cmほどの炭化材が検出されている。種と考えられる。

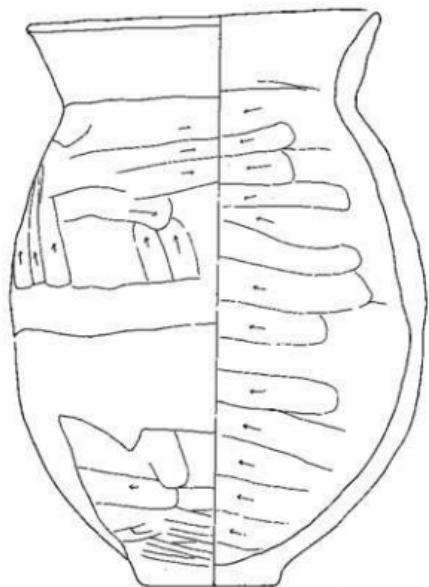
床面は良くタタかれ堅緻である。

カマドは北西壁にあり袖石はみられない。壁外に二列に並行するよう石が埋め込まれている。位置からして煙道と考え、カマドまでの断面調査を行ったが、痕跡を認めることはできなかった。

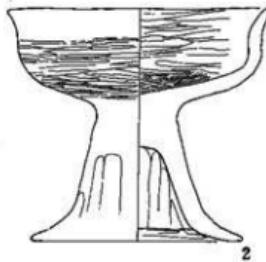
カマドの手前から多くの土器が出土している。

遺物 調査範囲の割りに多くの遺物がみられ、該期の良好なセット資料となるものである。

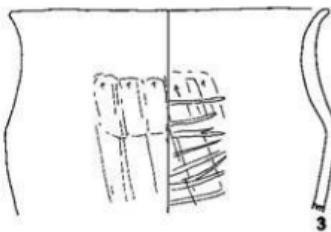
土器以外は出土していない。甕(1・3・4・8・9)の外に高壺(2)、瓶(5・7)、壺(6)、鉢(10)があり、手づくね土器も2個(11・12)出土している。



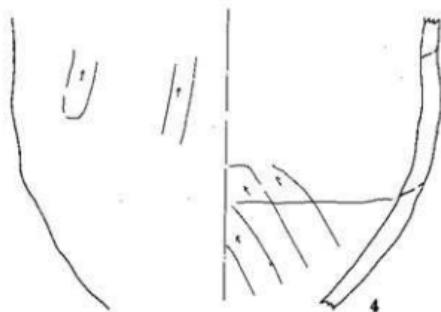
1



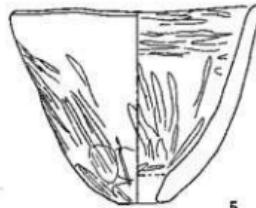
2



3



4

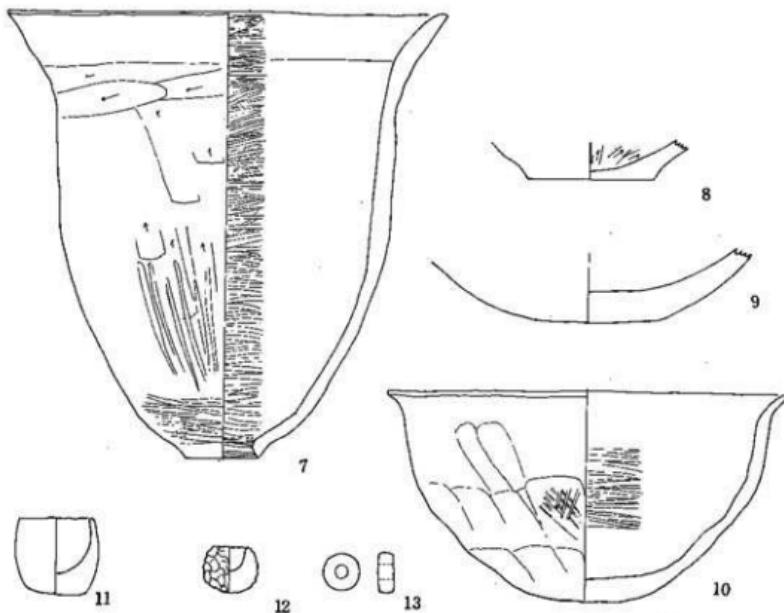


5



6

第219図 第13号住居址出土遺物 (1/3)



第220図 第13号住居址出土遺物 (13は1/1、他は1/3)

さらに覆土中より13の管玉が1点出土している。

覆土中より打製石斧2点が出土している。

時期は古墳時代IV期古段階（長野県史編年）と考えられる。

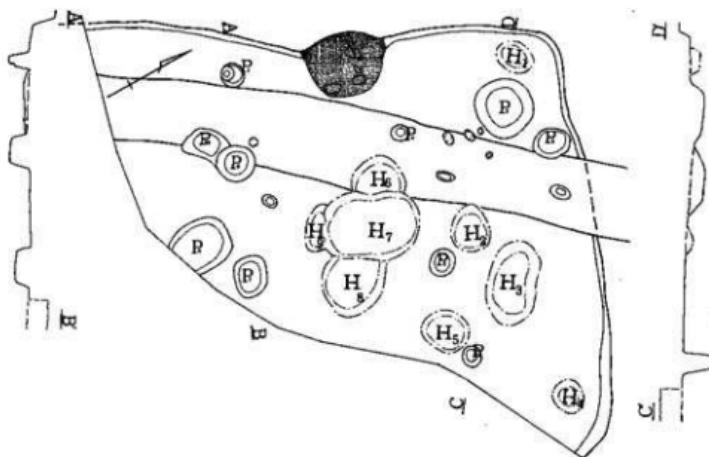
⑤ 第14号住居址（第221～223図）

遺構 当住居址は第18号住居址の東に近接しており、東から南側は井によって壊されている。又、カマドの手前を溝状遺構が走り壊されている。

プランは隅丸長方形を呈すと思われるが定かでない。壁高は搅乱がひどく一定しておらず15～30cmである。

床面は多くの灰だまりが掘り込まれている。灰だまりとは焼土・灰の入り混じった不定形のピットで、上面はタタいて床面とするのが一般で、この時代には多くみられる例である。

カマドは西壁にあり中央に位置すると思われる。はっきりとした袖石はみられない。



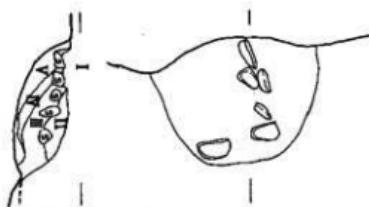
第221図 第14号住居址実測図 ($S = 1/80$)

主柱穴は P_1 , P_2 が考えられるが定かでない。東側ははっきりしない。

遺物 須恵器と土師器が出土している。器形を知り得るものはない。図示したもの以外には土師器の甕が 2・3 個体と須恵器の甕がある。

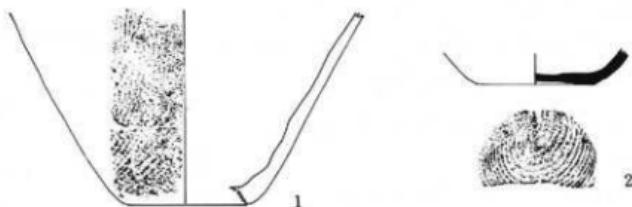
打製石斧 9 点と編物用錐石が 9 個出土している。

時期は奈良・平安Ⅲ期と思われる。

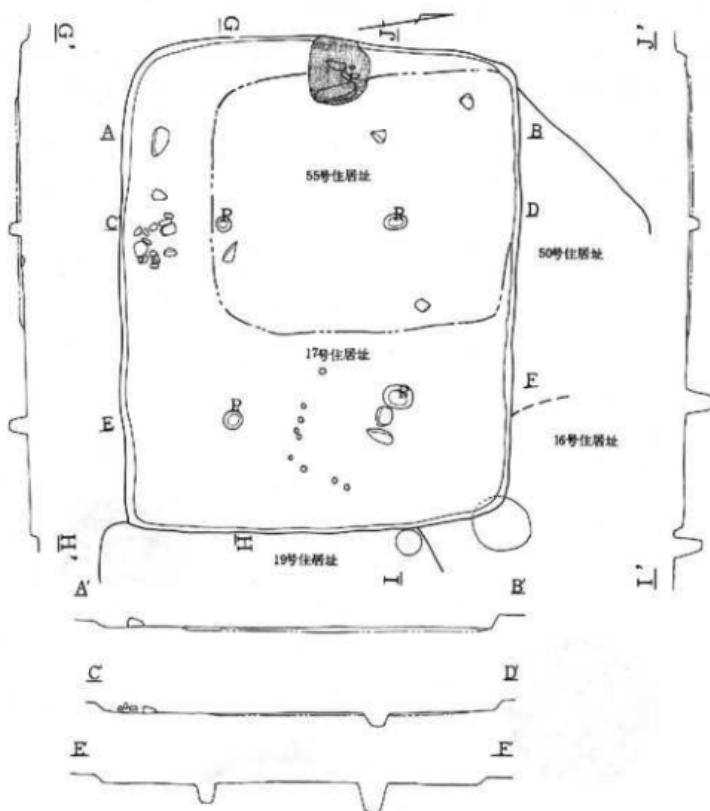


- I 黄褐色土(ロームブロック含む)
- II 灰黒色土
- III 硫土
- IV 赤褐色土(硫土・ローム粒・灰)
- V 増褐土

第222図 第14号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)



第223図 第14号住居址出土遺物（1/3）



第224図 第17号・55号住居址実測図 (S = 1/80)

⑥ 第17号住居址（第224～226図）

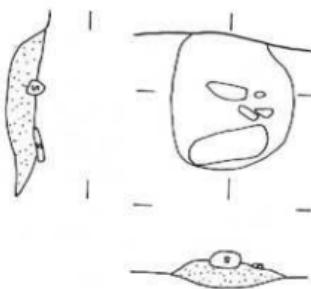
遺構 本址は第18号住居址の西に位置し、東にて第19号住居址、北にて第50号住居址を切っている。また本址の北西部は第55号住居址の上に全面貼床をしている。床面差5～10cmほどである。貼床は55号住居址の覆土をタタくものである。

プランは隅丸長方形を呈し、規模7.0×5.6mを測り大形に属するものである。長軸方向はN-80°-Wである。

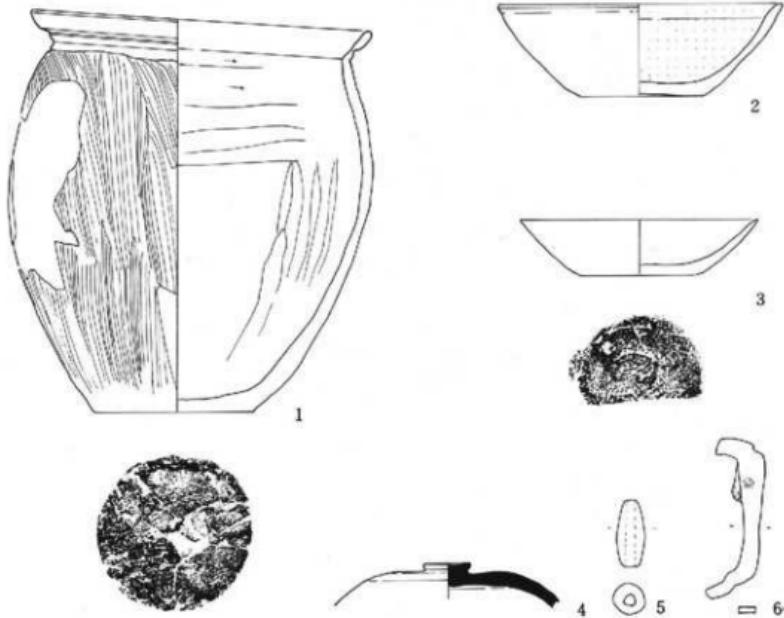
床面はタタキが顕著でなく全体に軟弱である。

カマドは西壁中央にあり、くずれており、焼土を残すのみである。

主柱穴は4本である。



第225図 第17号住居址カマド実測図
(S = 1/40)



第226図 第17号住居址出土遺物 (1/3)

遺物 土師器と須恵器で灰釉はみられない。

図示以外では土師器の長頸壺・壺があり、須恵器では壺、高台付壺がある軟質な粗雑なものである。

5は土錘、鉄器として6の麻皮剥器がある。

時期は奈良・平安Ⅲ期に属する。

⑦ 第18号住居址（第227・228図）

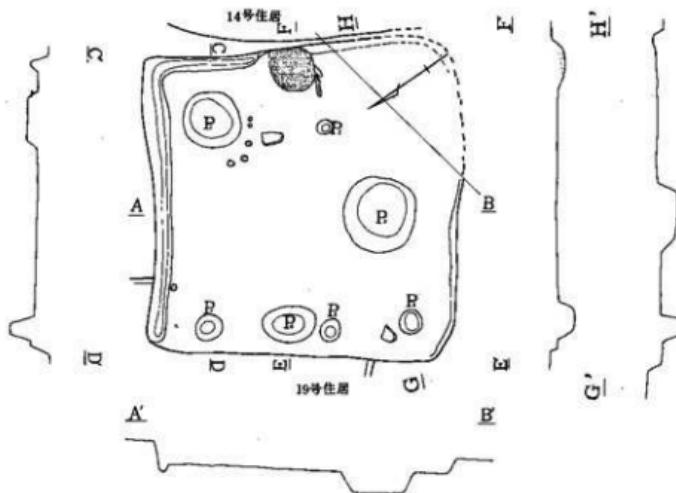
造構 本住居址は第14号住居の南西に近接し、西にて第19号住居址を切っている。南側コーナーは井と溝状造構によって壊されている。

プランは隅丸方形で、規模4.3×3.9mを測る。長軸方向はS-56°-Wである。壁高は北で30cm、南側で15~20cmである。

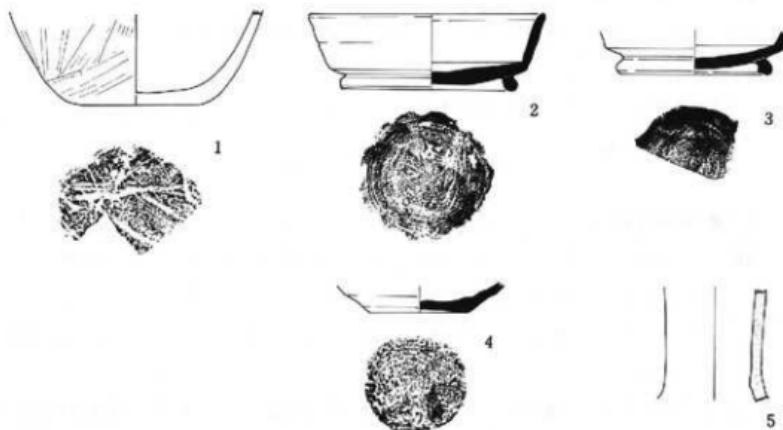
北東から南東にかけて周溝がある。床面は西に傾きやや軟弱である。カマドは南東壁中央に造られ、焼土を残すのみである。

主柱穴は1・4・7の3本があり、もとは4本と考えられる。

遺物 量は少ない。土師器は1の壺以外、小形壺と壺がある。須恵器は2・3の高台付壺の外に壺がある。灰釉は5の長頸壺があり他に壺がみられる。



第227図 第18号住居址実測図 (S = 1/80)



第228図 第18号住居址出土遺物（1/3）

打製石斧と敲打器各1点が出土している。

時期は決め難いが須恵器からすると奈良・平安Ⅱ～Ⅲ期であろう。

⑧ 第20号住居址（第229図）

遺構 当住居址は第21号住居址の北にあり北西一帯の畠は天地変えしが行われ、搅乱を受けている。

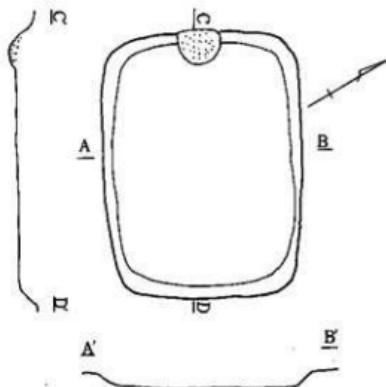
プランは隅丸長方形で、大きさは $3.9 \times 2.8m$ と小形のものである。長軸方向はN-62°-Wである。壁高は20cm前後で非常にゆるやかな立ち上がりをみせ舟底状である。

床面は中央部に若干のタタキが認められる外は軟弱である。

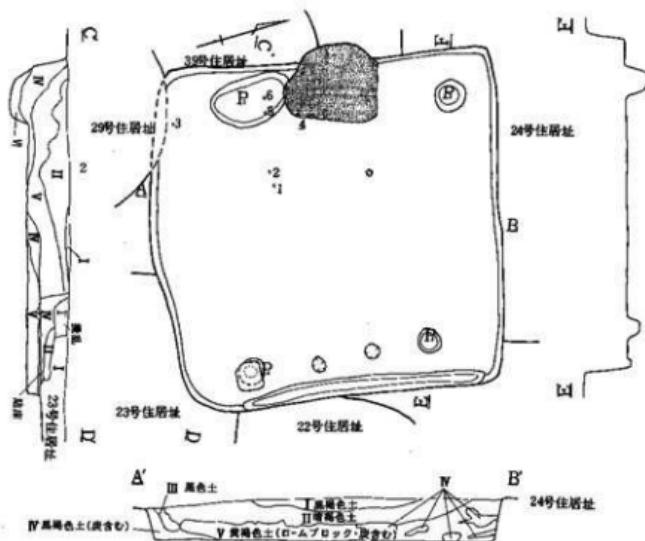
カマドは西壁中央にあり、焼土が残るのみである。柱穴はまったく検出されていない。

遺物 土師片の小片と縄文土器の細片が出土するのみである。

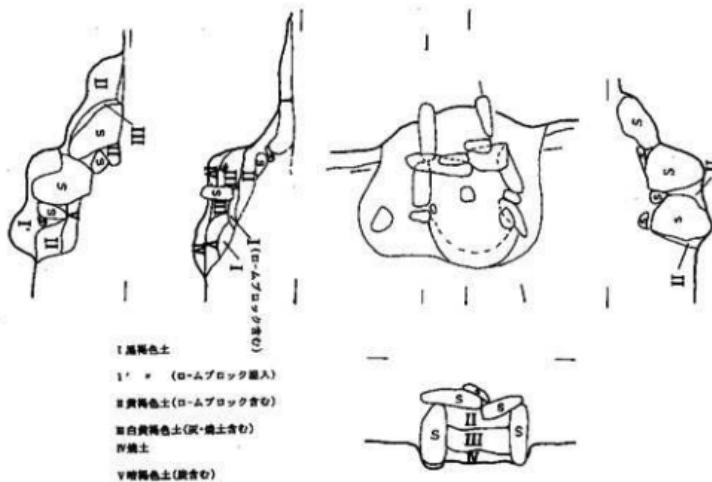
時期は不明である。



第229図 第20号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第230図 第21号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第231図 第21号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

⑨ 第21号住居址 (第230~232図)

遺構 本住居址は第23号住居址の北西にあり、一部貼床されている。東で第22号住居址、北は24号住居址、西では第39号住居址を切っている。

プランは隅丸方形で規模は $5.0 \times 4.8m$ を測る。壁高は北側で60cm、南側は40cmと低くなる。壁は北側では直に近く南はややゆるやかである。東側に一部周溝がみられる。

床面は南東にわずか傾いており、全体にタタキが良くみられ堅緻である。

カマドは西壁中央に位置している。壁を30cmほど斜めに掘り込み造られている。袖石は床面を掘り込んで据えられしっかりと組まれており、天井石と支脚石も残っている。

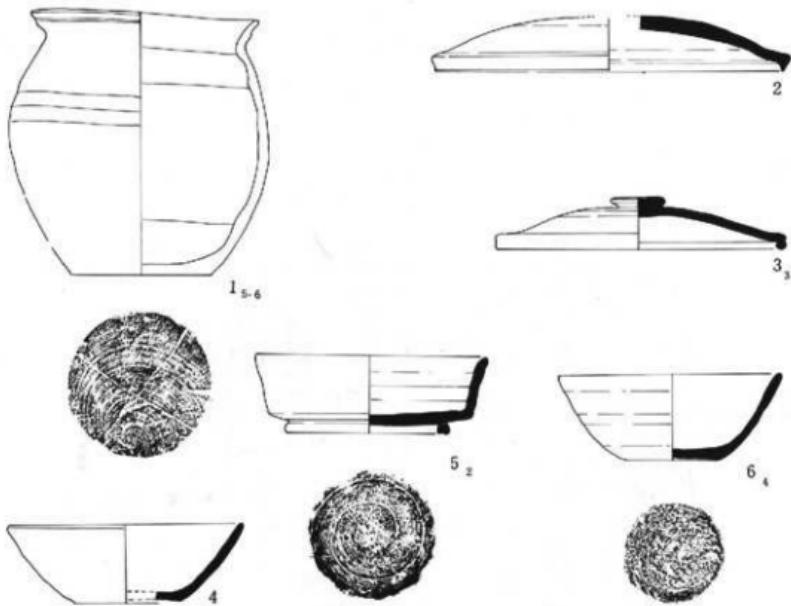
主柱穴は4本である。

遺物はカマドの左側に集中してみられる。

遺物 土師器と須恵器のみである。須恵器が主体で、土師器は1の小形壺の外に壺と壺の破片が少量みられる。須恵器は図示したもの以外に長頸壺と蓋がある。

石器が27点と多く出土している。内訳は打製石斧14、敲打器5、磨石4、磨製蛤刃石斧2、圆石、石礫各1点である。周囲の住居址からの流入と考えられる。

時期は奈良、平安II期であろう。



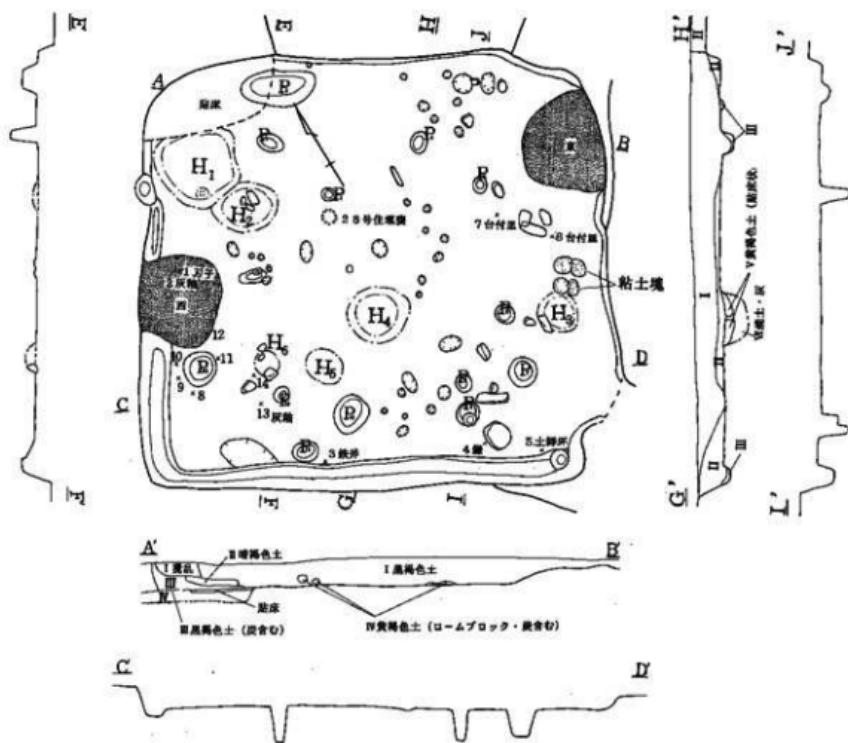
第232図 第21号住居址出土遺物 (S = 1 / 3)

⑩ 第23号住居址 (第233~236図)

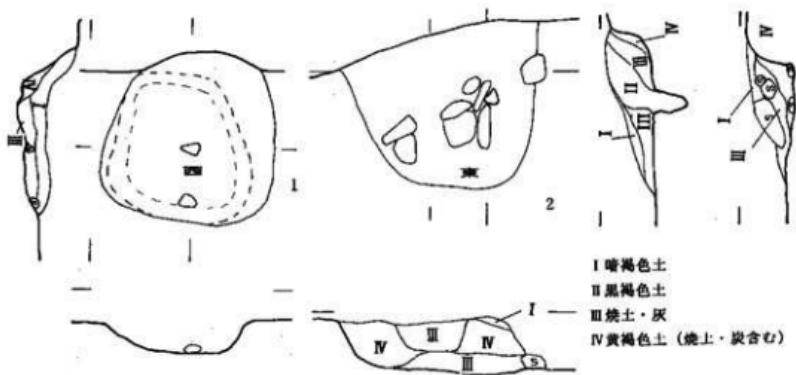
遺構 当住居址は第25号、26号住居址の西にあり、北西部は第21号住居址に一部貼床している。さらに北では第22号住居址を東で第30号住居を切っている。また本址のP₃のわき床面より縄文時代中期の土器が埋設されており、これを伴う第28号住居址を廃して造られている。

本址からは北西壁中央と南東隅の2箇所にカマドが検出されている。壁や床面には切合等、重複の痕跡がみられなかったため、カマドを2箇所を持つ一軒の住居址として処理していたが、後述するように遺物に時間差がみられるため重複住居と考えるのが妥当と思われる。しかしながら両住居址のプラン・規模は決め難い。現況平面は6.5×6.2mを測る隅丸方形である。

壁高は25~40cmと一定していない。床面はほぼ平坦で堅緻である。すでに述べたようにカマドは北西壁中央(便宜上西)と南東隅(東)の2箇所にみられる。西のカマドには焼土を残すのみである。東のカマドはわずかに原形をとどめている。右側には袖石が認められるが簡略なもので



第233図 第23号住居址実測図 (S = 1 / 80)



第234図 第23号住居址カマド実測図 (S = 1/40)

ある。

中央断面に深さ15cmほどの落ち込みが認められ支石の痕跡と考えられる。

柱穴はP₁、P₃、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈、P₉、P₁₂が考えられる。

遺物は西のカマドの左手前に特に集中してみられ、南西壁ぎわから鉄斧(第236図-23)、鎌(22)が、東のカマド右側からは柱状高台の皿(19・20)が出土している。

遺物 土師器・須恵器・灰釉がある。図示したもの以外では須恵器の壺、灰釉の瓶の破片がある。須恵器は軟質のものが多い。

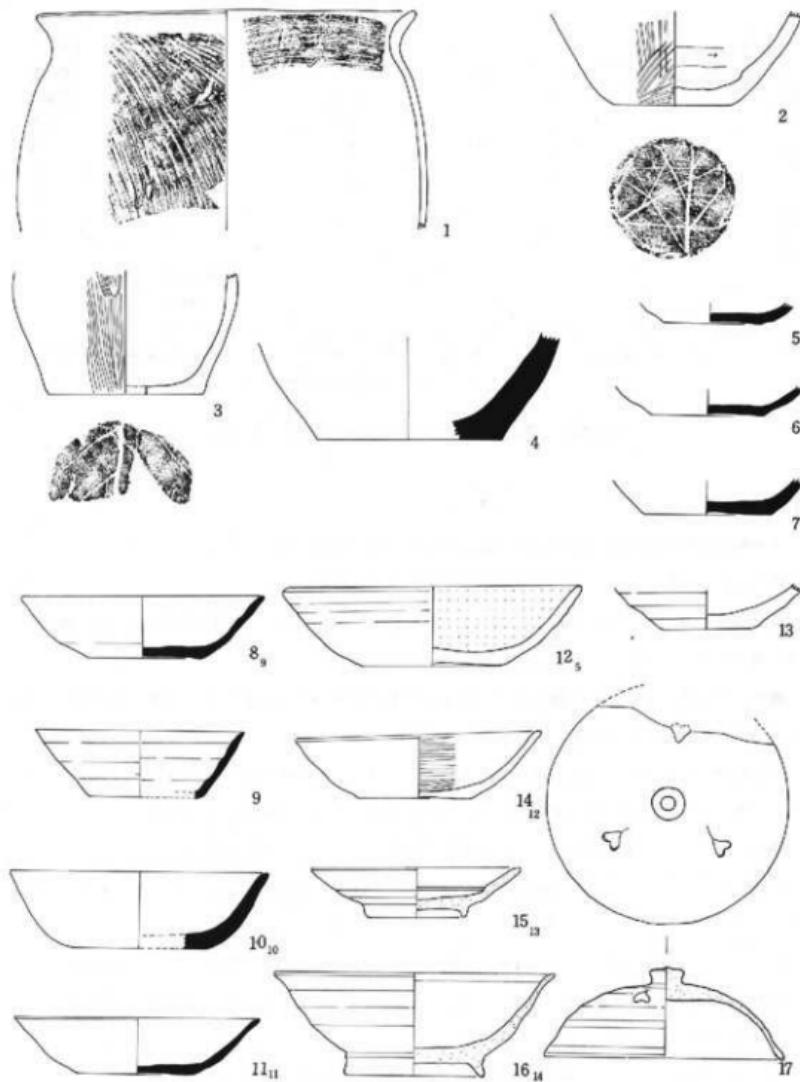
17は無釉の灰釉香炉蓋で接合資料である。天井下部に3個の猪の目透し彫りを持つもので、県内での出土は珍しい。緑釉の素地なのがいわゆる白瓷なのがいずれにしろ好資料である。

鉄器も多い。22は鎌、23は鉄斧、24は鐵環、26は刀子である。25は器種不明である。

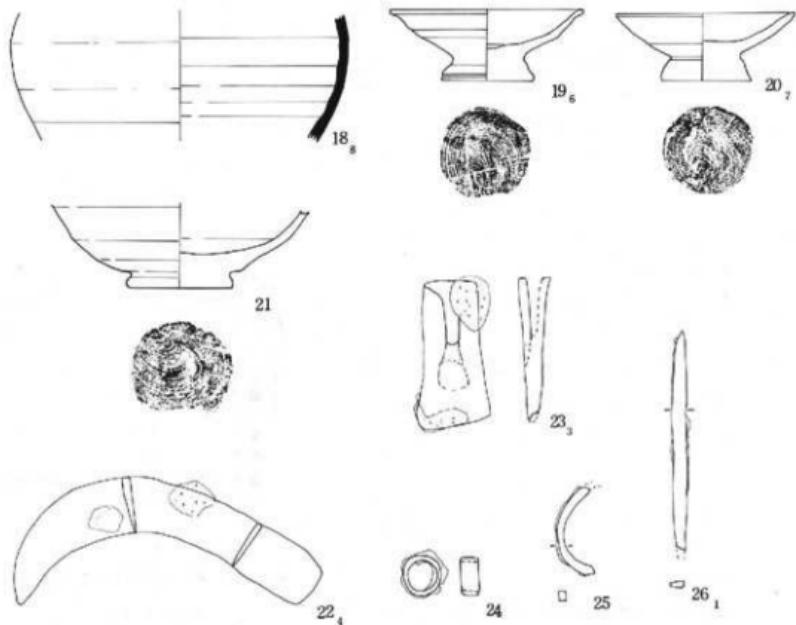
石器が14点出土している。打製石器6、敲打器4、横刃形石器2、磨製始刃石斧・特殊磨石各1点である。

時期は8~11の須恵器と15・16の灰釉・19~21の柱状高台を持つ土師器とには明らかに時期差が認められ、重複住居を裏付けている。前者は1~3の壺とともに奈良・平安Ⅲ期、後者は奈良・平安Ⅶ期に位置づけられる。

カマドの位置からして西のカマドは前者に東のカマドは後者に伴うものである。



第235図 第23号住居址出土遺物（1/3）



第236図 第23号住居址出土遺物（1/3）

⑪ 第25号住居址（第237～239図）

遺構 本住居址は第23号住居址の南に位置している。南東部はしばらく遺構の空白地帯となっている。

プランは南側が土手による搅乱を受けくなっているが、隅丸方形を呈し、規模 $4.0 \times 3.9m$ を測る。長軸方向はN-9°-Eである。壁高は北で35cmである。床面は凹凸があり、壁ぎわは軟弱である。

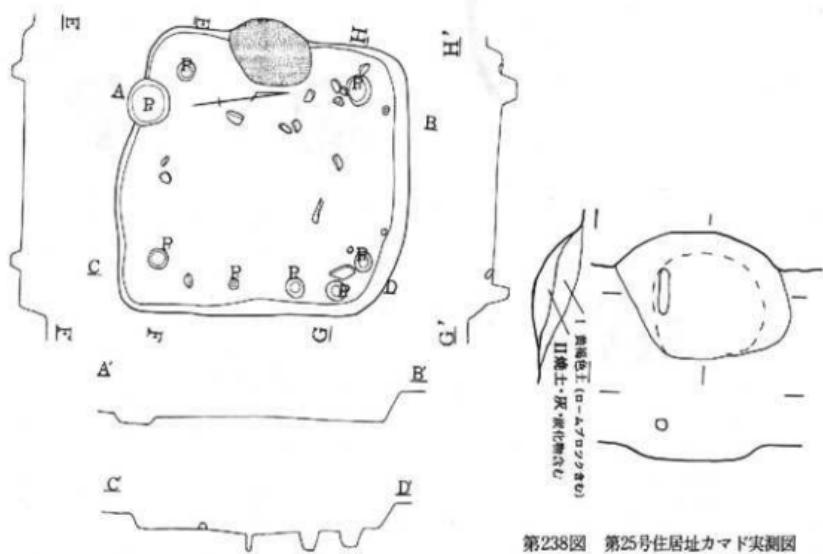
カマドは西壁中央に位置し壁をわずか削って造られている。袖石はみられない。

主柱穴は4本である。東壁ぎわP₅、P₆は入口施設痕と考えられる。P₃、P₄の間に平盤な石がすえられており、台石と考えられる。

遺物 遺物は少ない。土師器・須恵器が主体で灰釉は壺の破片が1点みられるのみである。

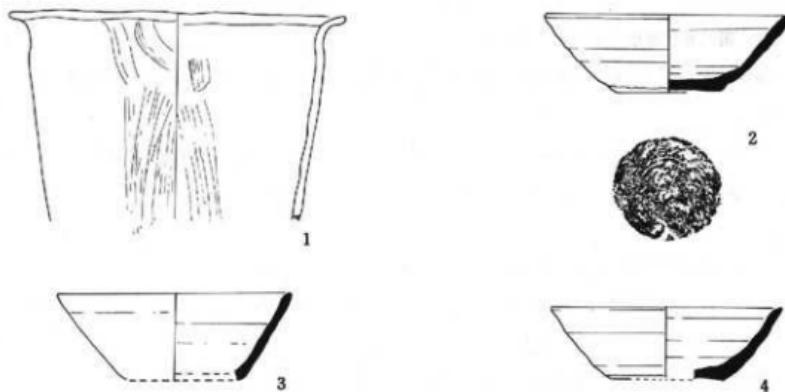
石器は大形粗製石斧1点と覆土中から石礫2点が出土している。

時期は奈良・平安II期であろう。



第237図 第25号住居址実測図 ($S = 1/80$)

第238図 第25号住居址カマド実測図
($S = 1/40$)



第239図 第25号住居址出土遺物 (1/3)

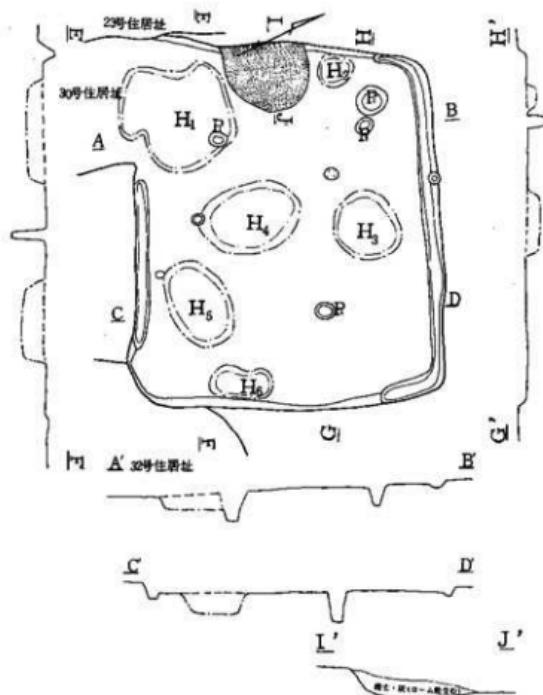
⑪ 第26号住居址（第240・241図）

遺構 当住居址は第23号住居址の東に接して検出され、南西部は第30号住居址と同一床面にて重複する。

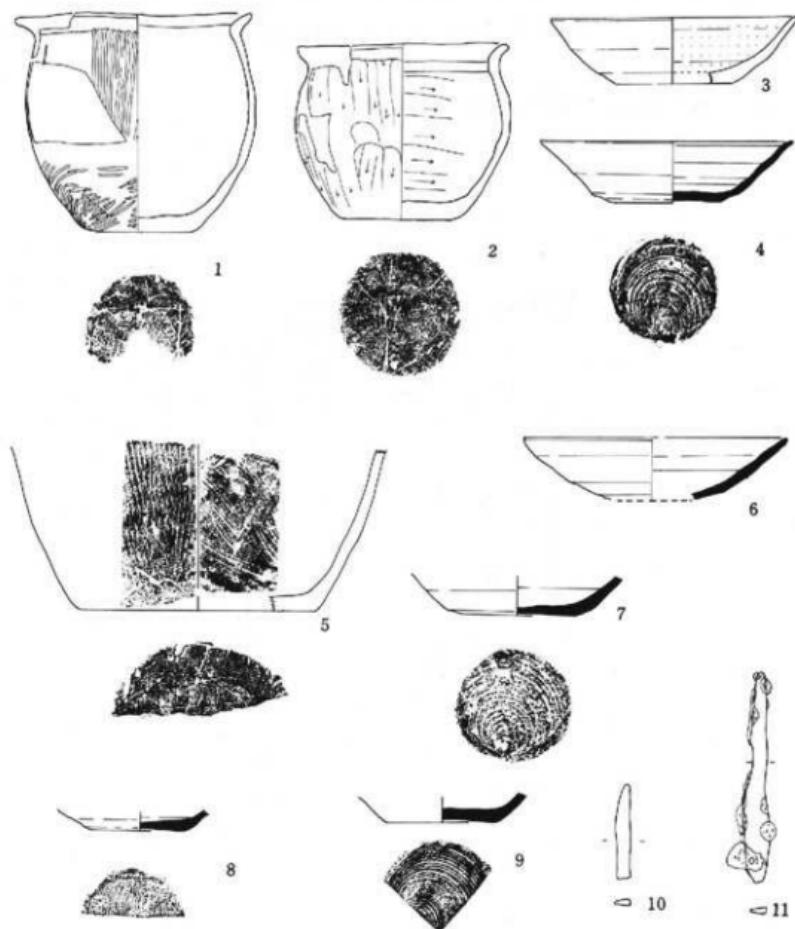
プランは隅丸長方形を呈し、規模は $5.2 \times 4.3\text{m}$ を測る。長軸方向はN-67°-Wである。壁高は10cm前後と浅い。北側と南側の一部に周溝がみられる。床面は灰だまりがみられるが全体に堅敏である。

主柱穴3本が認められ、南東部は検出できなかった。

カマドは西壁中央にあり焼土のみである。



第240図 第26号住居址実測図 (S = 1/80、カマド断面図は 1/40)



第241図 第26号住居址出土遺物 (1 / 3)

遺物 土師器と須恵器で灰釉は出土していない。土師の甕には小形甕(1・2)と長胴甕(5)がある。須恵器では図示したもの以外に甕がある。

鉄器では10・11の刀子2点がある。

縞物用錐石が19個と敲打器1点が出土している。

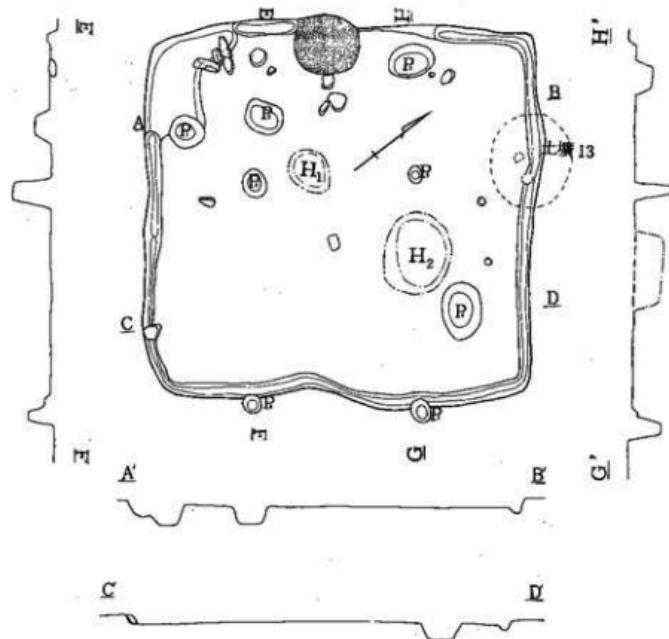
時期は奈良・平安Ⅲ期である。

⑪ 第27号住居址 (第242~244図)

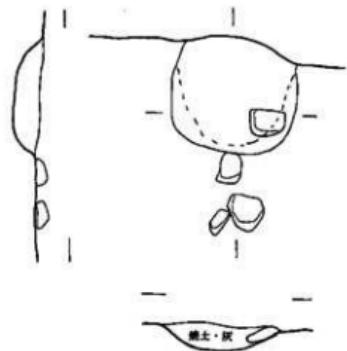
遺構 当住居址は第36号住居址の西にあり、北側は除地となっている。開田時に上部は削りとられている。北東部は土壇13に貼床している。

プランは隅丸方形で、規模は5.5×5.3mである。長軸方向はN-38°-Eを示す。

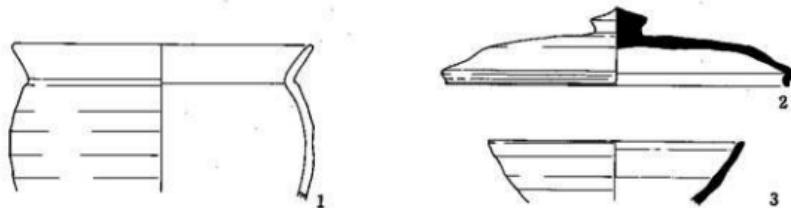
壁高は現況で10cm前後である。周溝がほぼ一周する。



第242図 第27号住居址実測図 (S = 1/80)



第243図 第27号住居址カマド実測図 (S = 1 / 40)



第244図 第27号住居址出土遺物 (1 / 3)

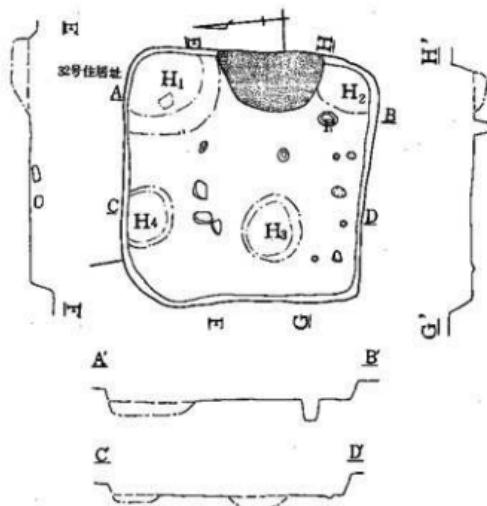
床面はやや南に傾き、良くタタかれており堅緻である。カマドは北西壁中央に造られ、焼土が残るのみである。基底部は深さ10cmほどである。

主柱穴はP₄、P₅、P₇、P₈の4本で南東2本は壁外に掘られている。該期に往々してみられることがある。

カマドの左と手前床面に自然石がみられる。

遺物 遺物は少ない。灰軸は出土していない。図示したもの以外には土師の壺と須恵の蓋である。

時期は決め難いが奈良・平安Ⅲ期であろう。



第245図 第31号住居址実測図 ($S = 1/80$)

⑩ 第31号住居址 (第245)

～247図)

遺構 本址は第26号住居址の南東に位置しており、北の第32号住居址を切っている。

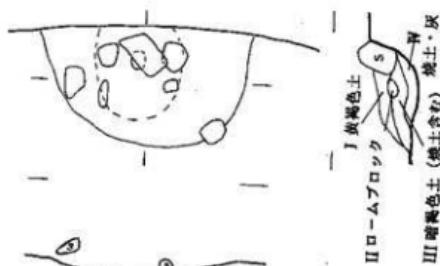
プランは隅丸方形を呈し、規模は 3.6×3.5 mと小形の住居址である。

壁高は30cm北東部が15cmと低くなっている。

床面は4箇所の灰だまりを持つが、全体に固くタタかれ堅緻である。

カマドは東壁中央に造られている。袖石はみられず、中央奥に石があり、くずれ込んだものと思われる。

主柱穴は北東部に1本検出されたのみである。

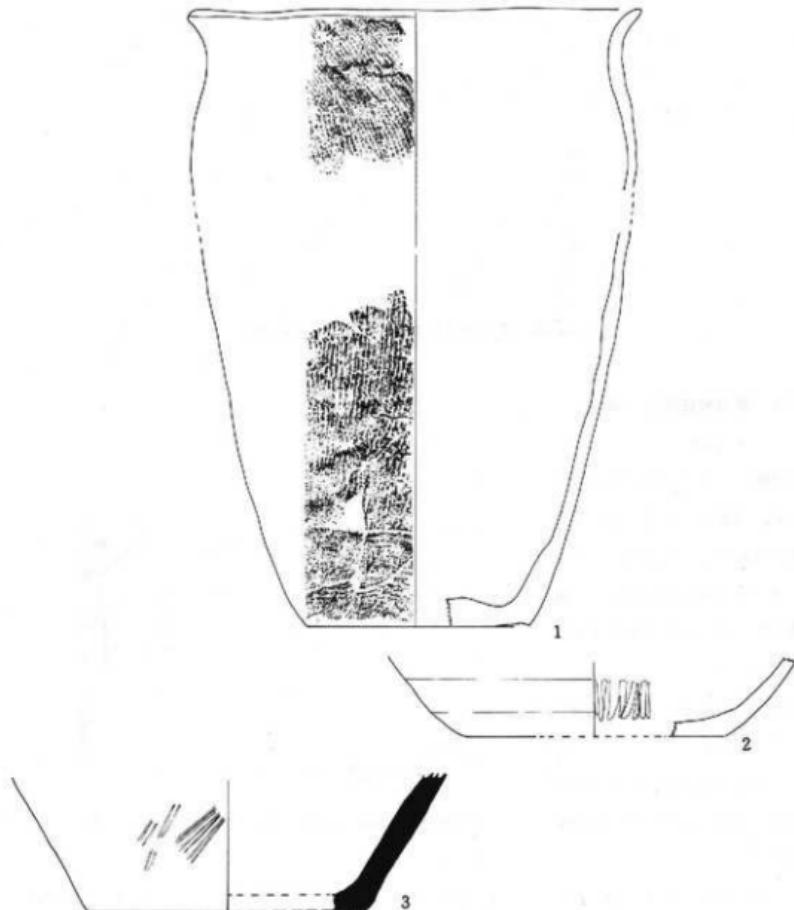


第246図 第31号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

遺物 遺物は少ない。図示したものの外には土師のロクロ整形小形甕と須恵の壺の破片があるのみである。

石器 6 点が出土する。内訳は打製石斧・敲打器各 2 点、大形粗製石匙・石鍤各 1 点である。

時期は決め難いが奈良・平安 II ~ III 期と考えられる。



第247図 第31号住居址出土遺物（1/3）

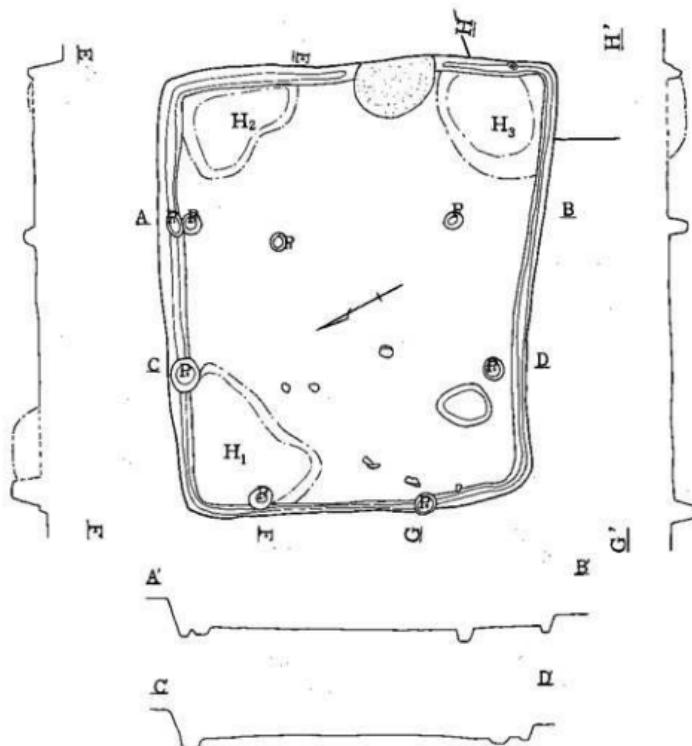
⑮ 第33号住居址（第248・249図）

遺構 当址は第75号住居址の南西に位置し、南東部にて第34号住居址を切っている。

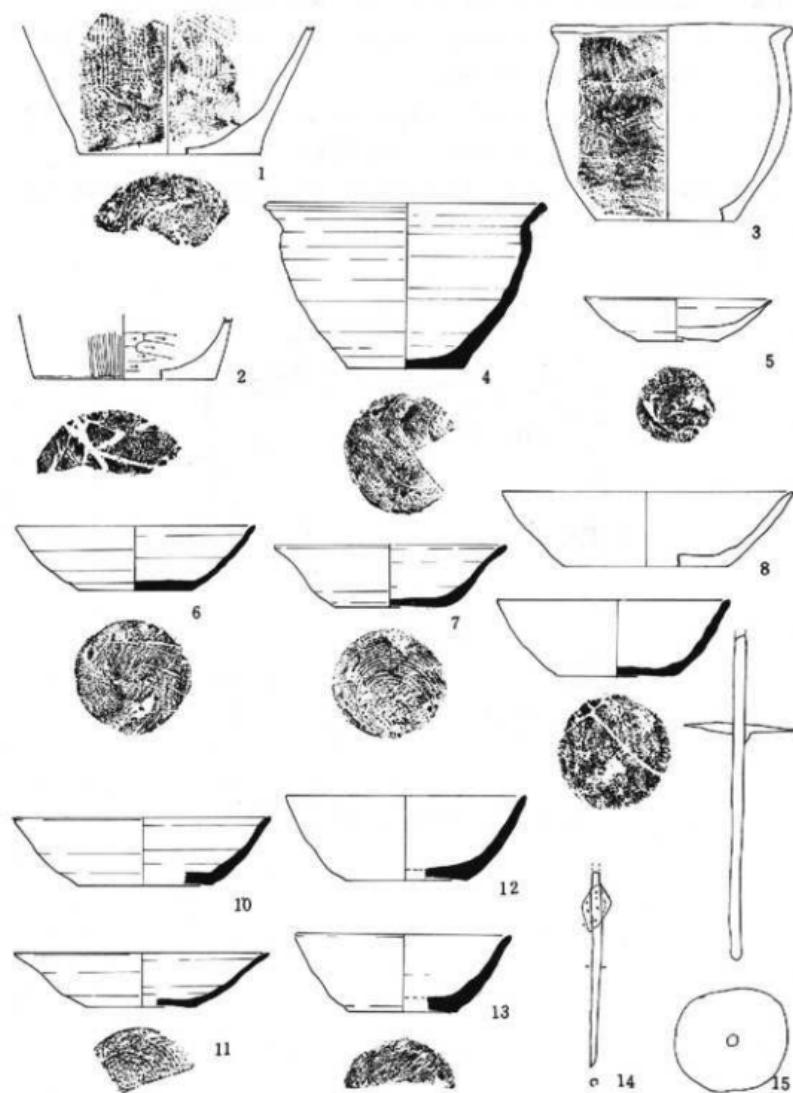
プランは隅丸方形を呈すが、北西側は狭くなっている。長軸6.2m、短軸北東で5.7m、南西で5.0mを測る。長軸方向はS-62°-Eである。

壁高は40cm前後を測り、第34号住居址との床面差は15cmほどである。床面は南西部にやや傾きタキは中央部を中心にみられ、壁ぎわは軟弱である。周溝が一周する。

カマドは南東壁やや南寄りに造られ、焼土を残すのみである。南西隅を除いた3隅には灰だまりがみられる。



第248図 第33号住居址実測図 (S = 1/80)



第249図 第33号住居址出土遺物（1/3）

主柱穴はP₃、P₄、P₆、P₇の4本と考えられ、北西側2本は壁に穿れており、第27号住居址と同例である。P₁・P₂、P₈は入口施設であろうか、P₈がP₈に対してある点上屋の補助柱の可能性もある。

遺物 遺物は豊富で器形を知り得るものが多く該期の好資料となる。土師と須恵があり、灰釉は瓶の破片があるのみである。

土師の壺は粗いハケ目を持つ長胴壺（1）と3の小形壺がある。8は壺、5は皿と思われる。他に内黒の壺がみられる。

須恵では4の小形壺と壺があり、壺が主体を占める。壺は6・7・10・11のように強く外傾し浅いものと9・12・13のような深いものがあり、12・13は軟質である。他に大形の壺と高台付壺がある。

鉄器は紡錘車2点（14・15）が出土している。

石器は打製石斧2、敲打器2、磨製乳棒状石斧1の5点がある。

時期は奈良・平安Ⅲ期である。

⑥ 第35号住居址（第250・251図）

遺構 本住居址は第36号住居址の南に位置しており、第36号住居址とともに東側は造構の空白地帯となっている。当住居址の北東隅から南西隅にかけて溝状造構が走っており、壁を壊している。溝の底は床面ぎりぎりである。

プランは西側が溝状造構によってくずれているが、もともとは直線であったものと思われ、隅丸長方形を呈し、規模は5.3×4.3mを測る。長軸方向はS-71°-Eである。

本址は床面上に柱や母屋析の炭化材が良好な状態で検出され、焼失家屋である。中央部に炭化材の認められないのは、溝状造構によって壊されたものであろう。当期の建築構造を知る上で良好な資料である。これについては付録にて詳しくふれることとしてここでは省略することとする。

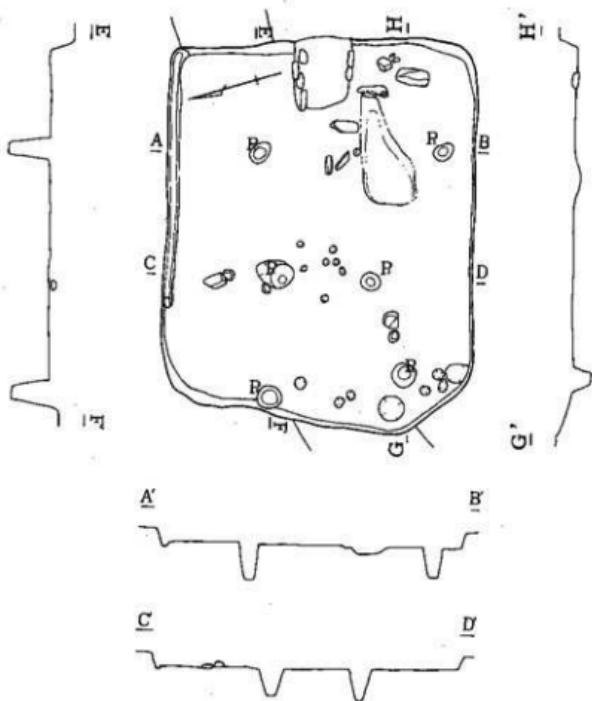
床面は全体に固く堅緻である。北側には周溝がみられる。主柱穴は1・2・4・5の4本と考えられるが、P₃・P₆も可能性が強い。柱穴が壁ぎわにくる点で第27号住居例に似る。

カマドは東壁中央に造られ、被石を持っている。カマドの右と右手前に大きな自然石が床面上にえらされている。又P₆の北に同様にみられる。

カマドの右壁ぎわより刀子2点（15・16）と鉄屑が、P₈の東床面上より灰釉長頸瓶が割れちつて出土している。

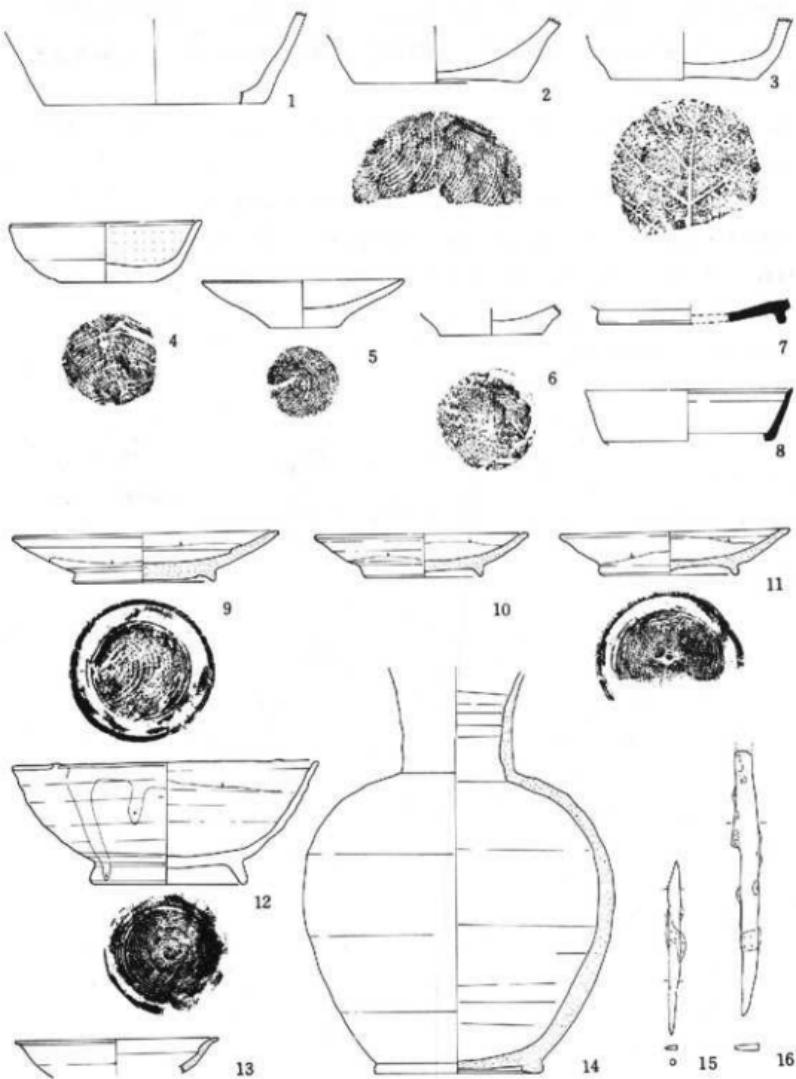
遺物 遺物は多いが主体は土師の壺である。大形のものと混じって小形壺もわずかにみられる。須恵器は高台壺（7・8）がみられるが混在であろう。灰釉は皿類が多い。

鉄器は15・16の刀子があり、他に鉄屑が出土している。



第250図 第35号住居址実測図 ($S = 1/80$)

時期は奈良・平安VI～VII期である。



第251図 第35号住居址出土遺物（1/3）

⑪ 第36号住居址（第252・253図）

遺構 本住居址は第35号住居址の北に接して検出され、西側は開田により削られている。

プランは隅丸長方形を呈し、長軸6.4m、短軸推定5.0mである。壁高は東側で20~25cmを測る。

床面は固く堅敏である。

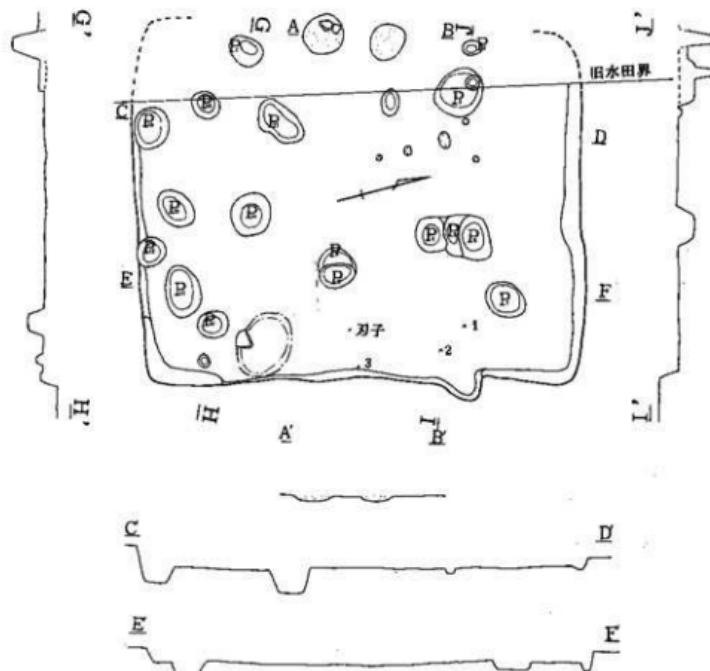
西側に焼土が2箇所から検出されている。他にカマドがみられないことから、カマドと考えられるであろう。

ピットは多く検出されているが、主柱穴は3・7・10・16の4本である。

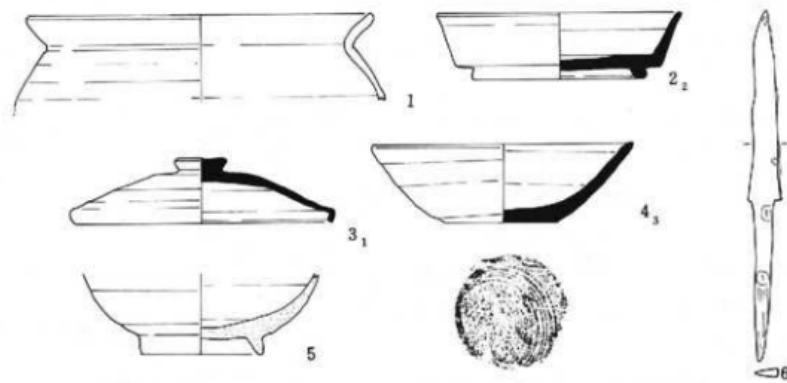
東壁ぎわ床面より刀子（第253図-5）、須恵の蓋（1）、壺（2・4）が出土している。

遺物 遺物は少ない。図示もの以外では土師の壺がある。5の灰釉壺は後出するもので混在である。鉄器として刀子（6）が1点出土している。

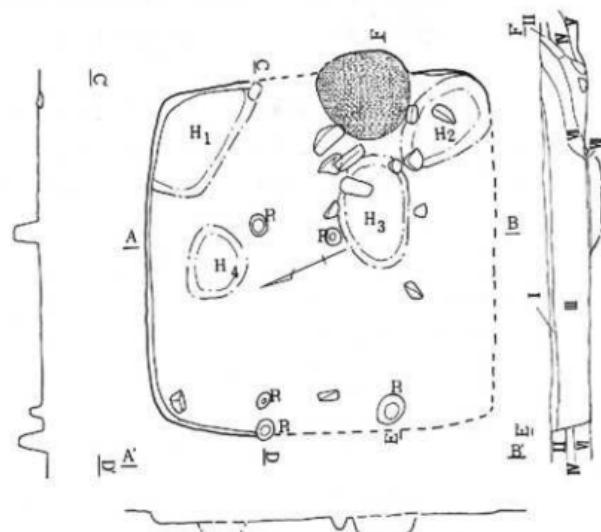
時期は奈良・平安Ⅲ期である。



第252図 第36号住居址実測図 (S = 1/80)



第253図 第36号住居址出土遺物（1/3）



- | | |
|-------------------|--------------------|
| I 黒色土 | V 暗黃褐色土 |
| II 暗褐色土 | VI 黑褐色土（ローム粒含む） |
| III 黒色土（ローム粒・炭含む） | VI 黄褐色土（ロームブロック含む） |
| IV 黄褐色土（ローム粒多し） | VII 燃土・灰 |

第254図 第42号住居址実測図（S = 1/80）

⑩ 第42号住居址（第254～256図）

遺構 本住居址は第131号住居址の西にあり、弥生時代の第45号住居址の中央部を掘り込んで造られたものである。

南西部は同一床面となり壁は不明である。

プランは南東コーナーの存在から隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は $5.1 \times 5.0\text{m}$ を測るであろう。長軸方向は S- 66° -E である。

第45号住居址との床面差は北で 10cm ほどを測るが、南西部では同一床面となっている。床面は全体に軟弱である。

カマドは南東壁中央よりやや南寄りに造られており、袖石を持ち、支脚石も残されている。

主柱穴は、P₁、P₃、P₄の3本が検出されており、4本と考えられる。P₃、P₄が壁ぎわに掘られている点、第27号住居址例と同じである。

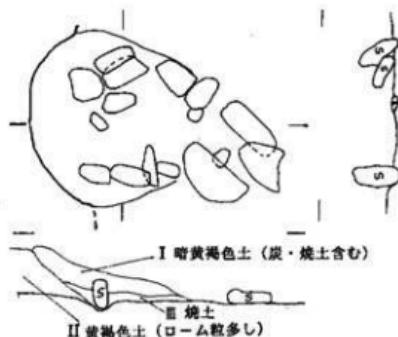
遺物 遺物は多い。大半が土師の長胴甕で、小形甕が2例みられる。須恵器は蓋（2・3）高台付壺（4～6）があり、図以外に壺、甕、長頸甕がある。灰軸は出土していない。

特殊なものとして、7の須恵の円面鏡がある。小破片のため図上復元はできなかった。透しをもつ脚台部のみである。市内では初めての出土例である。

鉄器は8の刀子が出土している。

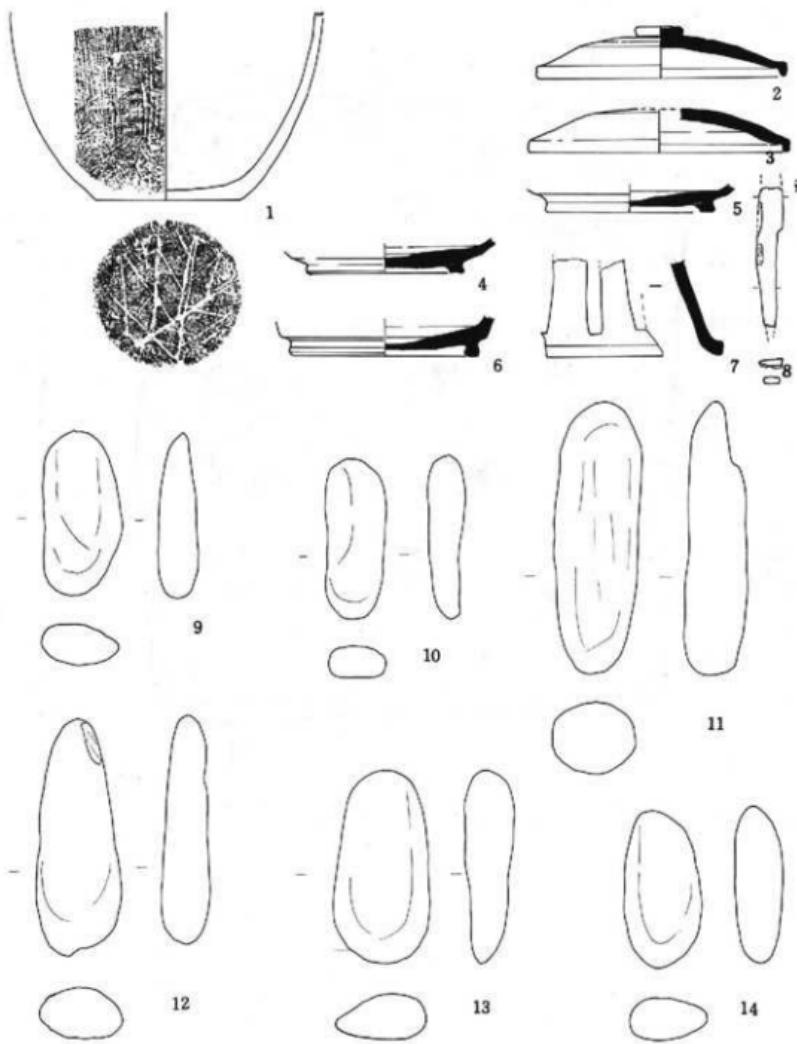
編物用錐石が22個と打製石斧3点が出土している。

時期は平安時代初期、奈良・平安Ⅲ期である。

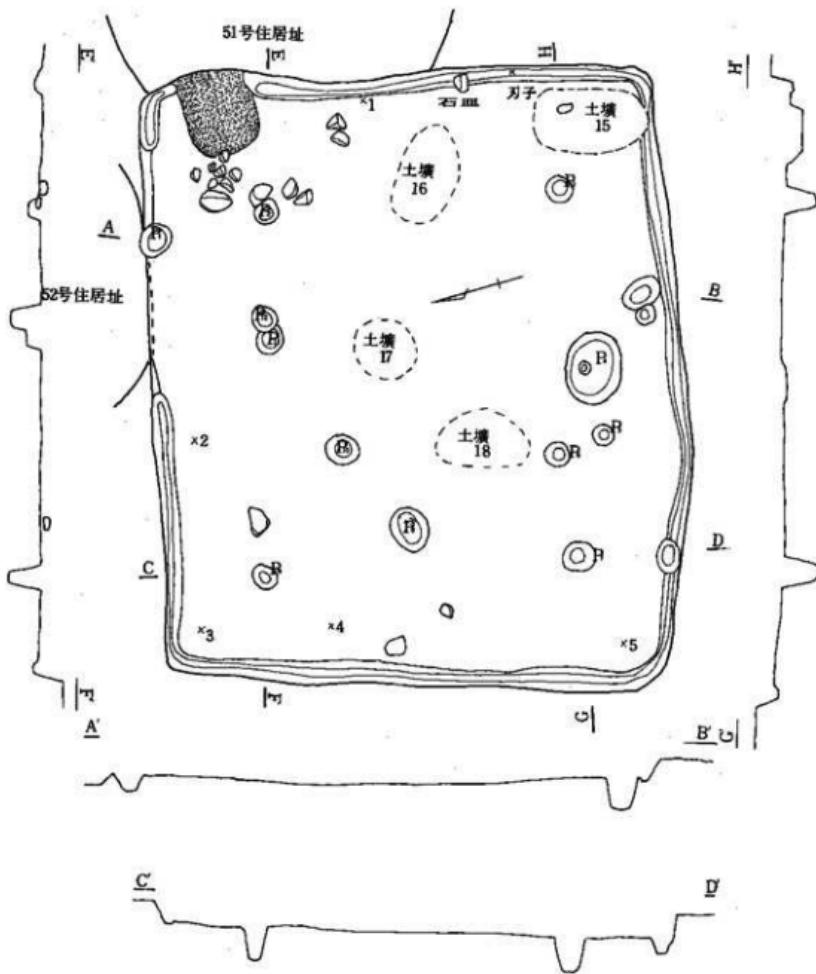


第255図 第42号住居址カマド実測図

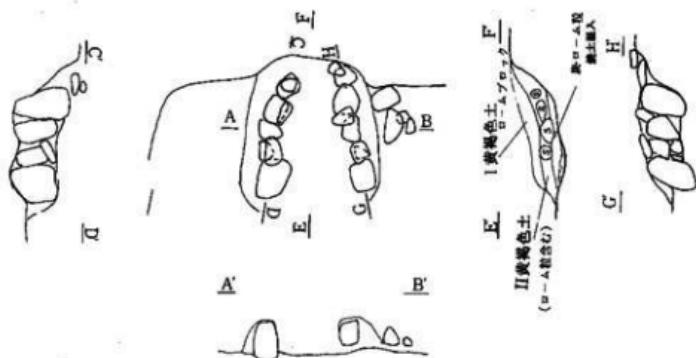
(S = 1/40)



第256図 第42号住居址出土遺物（1/3）



第257図 第49号住居址実測図 (S = 1/80)



第258図 第49号住居址カマド実測図

⑩ 第49号住居址（第257～260図）

遺構 本住居址は第17号・55号住居址の北西にあり、第51号住居址を切っている。

プランは隅丸長方形で規模は8.7×7.6mを測る大形の住居址である。長軸方向はN-76°-Wである。

壁高は30cm前後を測る。床面は中央がやや回んでおり、壁ぎわはタタキが顕著でなく軟弱である。周溝がほぼ全局する。

カマドは北東隅に造られている。大きな自然石を主体に小石を詰め込んでしっかりと石組され、奥はやや狭まっている。石組はロームによって覆われている。

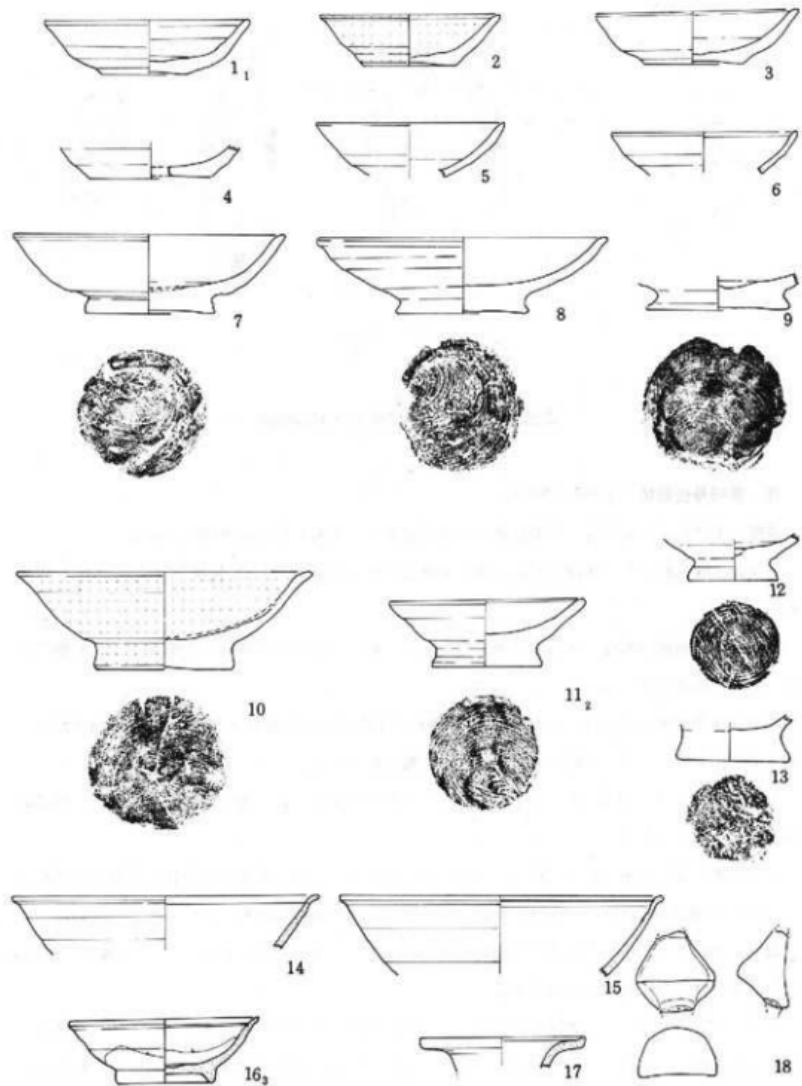
主柱穴はP₂、P₃、P₄、P₇、P₉、P₁₁・P₁₂の6本である。P₈、P₁₀が対をなしており補助的功能を持つものであろう。

東壁周溝上より刀子（25）、さらにカマドより土師の壺（1）、北西隅から11の土師の柱状高台壺（11）、灰軸の壺（16）・広口瓶（21）、南西隅からは灰軸の広口瓶（19）が出土している。

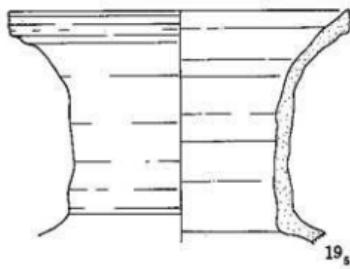
遺物 器形を知り得るのが多く該期の良好なセラトとしてとらえられる。土師・灰軸が主体で、須恵は甕の破片が散見するのみである。

土師は甕はみられず、壺と壺だけである。壺は柱台高台がほとんどである。2・10は内外とも黒色処理されているが、この時期では少ない。灰軸は壺と広口瓶・長頸瓶で皿類はみられない。丸石2号窯式期である。

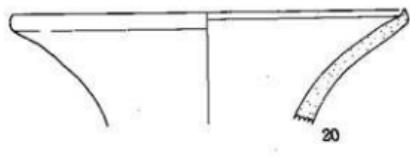
26は手づくね土器である。18は土製品であるが用途は不明。



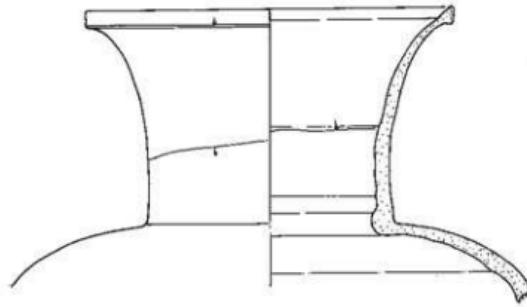
第259図 第49号住居址出土遺物（1/3）



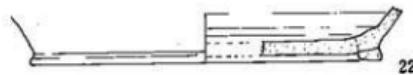
19_s



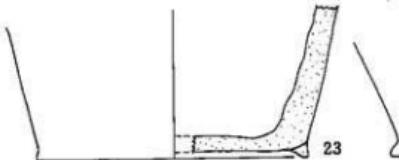
20



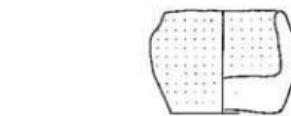
21₄



22



23



24



25

第260図 第49号住居址出土遺物 (26は1/1、他は1/3)

鉄器は刀子1点が出土している。

石器17点が出土している。内訳は打製石斧8、敲打器4、特殊磨石3、特殊敲打器・石礫各1点である。

時期は奈良・平安VII期である。

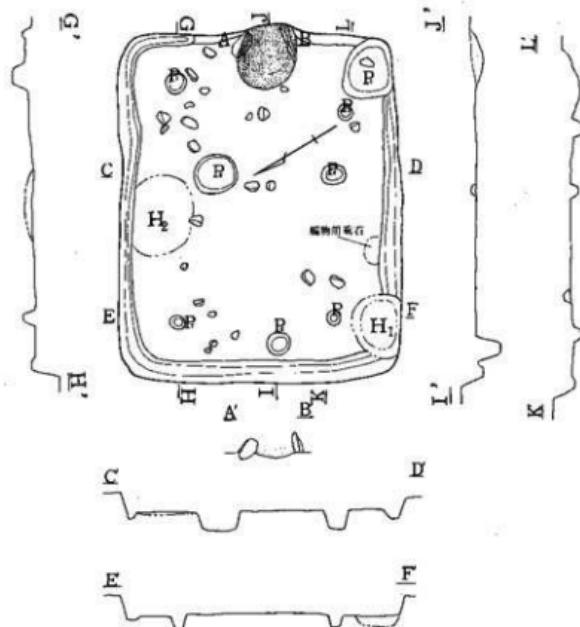
② 第54号住居址（第261・262図）

遺構 本住居址は調査区の西域に属し、南西には第56号住居址、北には第62号住居址がある。

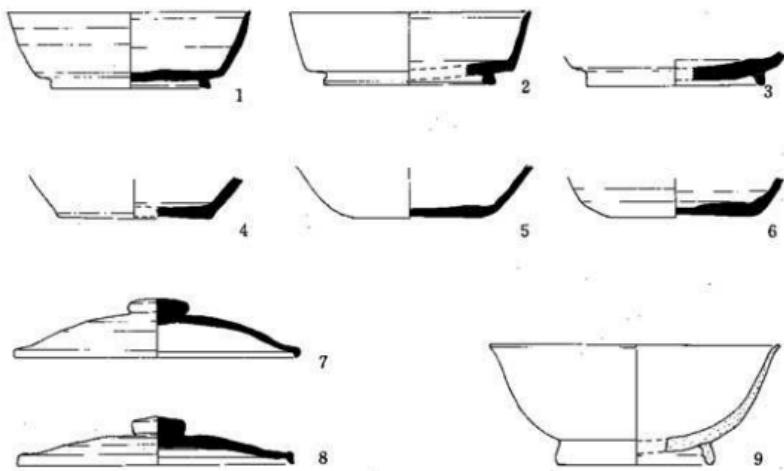
プランは隅丸長方形で、規模は $5.0 \times 4.1\text{m}$ を測る。長軸方向はS- 63° -Eである。

壁高は北で25cm、南は低く15cmほどである。床面はほぼ平坦で中央部はとりわけ良くタタかれており、堅敏である。周溝はほぼ一周する。

カマドは南東壁中央に造られている。封土はみられず奥に袖石が1個ずつえられている。主柱穴はP₁、P₂、P₅、P₇の4本である。床面上には自然石が多くみられる。



第261図 第54号住居址実測図 (S = 1/80)



第262図 第54号住居址出土遺物（1/3）

南西壁ぎわやや西寄りに編物用錐石が11個集中して検出された。

遺物 出土遺物は多くない。灰釉は図示した9の壺の破片のみで混在と思われる。土師は粗いハケ目の長胴甕があり、壺はみられない。須恵は蓋（7・8）と壺（4～6）と高台付壺（1・2）があり、高台を持たない壺は軟質が多い。

編物用錐石が11個、打製石器4点が出土している。石器は打製石斧3点、横刃形石器1点である。

時期は奈良・平安Ⅱ期に属する。

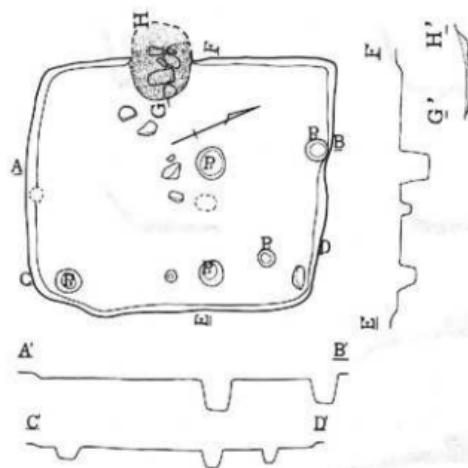
② 第55号住居址（第263・264図）

遺構 当住居址は第18号住居址の西に位置しており、全面第17号住居址が貼床している。床面差は5cmほどである。

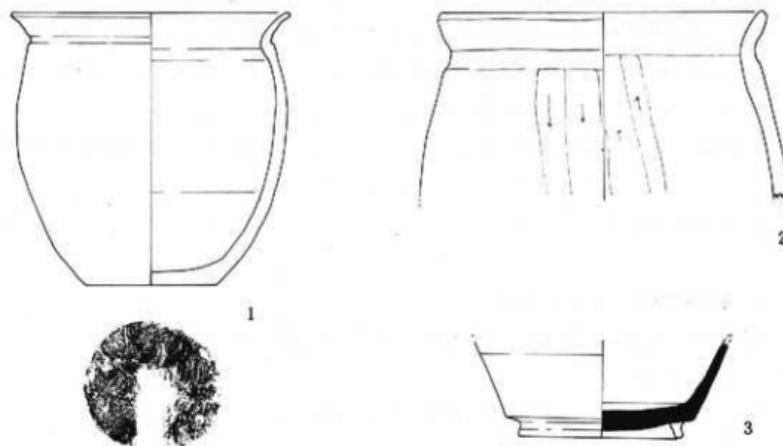
プランは隅丸長方形で、規模は4.3×3.6mを測る。長軸方向はN-23°-Eである。

床面は軟弱である。カマドは西壁中央やや南寄りに造られている。焼土を残すのみで、基底部に石がみられる。

P₁、P₄が主柱穴と考えられるが、中央に寄りすぎていて定かでない。



第263図 第55号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第264図 第55号住居址出土遺物 (1/3)

遺物 遺物は多いほうではない。土師・須恵のみで灰釉は出土していない。

土師は図示したもの以外粗いハケ目の甕と壺がある。須恵は3の壺の外に甕がある。3は粗雜なものである。

時期は平安時代初期、奈良・平安Ⅲ期である。

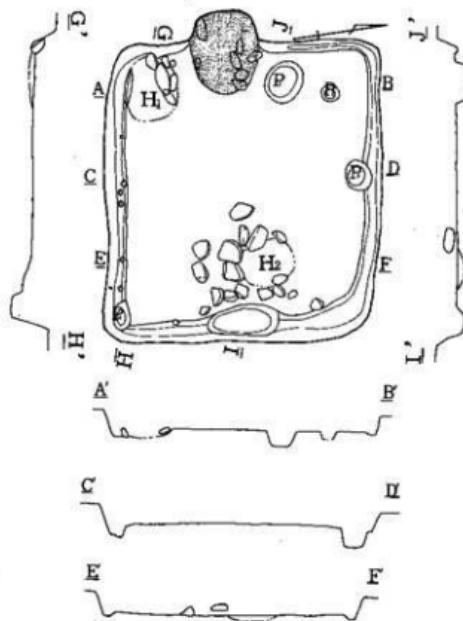
② 第56号住居址（第265～267図）

遺構 当住居址は第54号住居址の南西に位置し、南東には第89号住居がある。調査区の最も西側に位置する。

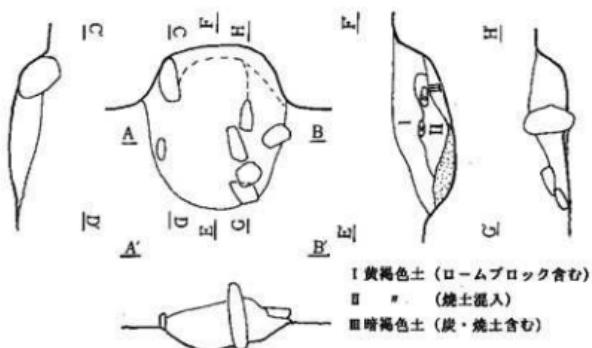
プランは隅丸方形を呈し、規模は4.3×3.9mを測る。長軸方向はN-82°-Wである。

壁高は25～30cmで、床面は壁ぎわが低くなる。タタキが全面に良く行われ壁紙である。周溝が一周する。南側には小ピットが穿っている。

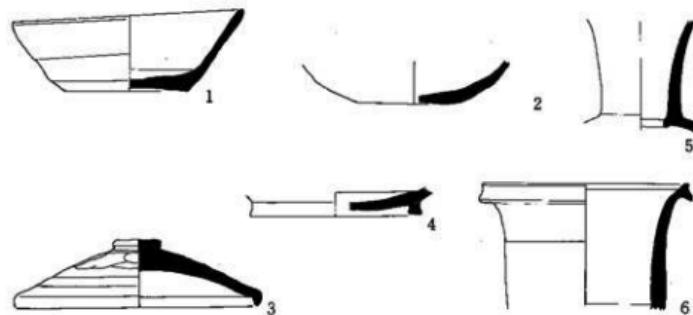
カマドは西壁やや南寄りに位置し、壁を50cmほど掘り込んでつくられている。袖石は両側に1個ずつえられており石組とはなっていない。主柱穴P₁が検出されたのみである。



第265図 第56号住居址実測図 (S = 1/80)



第266図 第56号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)



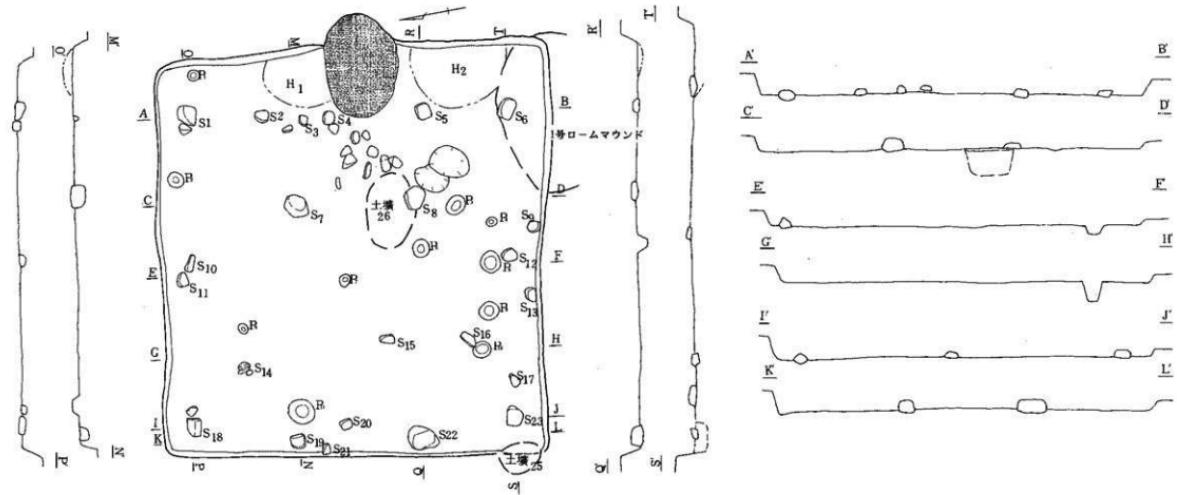
第267図 第56号住居址出土遺物 (1/3)

カマドの左と東側床面上にかなり大きな自然石が集中してみられる。

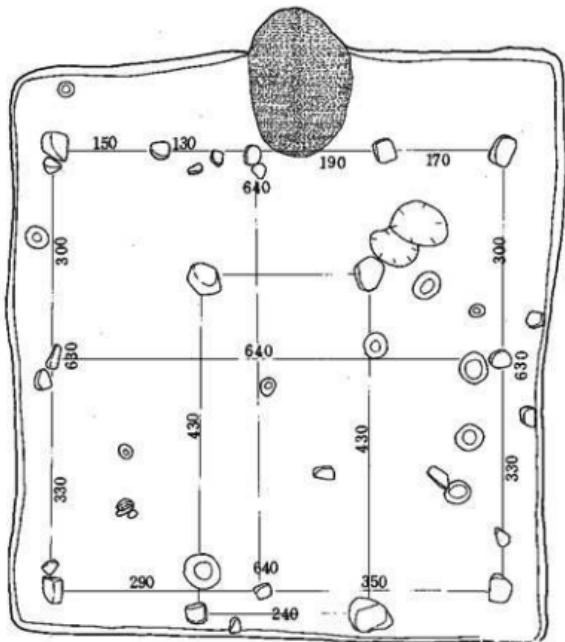
遺物 遺物はあまり多くない。土師と須恵があり、灰釉は出土していない。土師は甕の破片が主体である。須恵は図示した壺(1・2)と高台付壺(4)、蓋(3)、長頸壺(5・6)の外に甕がある。3の蓋の天井部は持ちのヘラケズリが行われている。

編物用鍍石9点と打製石斧3点、横刃形石器1点が出土している。

時期は奈良・平安II期であろう。



第268図 第62号住居址実測図 (S = 1/80)



第269図 第62号住居址柱間計測図 ($S = 1/80$)

② 第62号住居址（第268～275図）

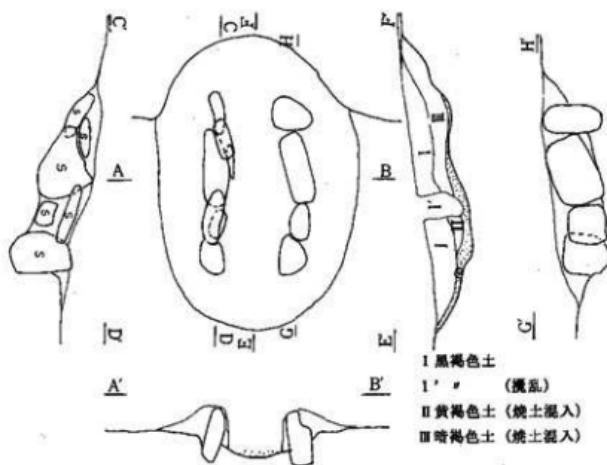
遺構 本住居址は第67号住居址の西に位置しており、南西には第72・73号住がある。北東で第74号住居址、南西部は一部第69号住居址に貼床している。また南東部では第1号ロームマウンドを廻して造られている。

プランは隅丸方形を呈し、規模は $8.3 \times 7.8m$ を測ることができ大形の住居址である。壁高は30～35cmを測る。

床面はほぼ平坦で良くタタかれ堅緻で、床面上には整然と平盤な石が据えられており、礎石を持つ住居址である。

礎石を持つ住居址例は当遺跡の南段丘下反目南遺跡において3例知られ、最近県内でもその類例が数を増している。当遺跡においても第96号住居址例がある。

礎石間の計測図を第269図に示してある。壁からの距離はカマドのある東を除いて、25cmとほぼ



第270図 第62号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

一定している。東では壁から50cmを測る。 $S_1 - S_6 - S_{23} - S_{18}$ で囲まれる方形を基本とし、東西630cm、南北640cmを測る。

西壁ぎわには壁間等間隔に $S_{19} \cdot S_{22}$ がありその間240cmを測る。それに対応してカマドの手前に $S_7 \cdot S_8$ がすえられている。この4個の礎石は他に比べてレベルが高くなっている。上屋構造を考える上で見逃す訳にいかないだろう。 $S_{19} \cdot S_{22}$ 例は反目南遺跡8号住居址にあり入口施設を考えて良いと思われる。

カマドは東壁中央に位置し、壁を掘り込んで造られている。保存良く原形をとどめている。袖石はしっかりととした石組みが行われロームで覆っている。支脚石は認められなかった。

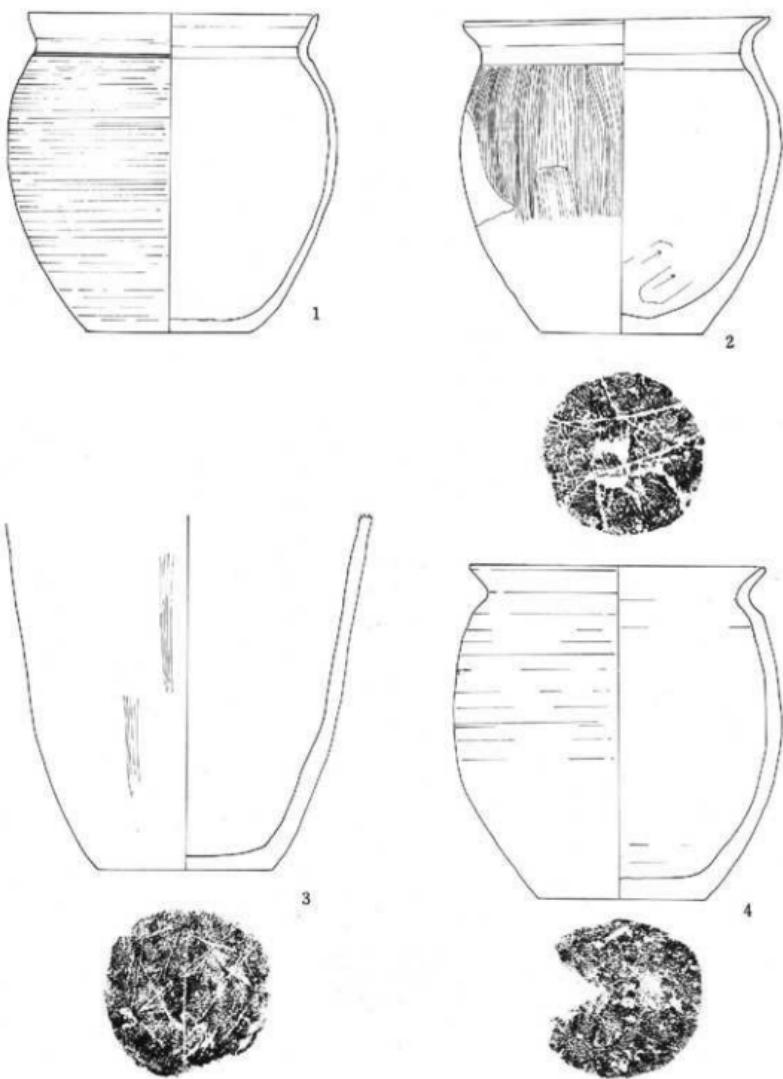
カマドの手前に平整な石がある。

遺物は多量に出土しており、大半がカマドの両脇から出土しており、壺は重なった状態で発見されている。

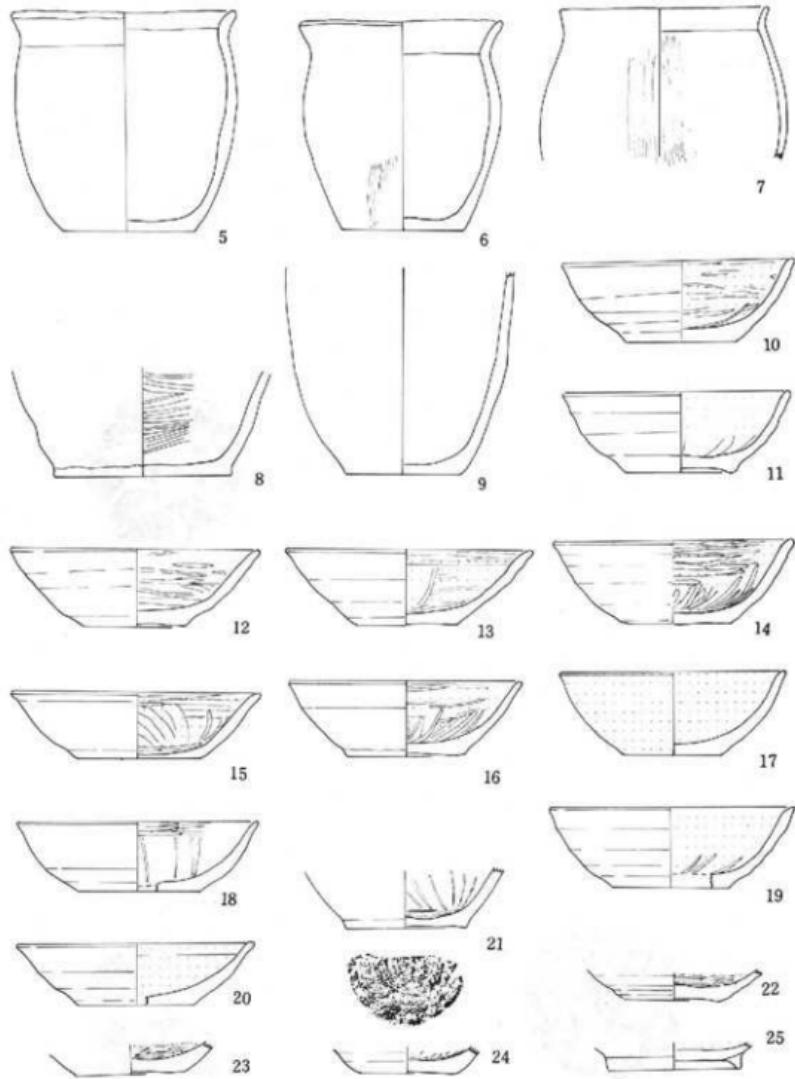
遺物 遺物は極めて多い。図示したもの59点で該期の良好な資料となり得る。

土器は壺・壺・壺・皿・鉢とほぼ全器がみられる。壺には長胴壺(3)と小形壺(1, 2, 4~9)があり、長胴壺は少ない。小形壺は1, 2, 4のように胴部が球状にふくらむクロコ整形(3は口頭部のみ)と口縁がわずかに外反し、なで肩を呈しハケ目を持つものとがある。

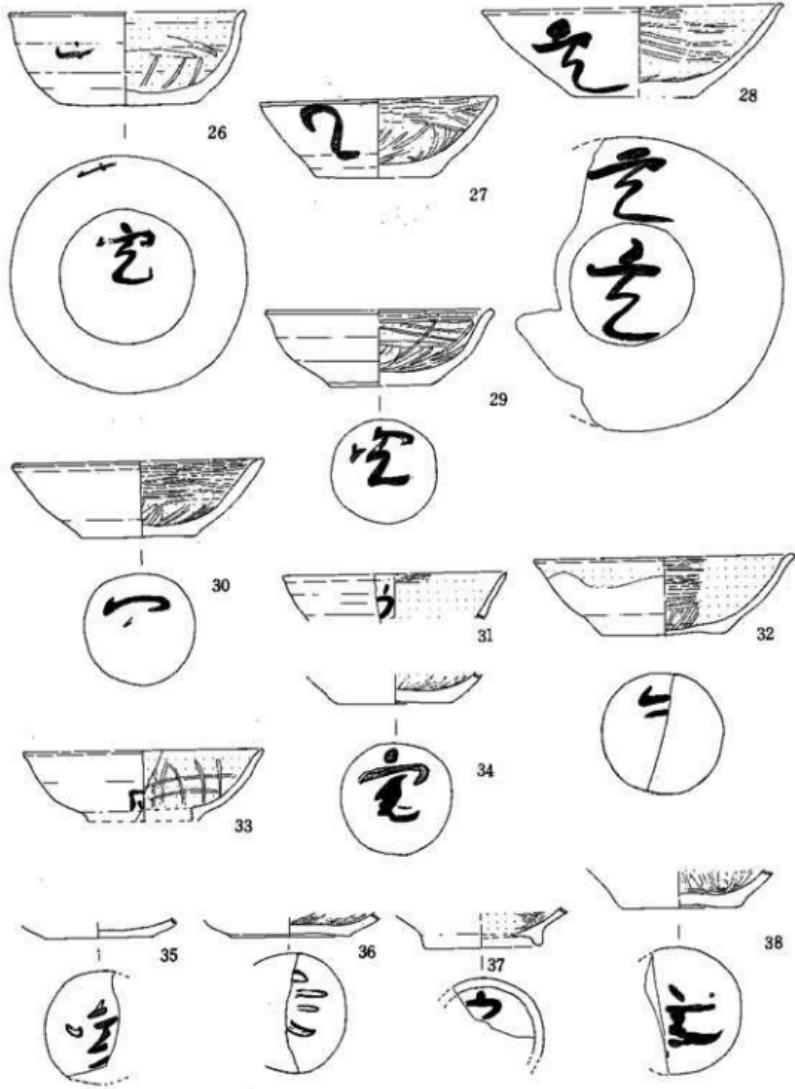
壺(10~38)には体部に丸穴を持つやや深めのものと直線的なものとがある。回転糸切りで、



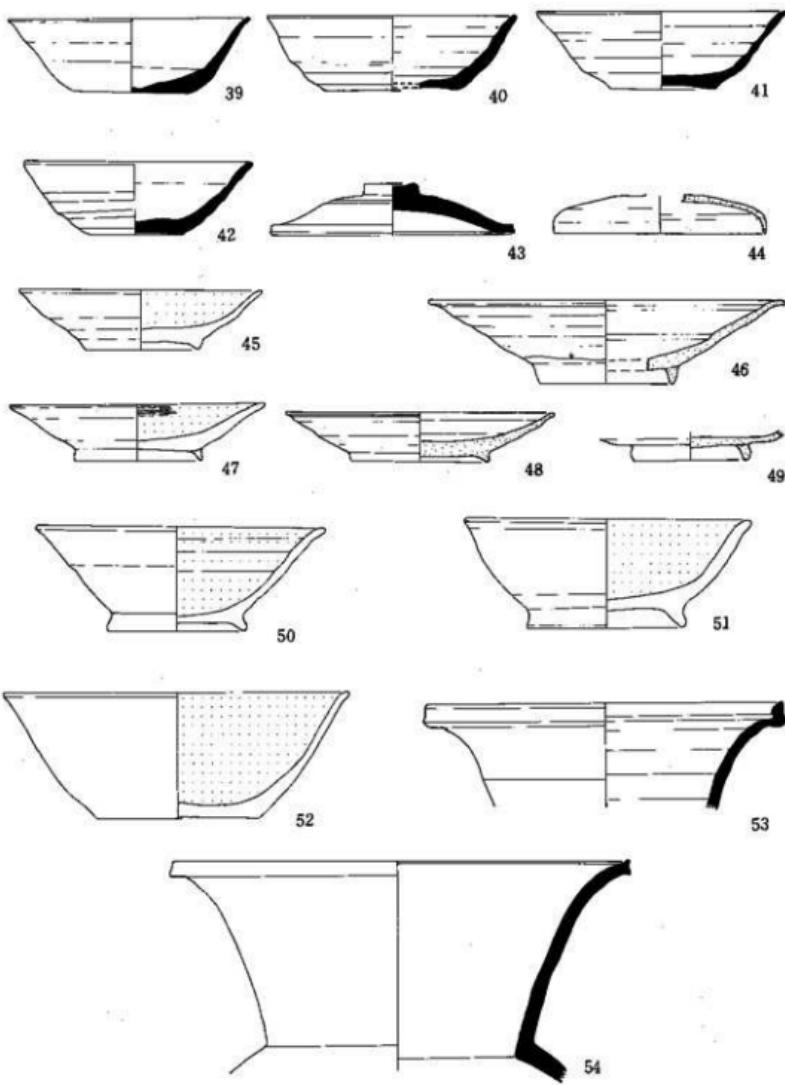
第271図 第62号住居址出土遺物（1/3）



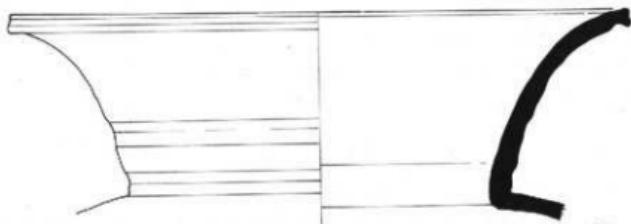
第272図 第62号住居址出土遺物（1/3）



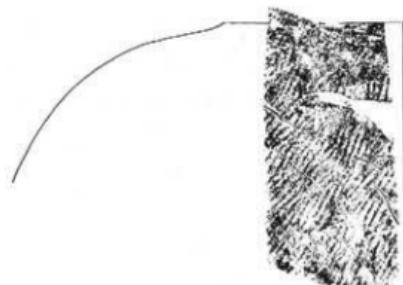
第273図 第62号住居址出土遺物（1/3）



第274図 第62号住居址出土遺物（1/3）



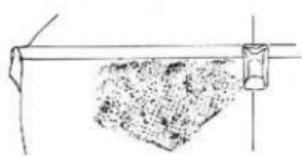
55



56



57



58



59

第275図 第62号住居址出土遺物 (1 / 3)

その後の調整はみられない。高台を持つものは25、37の2例がありつけ高台である。29点の内、内面黒色処理されるものが24点で程度の差はあれ、研磨されるのが一般的である。内面黒色処理されないものも研磨は認められる。

皿・堀は2点ずつあり、付け高台を持ち、内面黒色処理されるが研磨は顕著でない。鉢は52の1点で内面黒色処理される。

須恵は壺（39～42）と蓋（43）、甕・四耳壺といった大形のもの（53～58）がある。壺は高台を持つたず軟質である。壺に占める須恵の割合は1割ほどである。

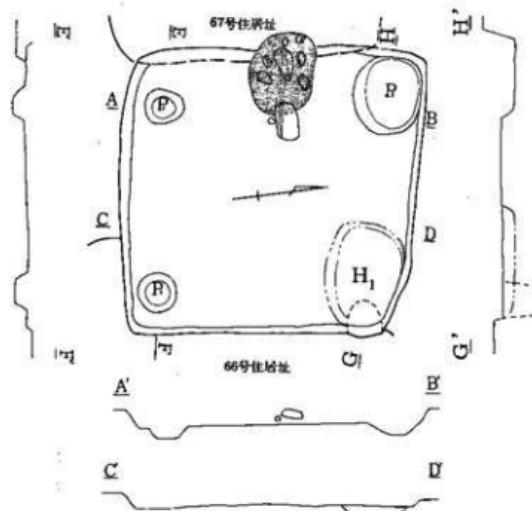
灰釉は香炉蓋（44）と皿類（46～49）があり堀は小破片がみられる。46は段皿である。

つぎに墨書き土器についてふれることとする。本址より出土した墨書き土器は13点と極めて多い。27、26のみ底を上にして書かれている。26、31、33、37以外は明らかに同一文字である。「定」の略字「宍」である。31、37も欠けるが多分同文字の可能性がある。2は「乙」であろうか。

多量の墨書きと大形の礎石を持つ家との間に何らかの相関関係を求めることがきよう。

鉄器は鋤先の破片（59）が出土している。編物用錐石3点と打製石器6点が出土している。内訳は打製石斧3、敲打器2、大形粗製石匙1点である。

時期は奈良・平安IV期後半からV期に属する。



第276図 第63号住居址実測図 (S = 1/80)

④ 第63号住居址（第276～278図）

遺構 本住居址は第62号住居址の東に位置し、西には第67号住居址があり当址のカマドが第67号住居址の覆土中に造られている。また東で第66号住居址を切っている。

プランは隅丸方形で、規模は 4.3×4.1 mを測る。東側はやや狭く4.1mである。長軸方向はN-8°-Eである。

壁高は25cm前後である。床面は軟弱で平坦である。

カマドは西壁中央に位置し、第67号住居址の覆土中に造られている。袖石はみられず中央上部に石がのせられている。

主柱穴はP₁、P₃と南側に2本検出されたが、北側は不明である。

遺物 遺物は少ない。縄文土器が多く混在している。

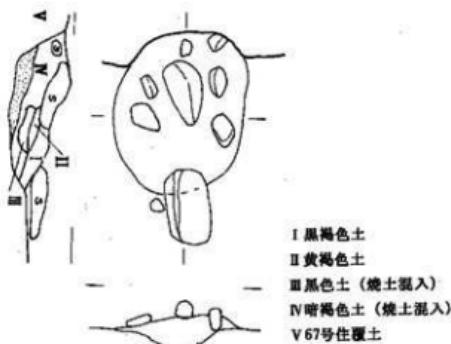
1は土師の壺で内面黒色研磨される体部に墨書きの一部がみられる。

他には土師ではロクロ整形による小形甕とハケ目を持つ甕、内面黒色処理の壺がある。

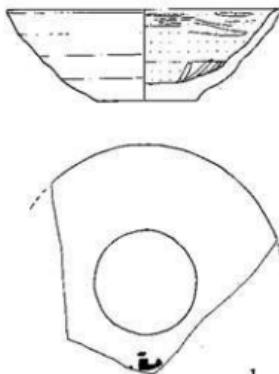
須恵は甕の破片が少量出土し、灰釉はみられない。

打製石器8点が出土している。内訳は打製石斧6点、磨製乳棒状石斧・蛤刃石斧各1点である。

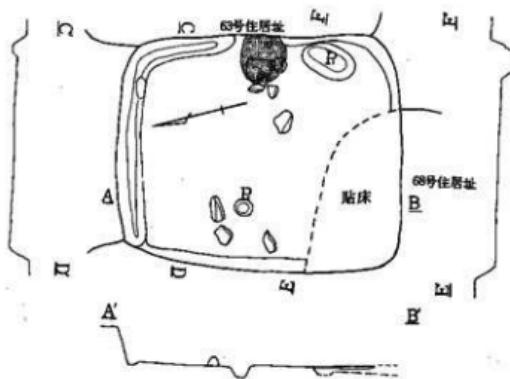
時期は決め難いが、奈良・平安IV～V期に属する。



第277図 第63号住居址カマド実測図 (S = 1/40)



第278図 第63号住居址出土遺物



第279図 第67号住居址実測図 ($S = 1/80$)

② 第67号住居址 (第279・280図)

遺構 本住居址は第63号住居址の西にあり、東側覆土中に第63号住居址のカマドが造られている。

プランは隅丸長方形で、規模 4.1×3.3 mを測る。長軸方向は S - 15° - Wである。

壁高は50cmと深い。東から北にかけて周溝がみられる。

床面は平坦で堅緻である。貼床も良好である。

カマドは左袖一部を第63号住居によって接されており、袖石は右側に1個すえられている。

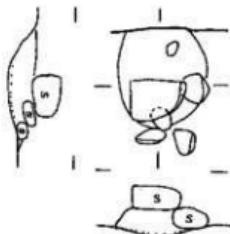
柱穴は P₂ の1本のみ検出されている。

遺物 遺物は少ない。図示できるものはない。

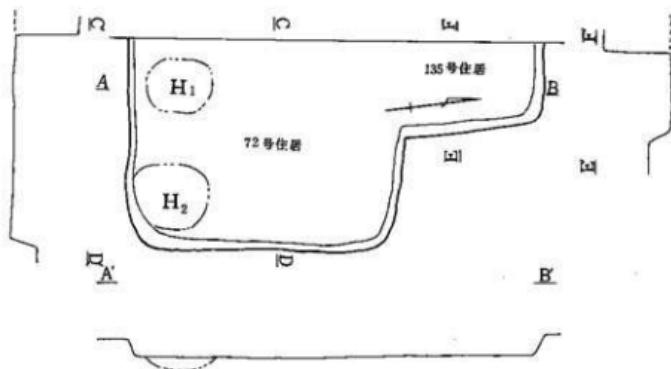
土師のハケ目を持つ長胴壺と壺の破片がある。須恵は壺と壺の破片が出土している。灰釉は出土していない。

打製石斧1点が出土している。

時期は不明であるが第63号住居址より古いことは間違いない。



第280図 第67号住居址
カマド実測図
($S = 1/40$)



第281図 第72号・135号住居址実測図 ($S = 1/80$)

② 第72号住居址（第281図）

遺構 本住居址は第62号住居址の南西に位置しており、西側は調査区域外で未発掘である。また北は第135号住居址と同一床面にて重複している。

プランは渦丸形を呈すが規模は不明である。南北3.9mを測る。壁高は40cmで壁は直に近い。床面は固く堅敏である。

カマドは西にあると思われるが不明。柱穴も検出されていない。

遺物 遺物は極めて少ない。ロクロ整形の土師の小形壺と壊、須恵の壺の小破片のみである。

打製石斧3点と敲打器1点が出土している。

時期は決め難いが平安時代であろう。

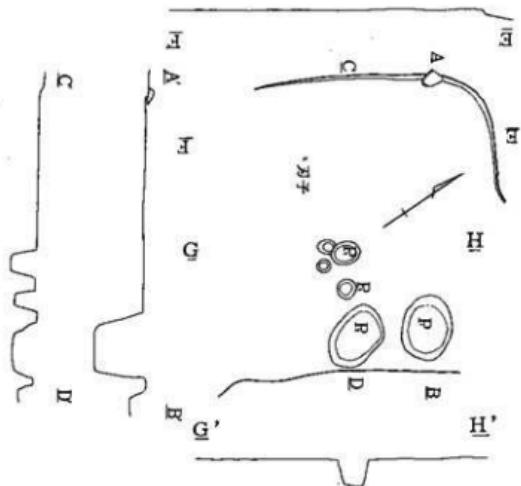
③ 第73号住居址（第282・283図）

遺構 本住居址は第62号住居址と第72号・135号住居址との間にあり、わずかな壁と床面のみが検出されたものである。西は同一床面が拡がるが、縄文土器が出土し、東側床面より刀子（第283図）が出土したため、東側を本址としたものである。

北西部に段差5cmほどの壁がみられる。プラン・規模等は全く不明である。床面は固く堅敏である。カマドは検出されず焼土の痕跡もみられない。柱穴は3・4が考えられるが定かでない。

遺物は刀子1点のみである。

時期は不明。



第282図 第73号住居址実測図 (S = 1/80)

第283図 第73号住居址
出土遺物 (1/3)

⑩ 第75号住居址 (第284~286図)

遺構 当住居址は第126号住居址の南西に位置している。

住居址内には土壙が3基あり南側は土壙のためか壁がくずれている。土壙27は貼床をしている。

プランは不整ながら隅丸方形を呈し、規模は $4.2 \times 4.0\text{m}$ を測り、長軸方向はN-15°-Eである。

床面は全体に軟弱である。カマドは西壁中央にあり、石組による袖石がみられ、基底部奥側に支脚石がある。カマドはロームで覆われている。

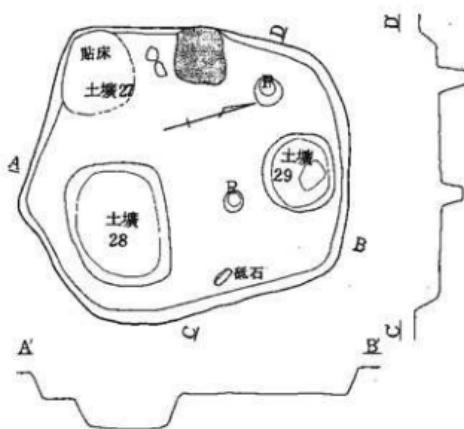
柱穴はP₁の1本が検出されたのみである。

東壁ぎわ中央より磁石 (第286図-4) が出土している。

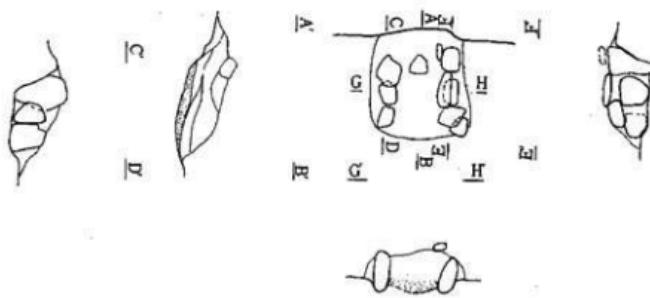
遺物 遺物は多くない。須恵は軟質な壺2個体がみられる。土師は2の壺の外に内面黒色処理の壺、長胴壺とロクロ整形の小形壺がみられる。灰釉は図示した壺の外に瓶の破片が出土している。

砥石は片磨岩製で3面が使用されている。打製石斧・敲打器・石錐各1点、敲打器2点計5点の石器が出土している。

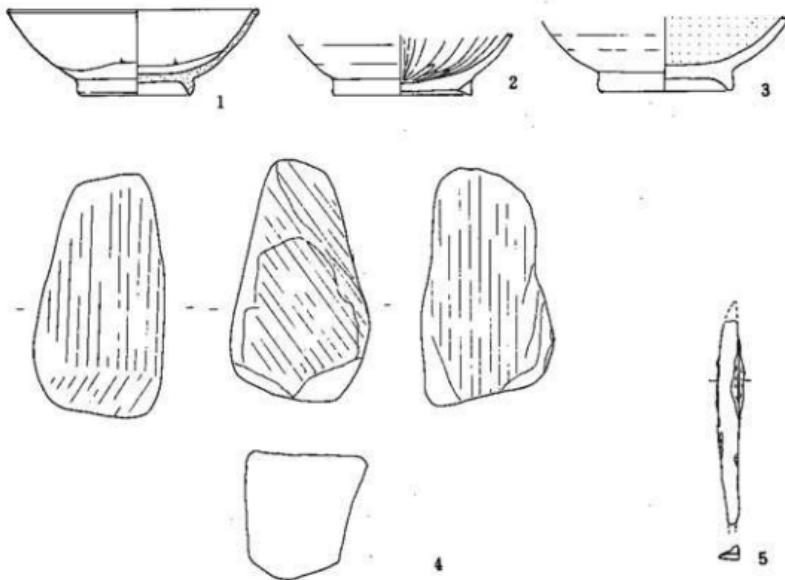
時期は灰釉からすると折戸窯期の初期と考えられ、奈良・平安V期である。



第284図 第75号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第285図 第75号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)



第286図 第75号住居址出土遺物（4は1/6他は1/3）

② 第76号住居址（第287～289図）

遺構 本住居址は調査区の南端、段丘縁にあり、北には第82号住居址がある。西は第77号住居址を切っている。南側は餘地となり未調査であるが、段丘の縁にあり南に続く畑が取地場となつており被されている。

南東壁にあるカマドが中央に位置すると仮定すれば、 $5.8 (?) \times 5.7m$ の隅丸方形を呈し、長軸方向は S-20°-W である。

壁高は東側で 15~20cm、西は低く 5cm、南側は消失する。床面は灰だまりが多く掘られ良くない。

カマドは西壁にあり、右側に簡単な袖石がみられる。柱穴は P₁ 1 本が検出されるのみである。

遺物 遺物は多い。土師が主体である。1~4 は土師の壺で、小形で胴部が球状にふくらむ（1、2）と長胴壺（3、4）もある。小形壺はロクロ整形とそうでないものとがある。この外ハケ目を持ち、なで肩のものがある。壺は高台を持つもの（15、16）と持たないもの（6~9、11）がある。壺は 13 と高台を持つ 14 とがある。内面黒色処理するのが一般的であるが研磨は顕著でない。

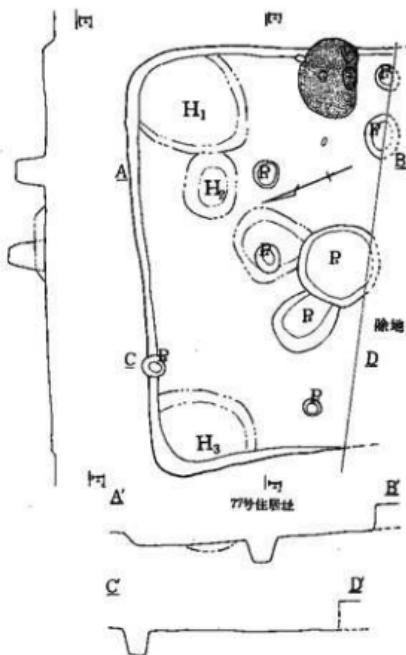
須恵は壺の底部(12) 1点のみである。

灰軸は壺(13)と瓶(17)がありともにハケ塗りである。

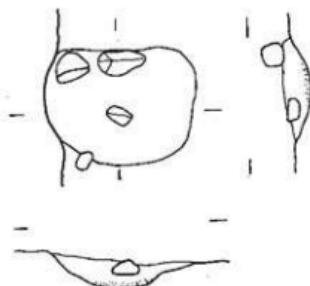
墨書き土器が3点ある。8と9は同一文字で「全」であろうか。10は底を上にして書かれている。「水」とも判読できるが定かでない。

石器が8点出土している。打製石斧4点、敲打器・石礫各2点である。

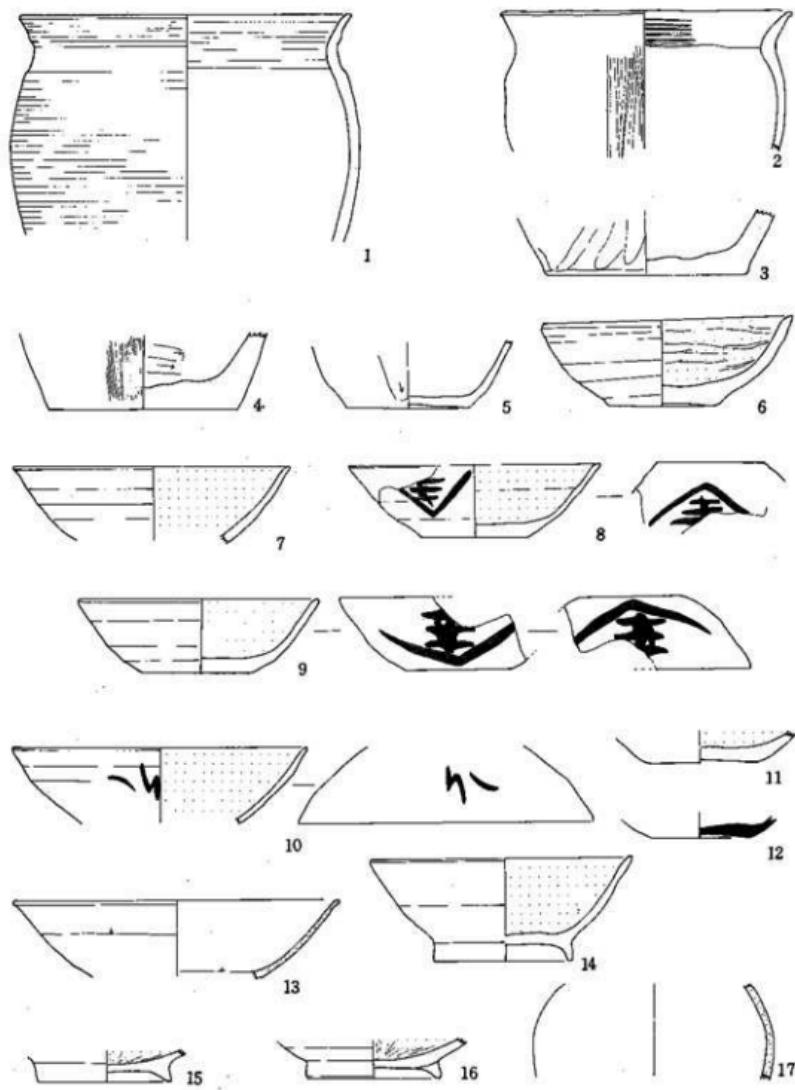
時期は奈良・平安IV期である。



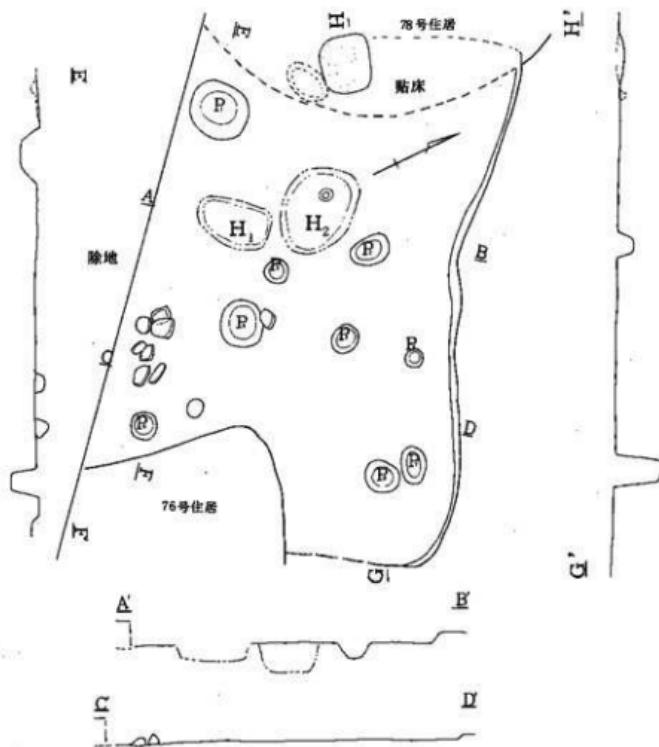
第287図 第76号住居址実測図 (S = 1/80)



第288図 第76号住居址カマド実測図 (S = 1/40)



第289図 第76号住居址出土遺物 (1/3)



第290図 第77号住居址実測図 ($S = 1/80$)

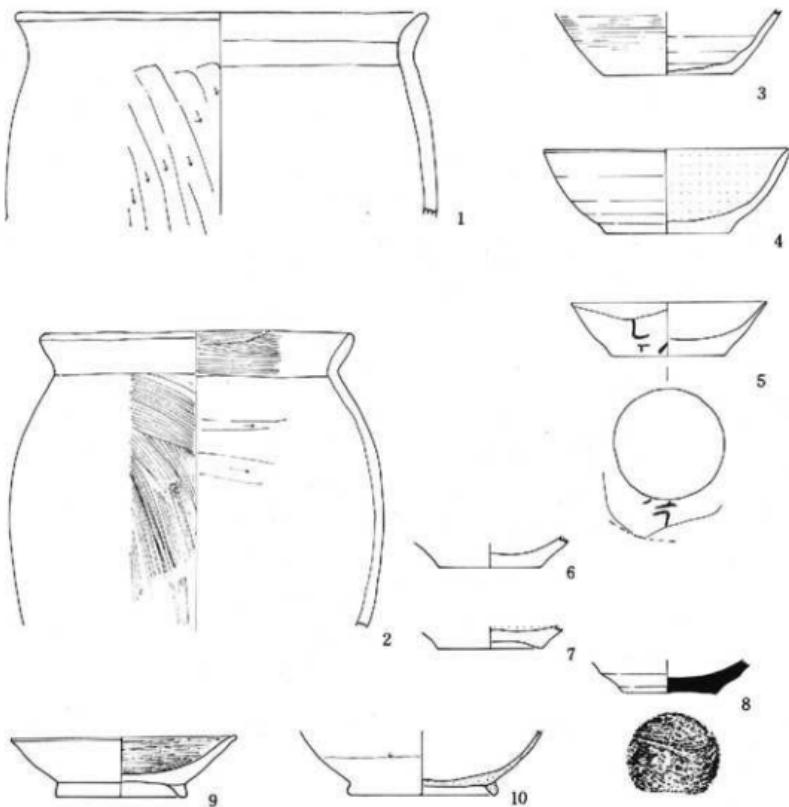
◎ 第77号住居址 (第290・291図)

遺構 当住居址は南東部を第76号住居址に切られ、西側は縄文時代の第78号住居に貼床し、カマドを造っている。南側は第76号住居址同様除地になりすでに埋されている。

北東部のコーナーの存在から略東西は7.3mを測り、プランは不整の隅丸長方形を呈すと思われる。壁高は北で15cmを測る。

床面はほぼ平坦で堅緻である。貼床はわずか痕跡が認められる程度である。

カマドは北西壁にあり、わずかに覆土を掘り回めて焼土が残るのみである。主柱穴はP₇・P₈、P₉の2本は明らかであるが、西は不明である。



第291図 第77号住居址出土遺物（1/3）

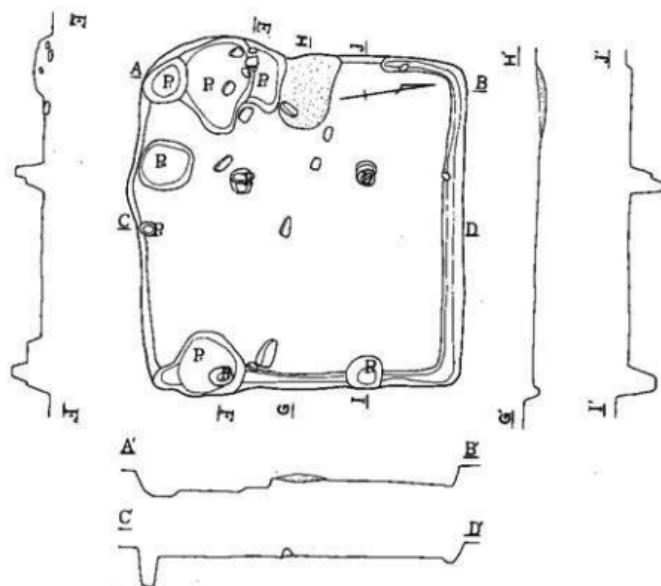
遺物 土師が主体である。須恵は8のみで、静止糸切りの壺で混在である。

1～3は土師の壺、3は球洞状の小形壺でロクロ整形である。4～7は土師の壺で4、7は内面黒色処理されている。9は土師の高台付皿で内面黒色研磨される。5は墨書であるが判読できない。

灰軸は図示した8の壺の外に瓶と皿の破片がみられる。8はハケ塗りである。

覆土中より小形石匙と石礫2点が出土している。

時期は奈良・平安IV期である。



第292図 第82号住居址実測図 ($S = 1/80$)

⑪ 第82号住居址 (第292・293図)

遺構 当住居址は第76号・77号住居址の北にあり、東は除地となっている。

プランは隅丸方形を呈し、規模 $4.6 \times 4.2\text{m}$ を測る。主軸方向は $N - 10^\circ - E$ である。壁高は北で 25cm 、南は低く $10\sim 15\text{cm}$ である。

床面は平坦で中央部はタタキが顕著であるが東と北の壁ぎわは軟弱である。カマドは西壁中央にあり焼土が残るのみである。カマドの左側は不定形な浅いピットが掘られている。

主柱穴は P_4 、 P_5 、 P_6 、 P_8 の4本で P_5 、 P_6 は壁ぎわに掘られるもので第27号住居址例と同様である。

遺物 遺物は図示したもののみで少ない。1は土師の壺である。非常に堅緻に焼かれロクロ整形形で、内面黒色研磨される。外面体下部から底面は丹念なヘラミガキが行われ、焼成とともに甲斐型壺を思わせる手法である。甲斐型壺にはみられない内面黒色研磨が行われており、甲斐型壺と黒色土器の折衷型とみられる。甲斐型壺は箕輪町中道遺跡に影響を受けた土器の存在が知られ

ている。

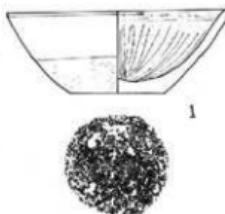
今回の出土によってその南限が伸びたこととなる。

2は須恵の環である。

土器に比べ石器が14点と多く出土している。内訳は打製石

斧・敲打器各5点、磨製始刃石斧・横刃形石器2点である。

時期は遺物少なく決め難いが、奈良・平安II期であろう。



② 第85号住居址 (第294・295図)

遺構 本住居址は第95号・96号住居址の南に位置している。

プランは不整の隅丸方形で規模5.7×5.3mを測る。長軸方向はN-80°-Wである。

壁高は30~40cmを測る。中央部を除いて壁ぎわは床面が軟弱で不整に回んでいる。荒掘りの痕跡と考えられ、タタキが不十分であったものと思われる。中央部床面は堅緻で小ピットが穿っている。

カマドは西壁中央に造られているが、右側に袖石を2個残すが封土はみられない。

主柱穴はP₃、P₄、P₇、P₁₂の4本で、P₈、P₉は入口施設に伴うものと考えたい。

遺物 土師・須恵があり、須恵が主体である。

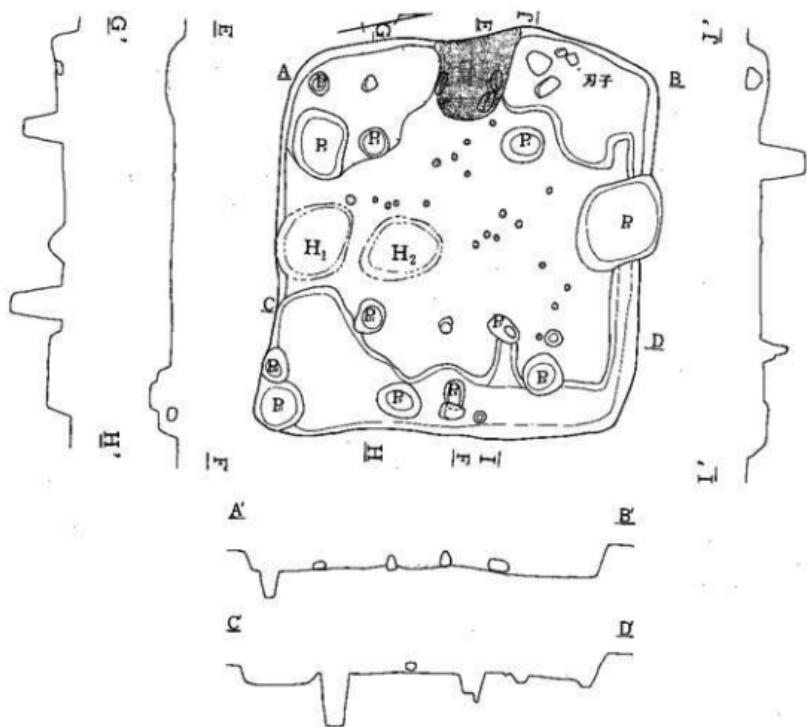
土師は壺のみである。須恵の环は高台持つもの(5~7)と持たないもの(3)がある。いずれも回転糸切りである。8・9は蓋、10・11は壺である。外に壺の破片が出土している。

鉄器は刀子2点(12・13)がある。

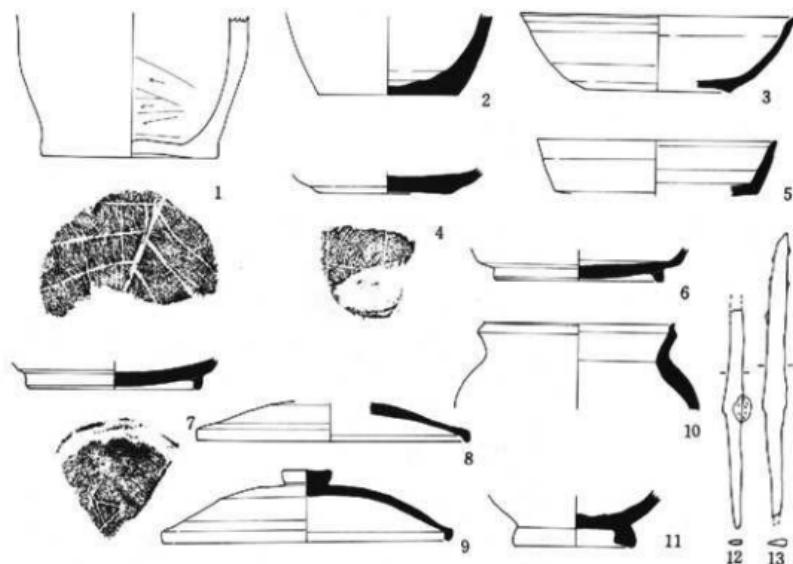
打製石斧1点が出土する。

時期は、奈良時代後半、奈良・平安II期である。

第293図 第82号住居址出土遺物
(1/3)



第294図 第85号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第295図 第85号住居址出土遺物（1 / 3）

⑩ 第86号住居址（第296・297図）

遺構 本住居址は第85号住居址の南西に位置し、南側は土手の搅乱によって壊されている。東は第92号住居址を切っている。

南側が不明であるが、プランは隅丸長方形を呈し、南北4.5mを測る。長軸方向はN-81°-Wである。

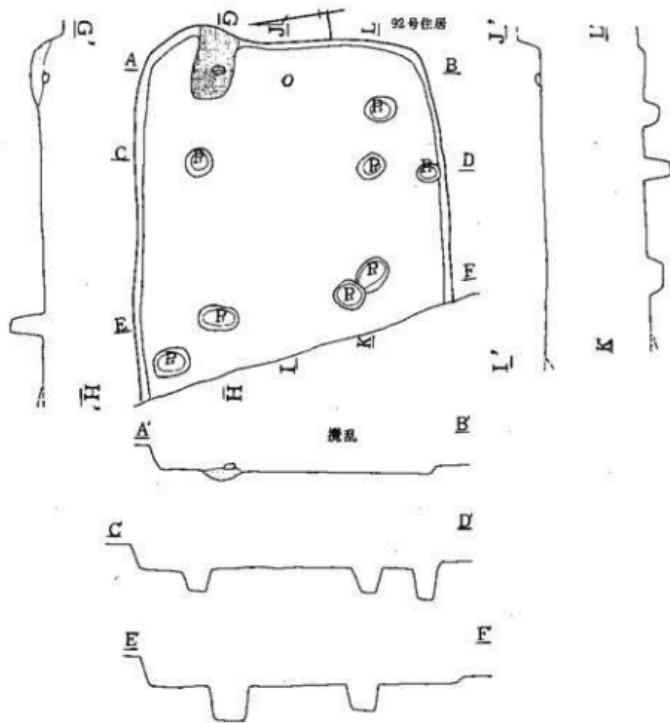
壁高は30~35cmを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。カマドは北東隅に位置し、焼土を残すのみである。

主柱穴はP₁、P₃、P₇の3本が検出されており、南東を入れて4本であろう。

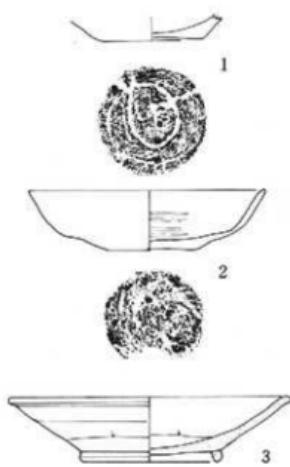
遺物 極めて少ない。図示したもの以外では、須恵の高台は壙と甕、灰釉の甕と瓶の破片があるのみである。

3の灰釉皿は光ヶ丘1号窯のものと思われる。

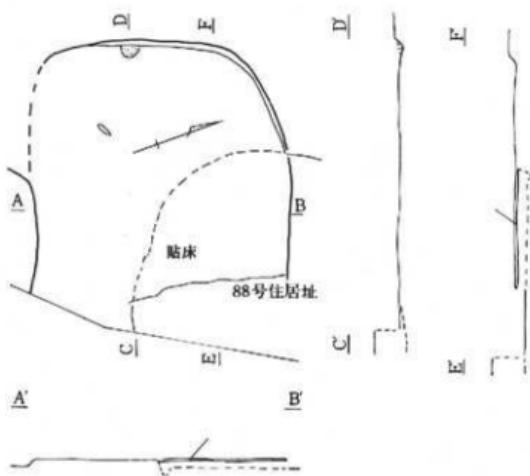
時期は奈良・平安IV期である。



第296図 第86号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第297図 第86号住居址出土遺物
(1/3)



第298図 第87号住居址実測図 (S = 1/80)

④ 第87号住居址 (第298図)

遺構 第89号住居址の南にあり、北東部は第88号住居址に貼床している。南は第90号住居址に切られている。東側は井により壊されている。

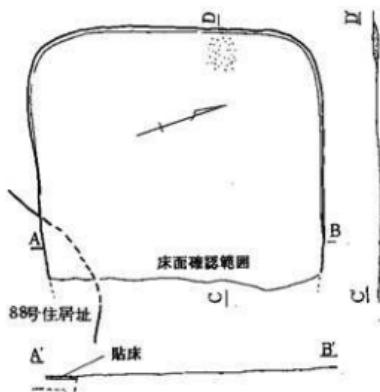
北西部にて壁を確認できたが南は不明である。プランは不明。床面は西側にタタキが良くみられたが、東側は貼床を含め軟弱である。

カマドは西壁に焼土を残すだけのものである。

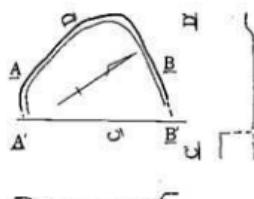
柱穴は検出できなかった。

遺物 床面上から土師の小片が出土したのみである。

時期は不明。



第299図 第89号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第300図 第90号住居址実測図 ($S = 1/80$)

⑤ 第89号住居址 (第299図)

遺構 本址は第56号住居址の南東にあり東側は埋立保存箇所となっている。

東側を除き5cmほどの壁高が認められたもので、東側ははつきりしない。南西部は一部第88号住居址に貼床をしているが、明確に床面の範囲をとらえることはできなかった。

プランは隅丸方形を呈すものの、東西の大きさは不明である。南北は4.0mを測る。

西壁やや北寄りに焼土が検出されており、カマドと考えられる。柱穴は検出できなかった。

遺物 図示できるものはない。土師の壺、須恵の壺・壺、灰釉の壺が出土している。

⑥ 第90号住居址 (第300図)

遺構 第87号住居址を切って南東部にある。大半は除地で未発掘となっている。

壁高は10cmを測る。プラン・規模等はまったく不明である。

遺物は土師器がわずかに出土しているのみである。

⑦ 第95号住居址 (第301・302図)

造構 本住居は第85号住居址の北に位置しており、北東にある第96号住居址を切っている。

北東部は古い井によって一部壊されている。

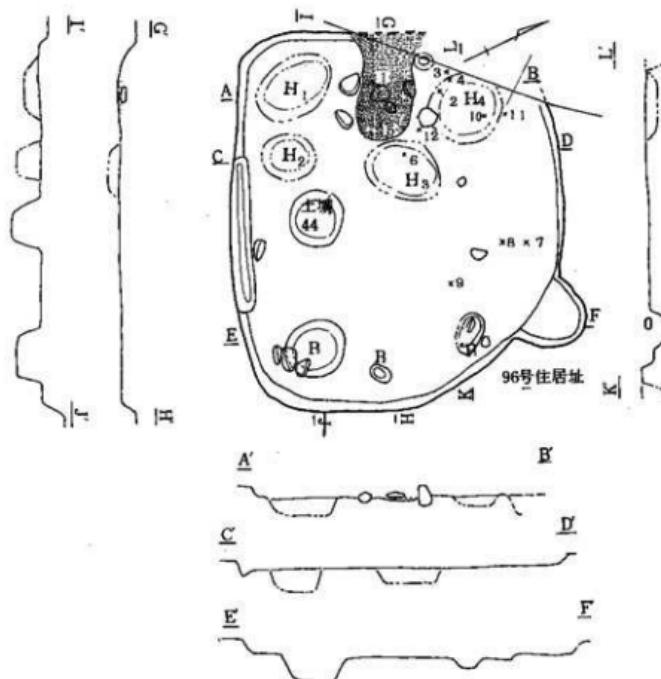
プランは南東部が丸くなっているが、一応隅丸長方形を呈すもので、規模は $5.4 \times 4.8\text{m}$ を測る。長軸方向はN-65°-Wである。

壁高は20cm前後で壁はなだらかである。床面はカマドの周囲に灰だまりが掘られるが、全体に固く堅緻である。周溝が南北中央部に一部みられる。

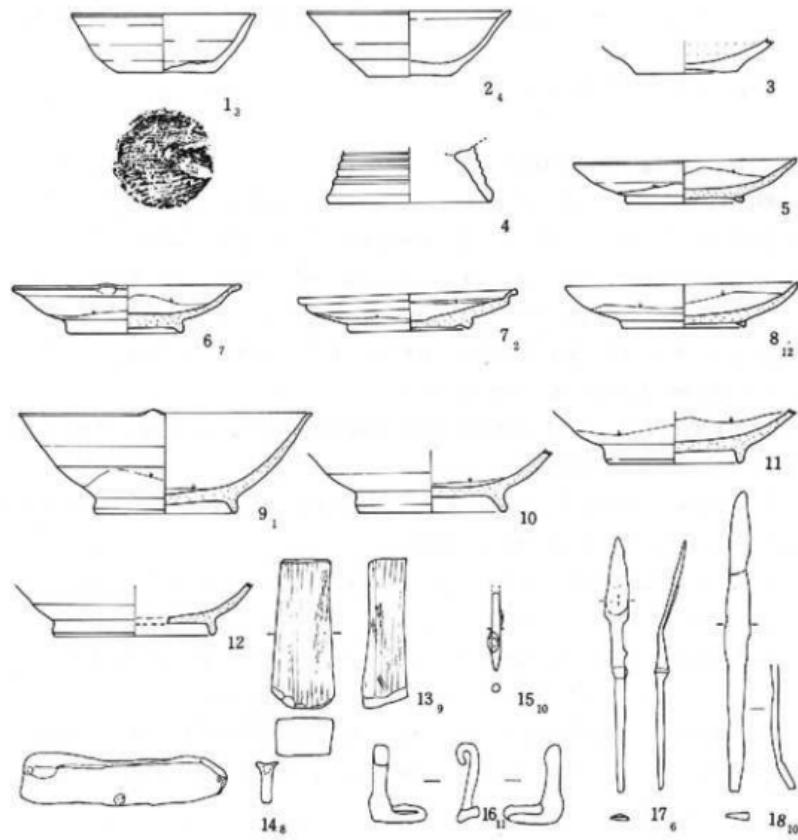
カマドは1.5mの奥行を持ち、両脇に袖石1個を残しているが大半はくずれ焼土のみである。

柱穴はP₁、P₃が検出されたがカマド側にはみられない。

遺物はカマド内とカマドの右側床及び灰だまりに集中するとともに南東部からも出土している。



第301図 第95号住居址実測図 (S = 1/80)



第302図 第95号住居址出土遺物（1/3）

遺物 固化できた割に量はあまり多くない。須恵は甕のみである。土師は環が主体で甕は2個のみられる。1～3の外にも環があるが黒色処理されるものは3のみである。1は底部切り離しか静止糸切りである。混在とは考えにくく問題を残す。

灰釉は皿（5～8）と壺（9～12）と瓶がある。7は折縁皿である。灰釉は総じて虎渓山1号窯期に比定されるものである。

鉄器は鋤先（14）、紡錘車軸（16）、刀子（17、18）と止金具と思われる16がある。

13は頁岩製の砥石である。

石器8点が出土している。打製石斧3、敲打器2、磨製の定角・蛤刃石斧各1点と石包丁1点である。

時期は、奈良・平安IV期である。

⑩ 第96号住居址（第303～307図）

遺構 第85号住居址の北に位置し、北には101号住居址、東には第100・105号住居址がある。南西部は第95号住居址によって切られている。北東部は古い井によって搅乱を受けている。

第62号住居址同様礎石を持つ大形住居址である。北部分がはつきりしないが、隅丸長方形を呈し、規模は $10.5 \times 8.9m$ を測ると思われる。長軸方向はN-57°-Wである。

壁高は20～25cmで浅い。床面は灰だまりが数多く掘られるが、全体に堅緻である。

カマドは西壁中央にあり、焼土を残すのみである。

礎石の基本はS₄-S₁₂-S₂₂の西を結ぶ区角で7200cmの方形である。北東壁ぎわにはS₁、S₂が直線をなしており多分北西部にもあったものであろう。

カマドの向脇にも対をなすS₂₇、S₂₈がある。外周の礎石は北西側を除き82～94cm中にあり、床面をわずかに掘り回めてすえられるものが多い。

南東壁中央に110cmの間隔をおいてS₁₆、S₁₇がすえられ、その内側には平盤な石が並べられている。入口施設に伴うものと考えたい。

S₂₂の東床面上より平瓶（第305図-1）の完形品が出土している外、遺物は南西に集中している。又入口と思われる床面から織物用錐石が6個集中して検出されている。

遺物 遺物は多い。1は器高4.7cm、底径3.7cmと小形の平瓶で完形品である。シャープな造りで、釉は体部上面のみハケ塗りされている。灰釉は他にハケ塗りの長頸瓶の破片が出土するのみである。

土師は甕が主体で壺がわずかにみられる。壺は回転糸切りである。

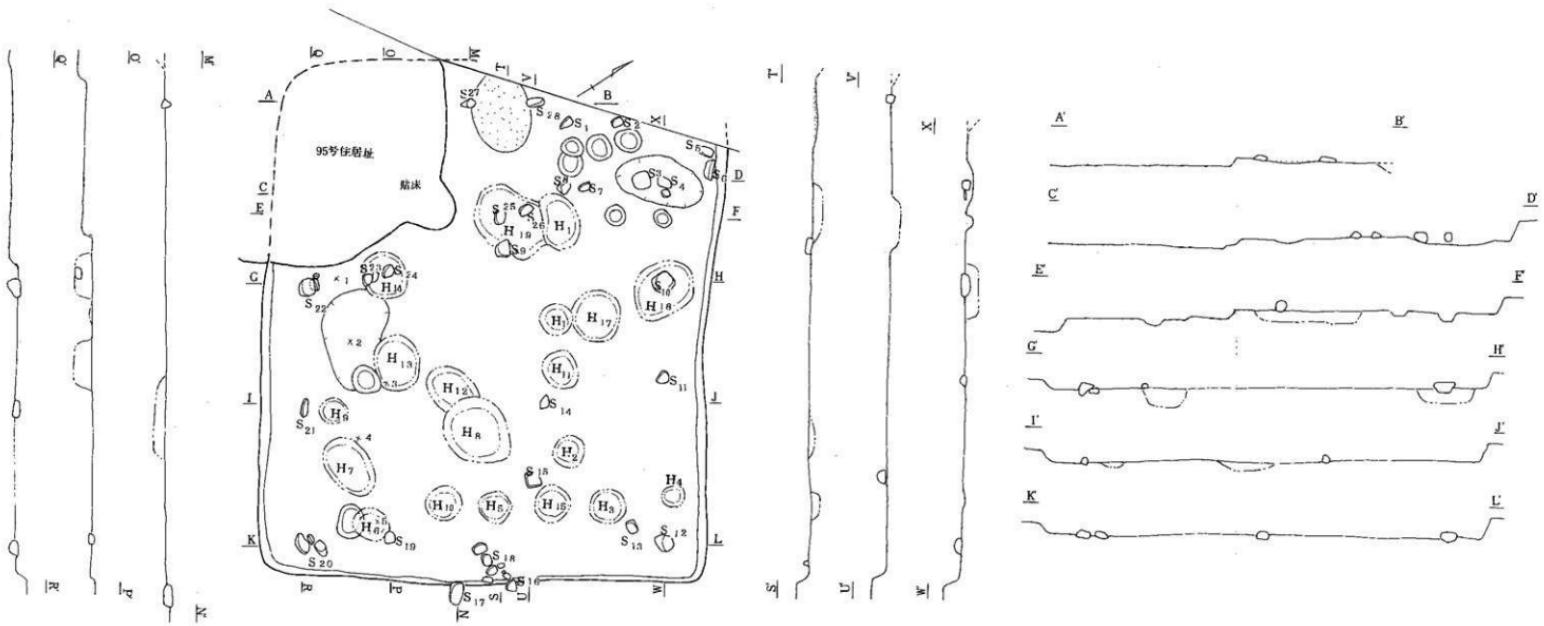
須恵は多い。図示したもの以外では甕と長頸瓶がある。壺は高台を持つもの（6、9、11）と持たないもの（3～5、7・8）とがある。底部切り離しはすべて回転糸切り技法である。

10は甕、12も同様であろう。13は鉢である。

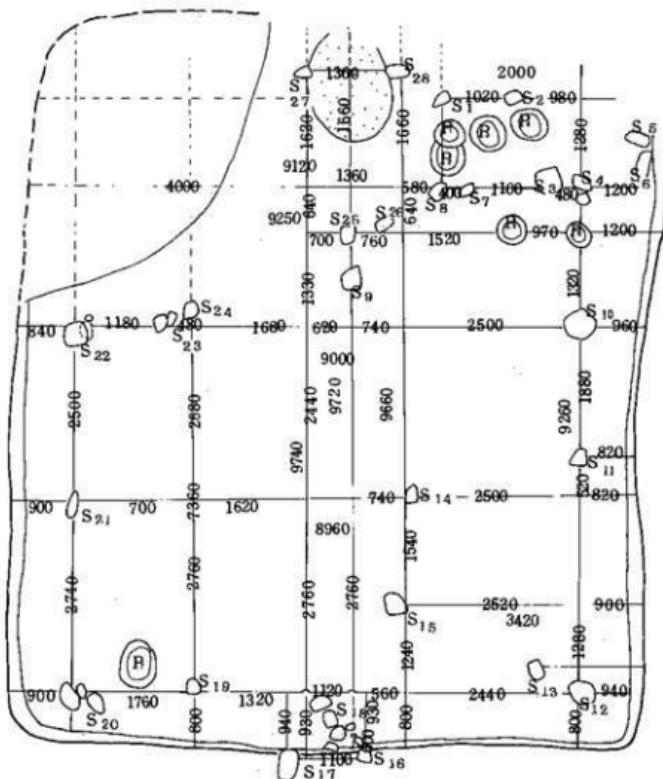
4は底外面に「大」の字の墨書を持つ。須恵の墨書例は珍しい。

編物用錐石（14～24）24点と石器14点が出土する。石器の内訳は打製石斧7、敲打器5、磨製の定角・蛤刃石斧各1点である。

時期は奈良時代から平安期にかけてのものと思われ、1の灰釉平瓶も同時期の所産である。



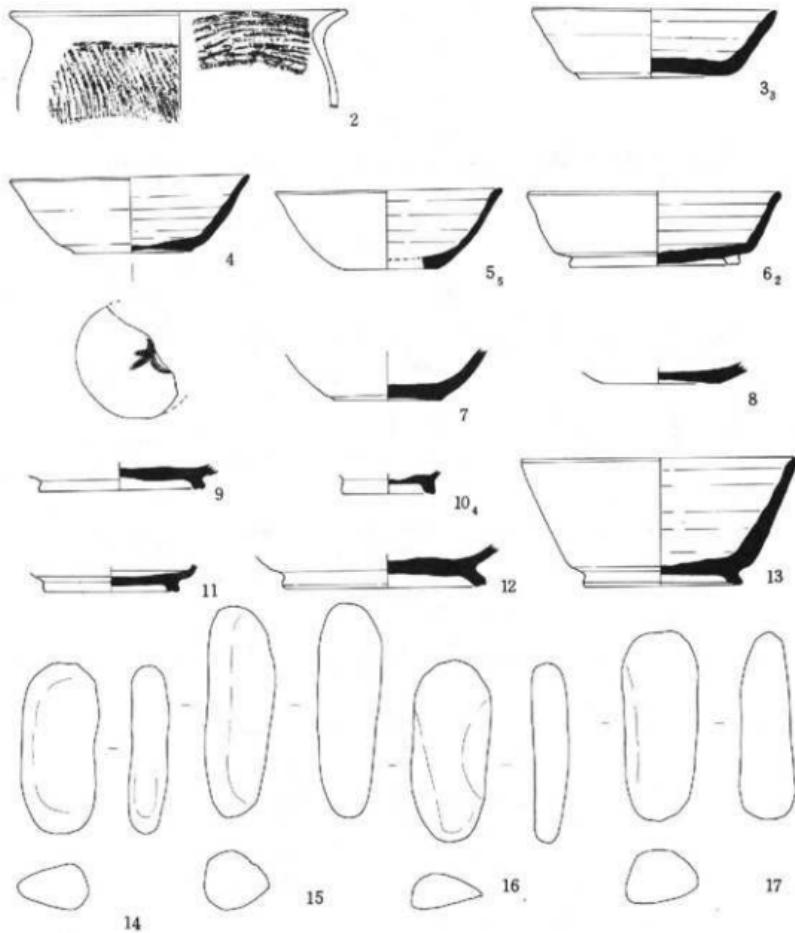
第303図 第96号住居址実測図 (S = 1/80)



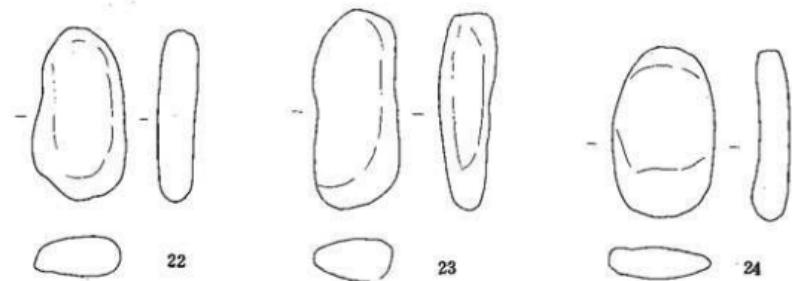
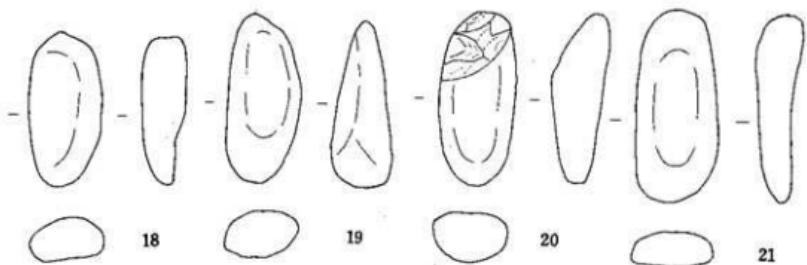
第304図 第96号住居址柱間計測表 (S = 1 / 80)



第305図 第96号住居址出土遺物 (1 / 1)



第306図 第96号住居址出土遺物（1/3）



第307図 第96号住居址出土遺物（1/3）

③ 第96号住居址（第134・308・309図）

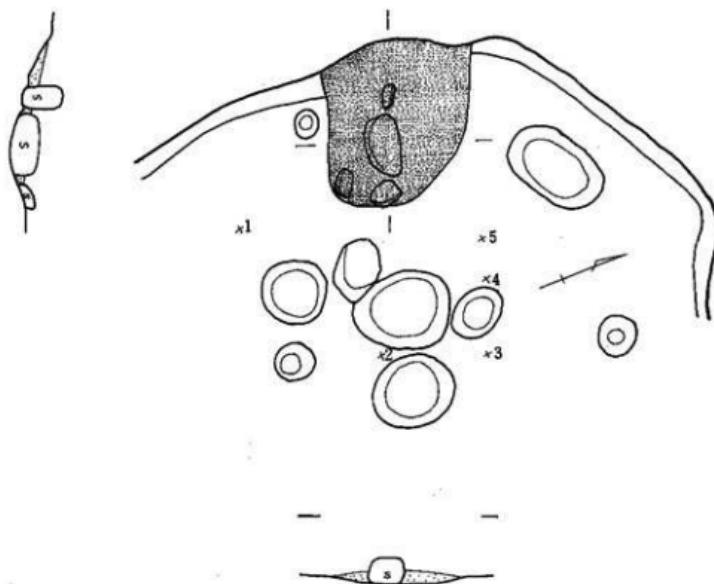
遺構 本住居址は第82号住居址の西にあり北西には第96号住居址、北には第100号、105号住居址がある。

縄文の第103号住居址と同一床面にて重複するものでプラン、規模等はまったくわからない。柱穴等には貼床をしていたものと思われるが確認はできなかった。

カマドは北西に造られている。破壊されたものか封土は認められず基底部に袖石と思われるものが3個ある。奥に方形柱状の花崗岩があり支脚石であろう。

柱穴はどれと確定することはできない。

カマド手前から多くの遺物が出土している。



第308図 第98号住居址カマド実測図 (S = 1/40)

遺物 遺物は豊富で器形を知り得るものも多い。良好なセットを示している。

土師・灰釉が主体で、須恵は22の短頸壺の外に壺と壺の破片が1点ずつあるのみである。

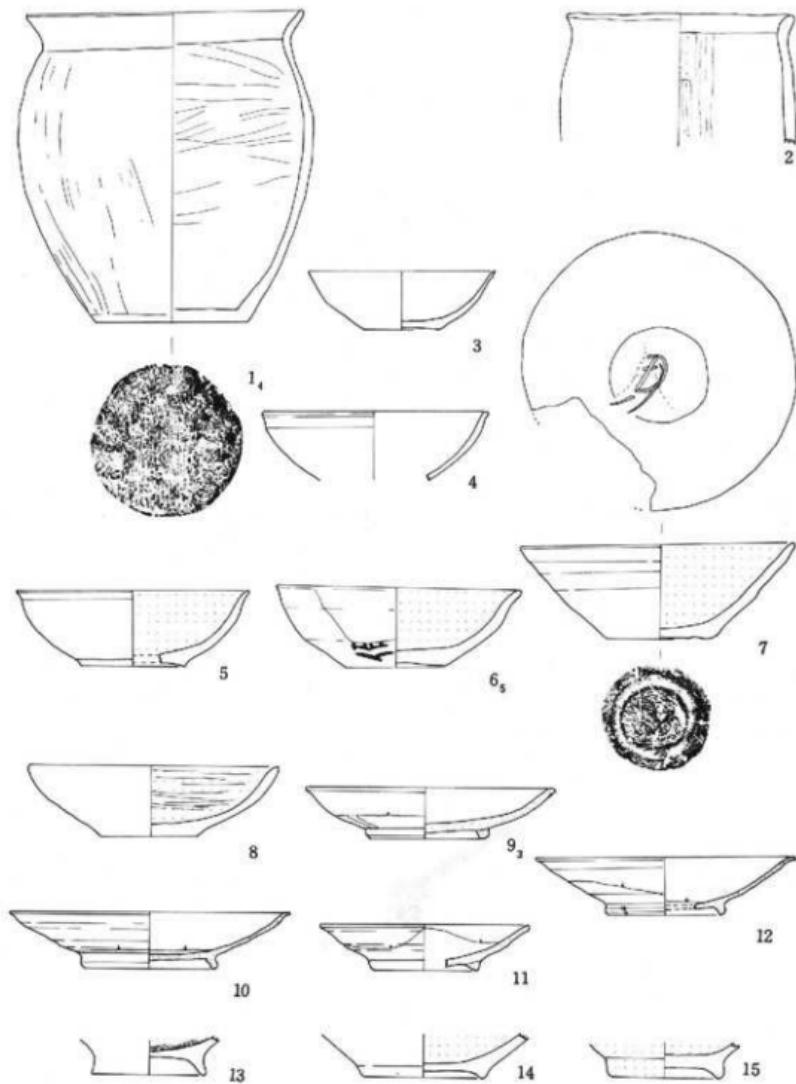
土師は壺・壺が主体で、壺は1、2の外にハケ目を持つ長胴壺がある。1は胴部がやや球状になるもの、2はなで肩のものでともにハケ目調整が施されている。壺は高台を持たないもの(3~8)と高台を持つもの(13~15)がある。口唇を薄くして外反するものが目立つ。内面黒色処理するものとそうでないものとが約半々である。16~18は高台付の壺でともに内面黒色処理され、研磨がみられる。

灰釉は図示したものの外に壺が3個体ある。9~12は皿、19~21は壺、23は瓶の胴部である。

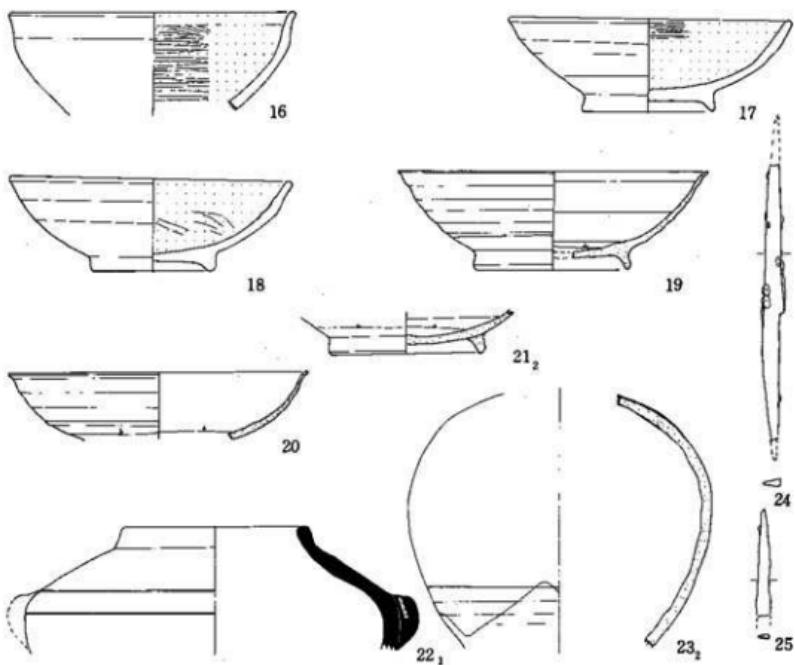
胎土は白灰色ないし灰白色のものがほとんどで東濃産光ヶ丘1号窯期のものである。

7は内面底に刻書、6には外面下部に墨書きがみられる。7は「男」、6は「作」であろうか。鉄器2点が出土とともに刀子(24・25)である。

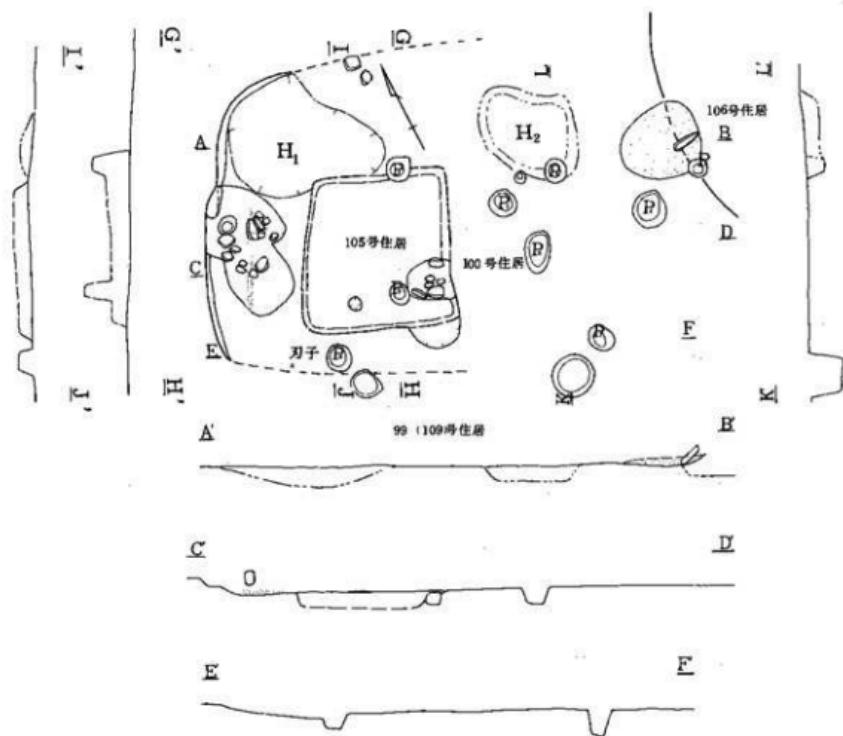
時期は奈良・平安IV期である。



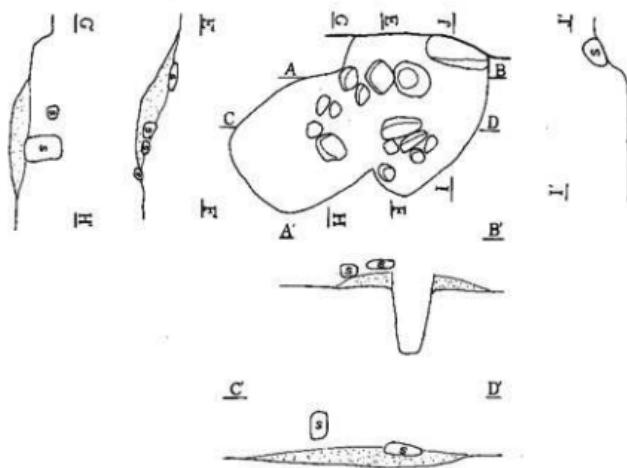
第309図 第98号住居址出土遺物（1 / 3）



第310図 第98号住居址出土遺物（1/3）



第311図 第100号・105号住居址実測図 (S = 1/80)



第312図 第100号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

④ 第100号住居址 (第311~313図)

遺構 当住居址は第96号住居址の北東に位置し、南側は第99号(109号)住居址と同一床面にて重複している。

東側は壁が認められず縄文時代の第106号住居址の西壁ぎわに焼土がみられた。西壁にも焼土がみられ重複住居址の可能性が強い。ともに封土は認められず焼土のみである。

壁は西側に認められたのみでプラン・規模は不明である。西側での壁高は10cm前後である。

床面は固く堅緻である。西のカマドの東に黒色土の落ち込みがあり黒色土をタタいたブロックが認められ、下部の住居址(第105号住居址)に覆土をタタいて貼床にしたものと考えられる。

北側には大きな舟底状の灰だまりが認められる。柱穴はP₁、P₃、P₇、P₈が検出されているが不規則である。

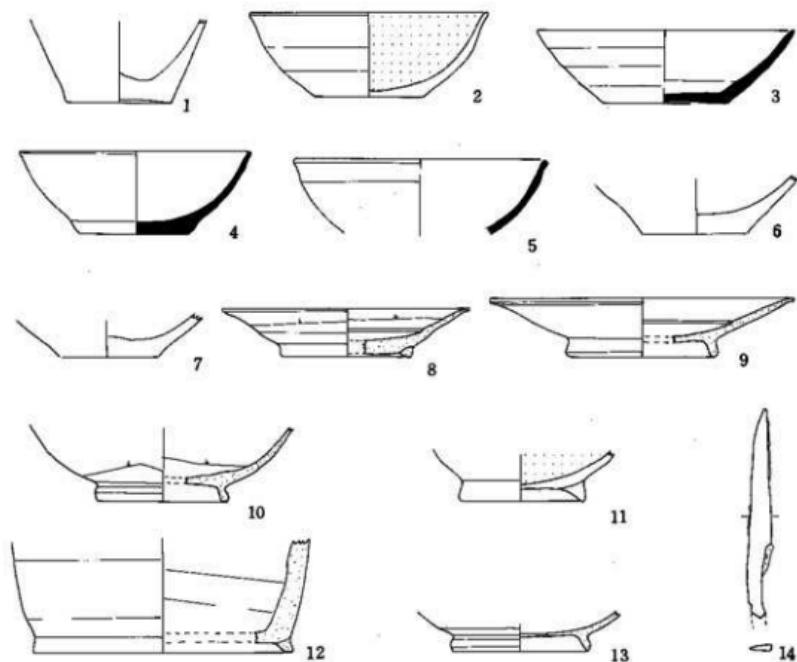
西のカマドの焼土の上には礫がみられる。

西カマドの左側床面上より刀子(第313図-14)が出土している。

遺物 遺物は多い。土師は図示したもの以外、強いハケ目を持つ長胴甌がある。2の壺、11の壺以外も破片がみられ、黒色処理されたものもある。

3~5は須恵の壺で軟質である。他に高台付壺と甌が出土している。

灰釉は図示したもの以外には12の同一破片と思われる瓶の肩が出土している。8・9は段皿、



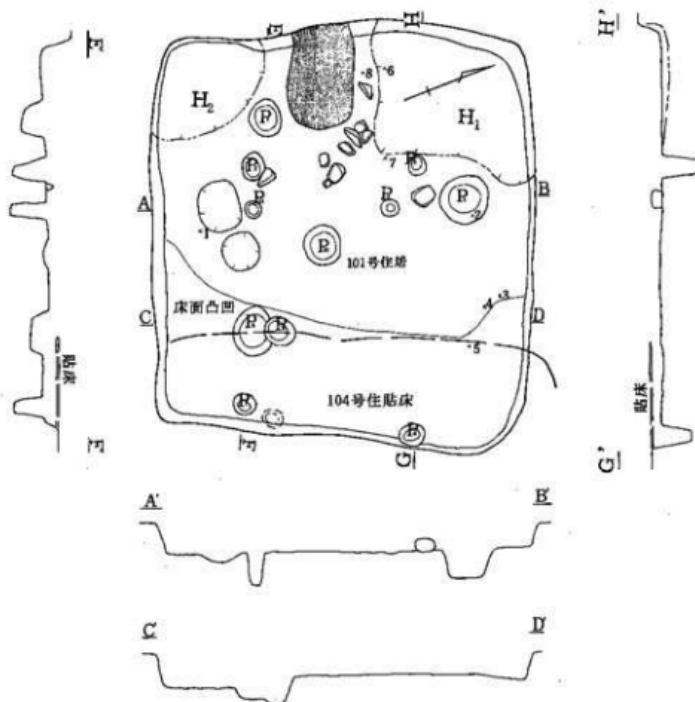
第313図 第100号住居址出土遺物（1/3）

10、13は壺である。

鉄器は刀子（14）1点が出土している。

石器7点が出土している。打製石斧6、横刃形石器1点である。

時期は奈良、平安IV期に属する。



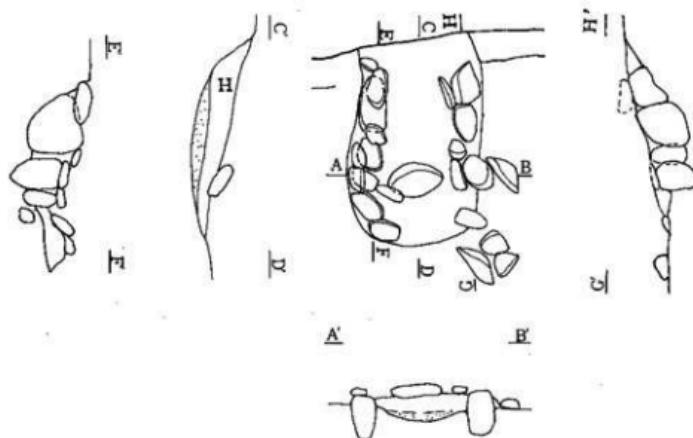
第314図 第101号住居址実測図 ($S = 1/80$)

④ 第101号住居址 (第314~316図)

遺構 本住居址は第96号住居址の北東に位置しており、北側には第114号住居址がある。東側の第104号住居址が当址の覆土上に貼床しカマドを造っている。

プランは長方形に近い隅丸方形で、規模は $5.9 \times 5.4\text{m}$ を測る。長軸方向はN-70°-Wである。壁高は40cm前後で、第104号住居址との床面差は20cmである。床面はカマドの両脇には灰だまりがあり、東部分はロームブロック状になっており掘り下げるときあわただ状となる。荒掘りの痕跡であろう。

カマドは西壁やや南寄りにあり、奥行150cmを測る。両脇は袖石が見事な石組をみせ、ロームが覆っている。



第315図 第101号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

主柱穴は P_2 、 P_3 、 P_6 、 P_7 の 4 本である。カマドの反対側の柱穴が壁ぎわに掘られ第27号住居址例と同列である。

P_2 の南東床面より鎌 (第316図-10)、南東部から小形甕 (3)、鐵製紡垂車軸 (4)、灰軸長頭瓶 (8)、カマド左側から刀子 (12)、鐵製紡垂車 (11)、 P_3 南脇から刀子 (13)、 P_5 東より鐵鎌 (14) が出土している。

遺物 遺物は多いが主体は土師の甕と須恵の甕の破片で図示できるもの少ない。灰軸は 6 の壠と 8 の長頸瓶のみである。

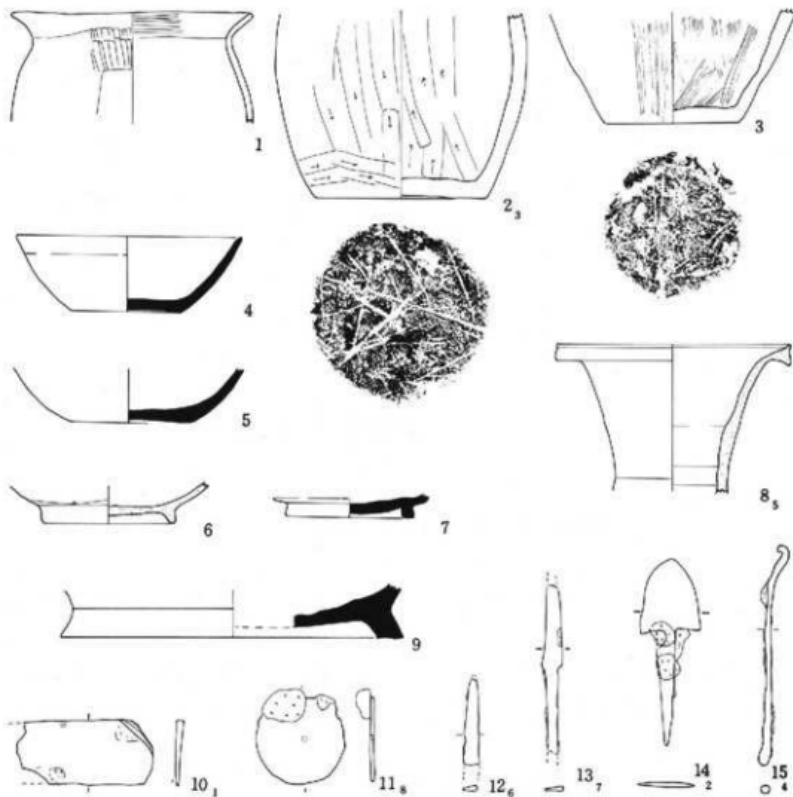
土師は若干壊がみられる。甕は 1 の小形甕以外は長胴甕で、ハケ目を持つ。

須恵は壺 (4・5)、高台付壺 (7)、壺 (9) と甕である。

鉄器はすでに述べたように鎌 (10)、紡垂車 (11、15)、刀子 (12、13) 平根鎌 (14) と器種豊富である。

石器17点が出土している。内訳は打製石斧 9、敲打器 6、大形粗製石匙、特殊磨石各 1 点である。

時期は奈良・平安Ⅲ期と属する。



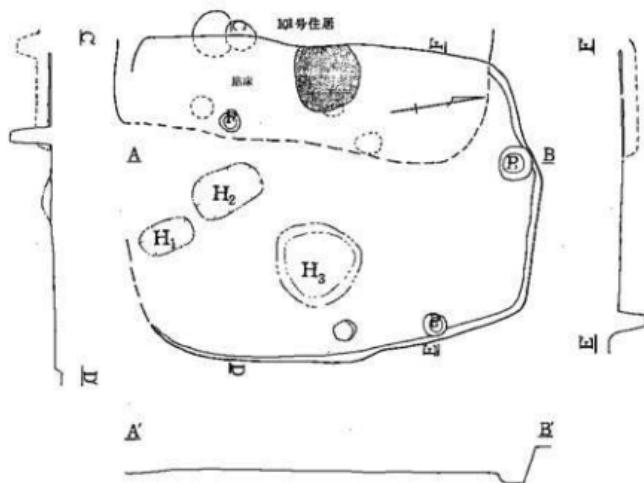
第316図 第101号住居址出土遺物（1/3）

④ 第104号住居址（第317～319図）

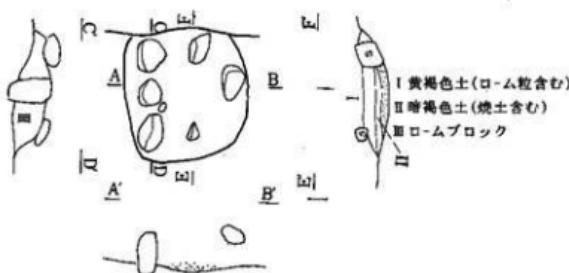
遺構 本住居址は第101号住居址の東にあり同住居址に貼床してカマドを造っている。

南側は壁が確認できなかったが、プランは隅丸長方形を呈すと思われ、規模は $6.0 \times 4.4m$ を測ると推測される。長軸方向はN-81°-Wである。

壁高は北側は35cmを測るが南に行くに従い低くなり南東部で10cm南側は壁がない。西側3分の1は第101号住居址覆土にロームを5cmほどつき固め貼床している。貼床以外の床面も固く堅緻である。



第317図 第104号住居址実測図 (S = 1/80)



第318図 第104号住居址カマド実測図 (S = 1/40)

カマドは西壁中央に造られ、袖石はわずかに認められるのみでくずれしている。柱穴はP₁、P₃の2本が検出されている。

遺物は少ない。図示したもの以外では内面黒色研磨の環と須恵の壺、灰釉の破片がみられる。

鉄器は4の刀子と5の鐵鏃が1点ずつ出土している。

編物用錐石6点と打製石斧5点が出土する。

時期は奈良・平安Ⅲ期である。

④ 第105号住居址

(第311・320・321図)

遺構 当住居址は第100号住居址西カマドの手前にあり当址の覆土がタタかれた跡とされている。

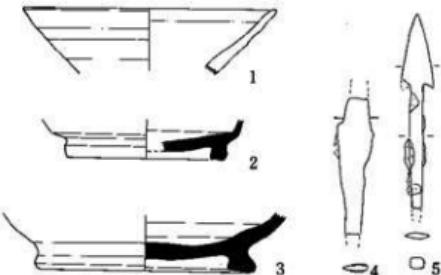
プランは $2.2 \times 2.0\text{m}$ を測る隅丸方形で南側がわずかに広くなる。長軸方向はS-30°-Wである。第100号住居址の床面差北側で40cm、南側は20cmである。床面はやや北に傾き固く堅密である。

カマドは東壁南寄りに造られている。袖石と支脚石を持ち残存状態は良好である。

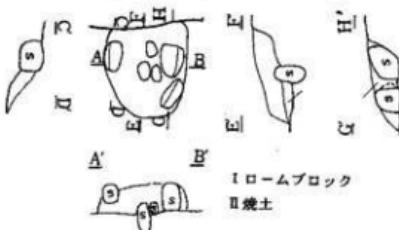
柱穴はカマドの手前にP₂が検出されている。

遺物 遺物は少ない。灰釉は出土していない。

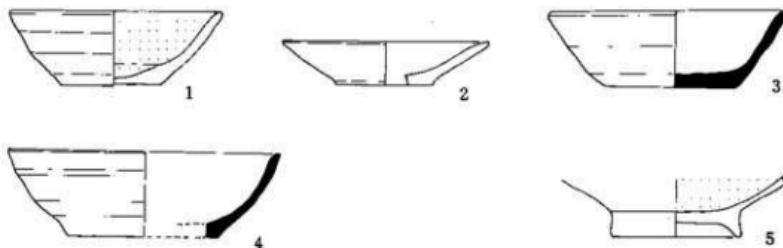
土師は壺はなく高台を持たない壺(1・



第319図 第104号住居址出土遺物 (1/3)



第320図 第105号住居カマド実測図 (S = 1/40)



第321図 第105号住居址出土遺物 (1/3)

2) と堀(5)が出土している。1, 5は内面処理される。

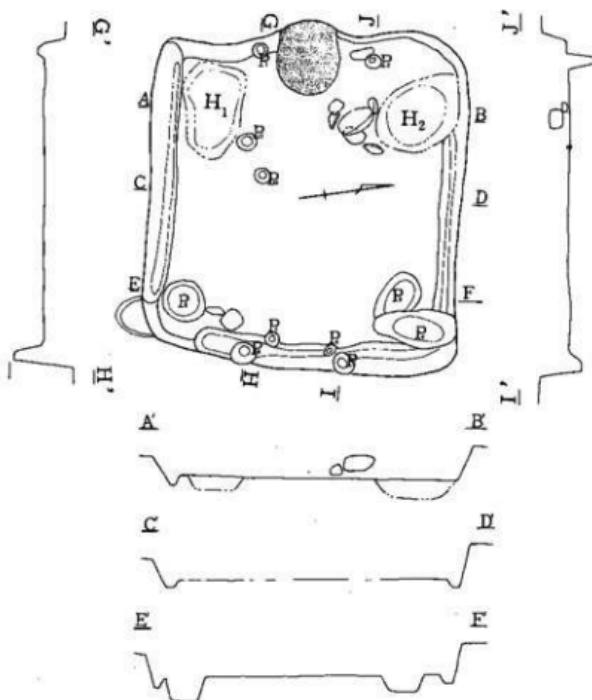
須恵は3、4の環の外に高台を持つものと甕がある。

時期は決め難いが奈良・平安Ⅲ期であろう。

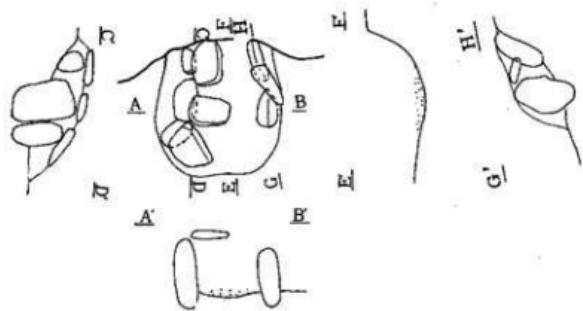
④ 第107号住居址

遺構 当址は第104号、第111号、第115号住居址の間に床面のみ検出されたもので、プラン・規模などはまったく不明である。

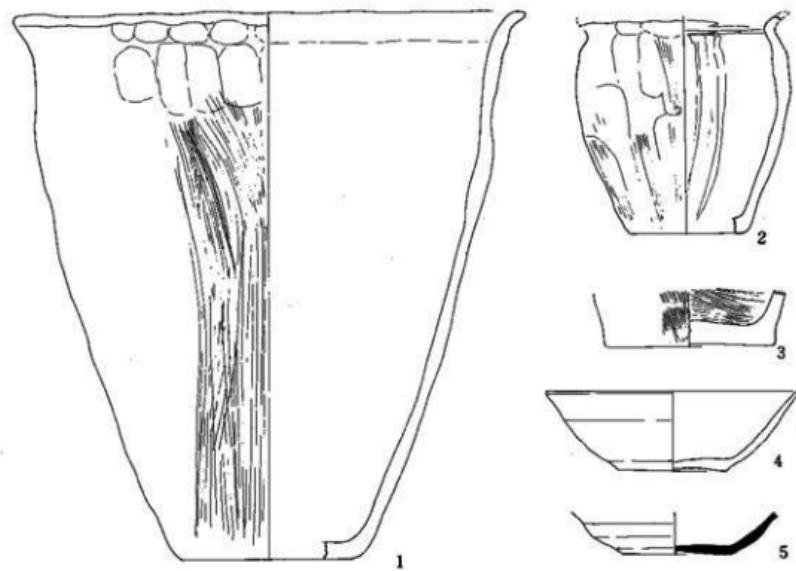
床面上より土師・須恵の小片が出土したのみで、時期は不明である。



第322図 第114号住居址実測図 (S = 1/80)



第323図 第114号住居址カマド実測図 ($S = 1/80$)



第324図 第114号住居址出土遺物 (1 / 3)

⑥ 第114号住居址（第322～324図）

遺構 本住居址は第101号・104号住居址の北に位置し北から西にかけては該期の住居址は空白となっている。

プランは隅丸方形を呈し、規模は4.7×4.5mを測る。長軸方向はN-80°-Wである。

壁高は北で50cm、南は低くなり30cm前後である。西を除き周溝がある。床面は固く堅緻で、カマドの左と北西隅に灰だまりがある。カマドの右手前に床面より10cmほど浮いて集石がみられる。

カマドは西壁中央にあり、石組の袖石を持ちロームが覆っている。柱穴はP₁、P₂、P₅、P₈と思われ、P₆、P₇は入口施設に伴うものであろう。柱穴4本とも壁ぎわに掘られる例は珍しい。

遺物 遺物は少ない。灰釉は出土していない。1・2は土師の甕でともに口唇がわずかに外反するもので、頸部に製作時の指頭痕を残している。

須恵は5の环以外に甕がある。

時期は決め難いが奈良・平安Ⅲ～Ⅳ期と思われる。

⑥ 第120号住居址（第325、326図）

遺構 本住居址は第114号住居址の北東に位置し、西の第119号住居址を切っている。その西に第124号住居址がある。東側は除外地で大半は未調査となっている。

プランは隅丸形を呈すものであろう。壁高は25cm、第119号住居址との床面差は15cmである。南側から西側一部に周溝がみられる。床面は固く堅緻である。

北西隅に焼土が検出されている。カマドと可能性がある。柱穴ははっきりとしたものは検出されていない。

南西隅床面より、鉄錆（1）と土師の环（2～4）が出土している。2と4は入子となっていた。また西壁ぎわ中央より須恵の短頸甕（8）と高台付环（6）が出土している。

遺物 調査範囲の割りには遺物が多い。土師は环（2～4、7）と甕（1）があり、外内面黒色処理の环、高台付环もある。7は足高高台である。

5は灰釉の輪花壇の外に壠と瓶がある。須恵は6の高台付环と8の短頸甕がある。8は双耳壺であろう。

鉄器は9の鉄錆が1点出土している。

打製石斧1点が出土する。

時期は奈良・平安VI期である。

第325図 第120号・124号(119号)住居址実測図(S=1/80)

